

ア！安全・快適街づくりニュース

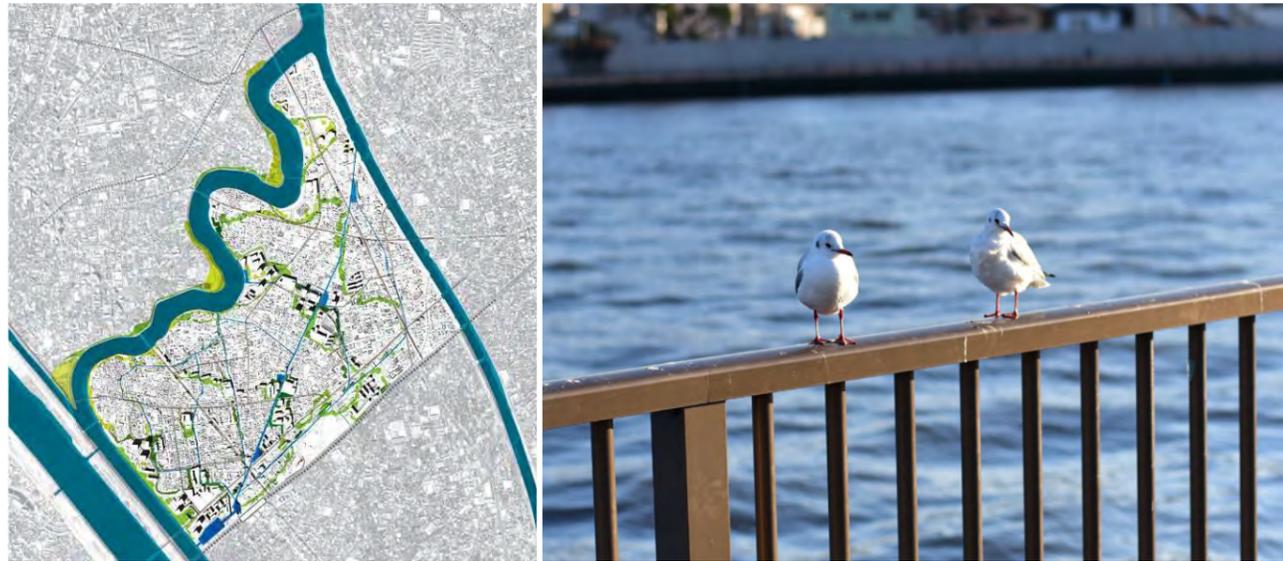
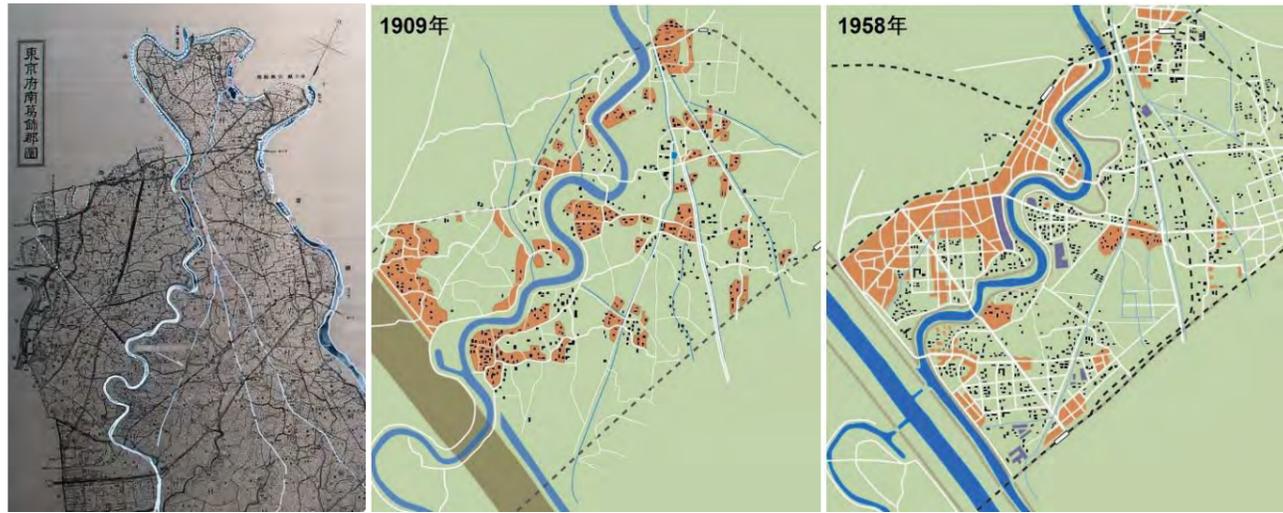
2021年9月 vol. 27 2020年度総集編

人を育み街づくり 中川

朝日映る
空の青い山
夕日は染まる
スカイツリー
老舗の街
9はむ街
森羅の家
万葉の昔から
人を育み街づくり
中川
如重 石川金治



特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり



東京新聞「<備えよ！首都水害>浸水と共生 親水の街へ 葛飾区が30年構想」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/36030> (2020年6月17日)より

表紙・裏表紙の写真の解説

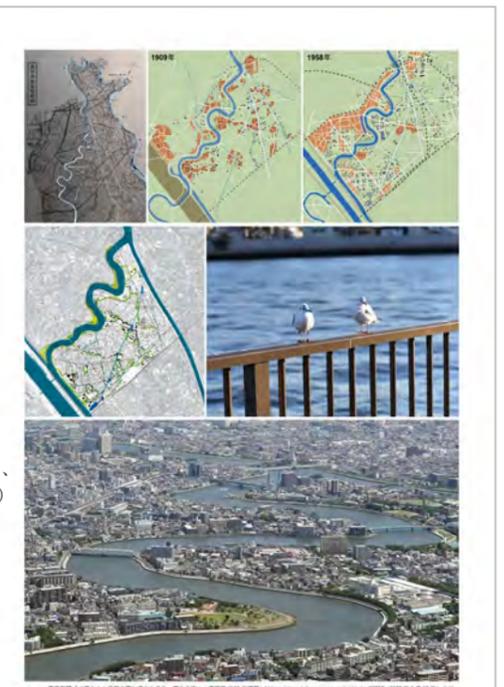


特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり
葛飾区総合スポーツセンター裏の中川テラスの土手で遊ぶ古川兄弟。(撮影：古川)

中川七曲りの変遷
左から1905年、
1909年、1958年。

学生が構想した、
2058年の新小岩
北地区の将来像。

中川テラスに時々
現れるカモメ。
(糞害がひどいようで、
餌をあげてはいけません)
(撮影：古川)



川に囲まれた葛飾区。浸水しても日常生活を持続できる「親水の街」への試みが始まっている。=東京新聞社へリ「まなづる」から

東京新聞 2020年6月17日朝刊
「<備えよ！首都水害>浸水と共生 親水の街へ 葛飾区が30年構想」より

江戸時代から地域を見守り
続けるイチョウの木。



テラスで遊ぶ、土手で遊ぶ、釣りをする、
古川兄弟。(撮影：古川)

オックスフォード運河
とナローボート。
(撮影：塩崎)

テムズ川氾濫原の牧草地。
(撮影：塩崎)



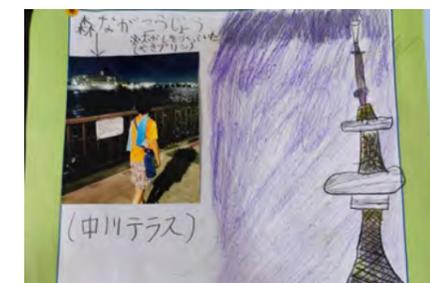
イランのジャングルと最高峰 *Damavand* 山。

韓国・漢江の
親水空間。
堤外地にプー
ルがある。

目次

はじめに	
コロナ禍と NPO 活動	成戸寿彦 4
令和 2 年度の活動結果について	宇賀俊夫 6
理事から	9
「葛飾区水害ハザードマップを読み解く」動画作成	中村 仁 10
コロナウイルスの可視化と地域に封じ込め【明日から経済活動復帰】	中川榮久 12
「地域社会が社会全体を変えた」～そして次のステージへ～	加藤孝明 14
いま進めたい弾力社会	渡邊喜代美 17
第 14 回 Web「輪中会議」(2021)	全記録：渡邊・南 21
第 14 回 Web「輪中会議」(2021) プログラム	22
第 14 回 Web「輪中会議」(2021) 議事の流れ	24
第 14 回 Web「輪中会議」(2021) のリアルな記録	26
第 0 部：はじめに	26
第 1 部：基調講話	30
第 2 部：多様な活動報告と意見交換	50
第 3 部：次の展開を考える「とっかかり」を発想してみる	70
第 14 回 Web「輪中会議」(2021) を振り返って	77
第 14 回 Web「輪中会議」(2021) の総括と今後の展開	82
学校から	85
～中学生が学ぶ地域の防災～ 地域と連携できる幸運に感謝して	太田恵理子 86
コロナ禍の輪中会議に参加して	田中莉乃・大金咲良 90
千葉横断道中での発見	勝又一喜 91
受動的から能動的に	小豆嶋勇誓 96
農業と防災の関係	増淵桜太郎 98
明日に伝えるまちづくり：学校支援の現場から	南 貴久 99
出前授業を受けた小学生たちの感想文	101
出前授業講師を担当して一私自身の学びも多く一	岸田暁郎 110
新小岩北地区近隣小学校への出前授業（外部講師）を終えて	竹本利昭 110
まちの歩みから「まちのあり方」「まちのフォルム」を学び伝えること	寺島 玄 111
地域の方々から学ぶ	渋谷英一 112

地域から	113
「取材」を通して気が付いた共助の大切さ	山岸朋子 114
第 14 回 Web「輪中会議」参加と私の活動	久保欣一 115
輪中会議に初めて参加して・・・	濱野祐子 116
こんな時に始めるなんて fuku lab	鈴木ひろみ 117
行政から	119
川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（4）	情野正彦 120
葛飾区水害ハザードマップ説明会を開催しました	村山宏子 122
高台まちづくりの推進に向けて	大田和明 124
事務局から	126
「天サイ！まなぶくん」の広がり「天サイ！まなぶくん 2」	古川 修 127
令和 2 年度葛飾区地域活動団体助成事業	
「親子で語り継ぐ大災害時の避難について」	増澤一朗 128
会員から	129
第 14 回輪中会議に参加して一河川災害への備えに思う	宮本伸子 130
「食」のチカラ、どこまでまちづくり・防災に活かせるか？	齋藤由里子 131
輪中会議に参加して	吉満隆裕 132
Web 上でカスリーン台風の足跡を訪ねて	南 貴久 133
近況報告：英国にて気づいたこと	塩崎由人 138
漢江（ハンガン）公園の浸水対応型施設物の設置による浸水への備え	金 栽澁 140
Community engagement and sense of belonging in disaster prevention landscape: An international student's experience of Katsushika city Waju Kaigi	ダシュティ ソヘイル 145
編集担当から	151
注目しよう！新聞記事	152
新小岩北地区における取り組みと系譜（年表）	158
表紙の書の紹介 / 編集後記	164



コロナ禍と NPO 活動

成戸 寿彦

NPO ア！安全・快適街づくり 理事長

昨年から続く新型コロナウイルスは、わが NPO 活動にも大きな影響を及ぼしました。昨年 3 月に予定し 5 月に延期して様子を見た輪中会議は中止せざるを得ませんでしたし、6 月に予定した総会も一堂に会することはできず書面議決とせざるを得ませんでした。また、毎月葛飾区内の事務所で開いていた事務局会議も開催が困難になり、昨年 6 月より定例的な Web 方式に切り替えざるを得ませんでした。

しかしこうした状況にもかかわらず、皆さまのご尽力で活動は活発に行われました。

まずこの年の活動の柱の一つとしていた関東地域づくり協会の公益助成事業に応募し、『災害タイムラインアプリ「天サイ！まなぶくんタイムライン」』に対して助成が受けられたことが挙げられます。

このアプリの開発を進めるには多くの調整が必要でしたが、毎月の事務局会議に加え独自の調整の場を Zoom 方式による Web 会議にて行うことで乗りきることができました。こうした場を提供していただいた加藤先生と運営していただいた南さんには、感謝申し上げます。このアプリの内容は当初「タイムライン」を軸にしたものを想定していましたが、調整していく過程で、東新小岩七丁目町会が行っている赤旗・白旗活動が激しい雨や夜間ではわかりづらいことからこれをアプリ化したものへと切り替えていきました。

内容や作成過程についてはこののち各ページで詳しく述べられますが、「共助支援アプリ」であること、「SDGs 誰一人取り残さない」こと、そして「近助を共助が見守る」ことがポイントとなります。今年度の枠組みを作成するにあたり、東新小岩七丁目の皆様には町会会館での現地実験にご協力いただきました。コロナ禍のなかで三密に配慮した実験でしたが、感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、このアプリは洪水のみならず地震時にも幅広く活用可能なことが特徴ですが、関東地域づくり協会からは今年度も助成を受けられることが決まりましたので、共助支援アプリ「天サイ！まなぶくん II」として多くの町会でも活用が可能になるように内容を充実させてまいりたいと考えています。

次に出前授業ですが、コロナによる学校活動が制約される中、各々の学校の校長先生はじめ皆さまのご協力により 9 月から予定を組んでいただきました。最終的には、保育園と中学校の各 1 回を含み全体で 11 回と、ほぼ予定どおり

実施することができました(☞ P.99-112,128)。マスクやフェイスシールド、そして検温などを行いながらご協力いただいた講師のみなさんをはじめ、ご苦労いただいた皆様に感謝申し上げます。今年度も引き続き「葛飾区地域活動団体助成事業」に応募し、出前授業「親子で語り継ぐ大水害時の避難について」を行ってまいりたいと思います。厳しい状況の中ではありますが、引き続きよろしく願いいたします。

ところで昨年の輪中会議開催は断念しましたが、今年は Web 方式を中心にして、5 月 9 日に開催しました(☞ P.21-84)。「洪水とコロナは正しく怖がる」ことを念頭に置き、現地のサテライトは人数を絞り三密を避けるなど徹底した対策を講じました。

参加者は、サテライト 11 名と上平井中学の 7 名を含んで 75 名ほどの参加をいただき、その 1/3 ほどの皆様が初めて輪中会議に参加いただきました。

このように Web 方式は初めての方が参加しやすい反面ではこの方式になれない地元の方々の参加が少なかったなど、課題も見えてきました。これからの輪中会議をどのように運営するのか、コロナの感染状況を勘案しつつサテライトを効果的に活用して地元の皆様が参加しやすいように工夫してまいりたいと思います。

さて今年度行うべき課題はほかにも多々ありますが、中でも NPO 20 周年となる来年に向けてどのような記念事業を行うかを検討しておく必要があります。わが NPO は、2002 年 6 月に設立総会を開催し同年 10 月に設立登記されました。石川金治さんが設立してより来年度は 20 周年目を迎えることとなります。

今までの事務局会議において記念事業を行うことで皆さんの認識は一致していますが、コロナ禍のなかの限られた時間で輪中会議の開催や「天サイ！まなぶくん II」の調整に時間を要したこともあり、十分な議論をしていません。この両者が一段落した今、早い機会に調整し準備に入りたいと思います。

この機関紙の表紙に設立者石川金治さんご自身の書によるご自身の詩を入れることにしていますが、その詩の中ほどに「老驥千里(ろうきせんり)」という言葉があります。これは杜甫の言葉で、「老驥(れき)に伏するも志千里に在り」という言葉からとっています。老驥というのは老いた馬で、櫪というのは馬小屋です。年とった馬は馬小屋にあっても千里を走る、そういった志は持っている。言ってみれば、「年は取っても志は高いところにある」という内容です。

石川さんの設立当初のこうした思いを大切にしながら、これからも地域の皆様とともに活動してまいります。ご協力いただきますよう、よろしく願い申し上げます。

令和 2 年度の活動結果について

宇賀 俊夫

NPO ア！安全・快適街づくり

令和 2 年度の活動はコロナ禍の蔓延防止のために 3 密を避けることになり、一堂に集まったの活動が不可能になるなど大きな制約を受けることになりました。事務局会議も 4, 5 月はメールによる資料・意見交換で行われましたが、6 月からは毎月 Zoom を使った会議を行うことで相互の連絡・討議を行うことにより、活動を継続することが出来ました。その結果をご報告いたします。

1. 輪中会議の開催

「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」の活動として実施してきた輪中会議はコロナ禍の影響で開催日を変更して開催すべく努力しましたが、緊急事態宣言の発出もあって開催を見送りました。ただ、2 年続けての開催見送りは避けようと令和 3 年 5 月に Web 方式で開催することになり準備を進めています。なお、自宅からオンラインでの参加が出来ない方には、新小岩北地区センターの会議室に三密を避けてお集まりいただき、そこから Web で参加いただくというハイブリッド方式での開催を考えています。テーマは「親水・浸水×まちづくり・人づくり×近所・近助」で、共助の中核をなすご近所の皆さんによる「近助」の重要性にスポットを当てていくことを考えています。

2. 19 号台風襲来時の避難行動に関する調査

一昨年の台風 19 号襲来時に生じた新小岩北地区住民の避難行動におけるトラブルについて関係者へのヒアリングを実施しました。その結果、区と避難所運営を支えている町会との連絡が不十分だったことが明らかになりました。この点についてはすでに町会側から区にも問題提起されており、今後改善されることが期待されています。また、この調査結果は共助支援アプリ「天サイ！まなぶくん II」の開発にも活用されています。

3. 「災害タイムラインアプリ『天サイ！まなぶくんタイムライン』」の開発

昨年度末に関東地域づくり協会に助成申請した「災害タイムラインアプリ『天サイ！まなぶくんタイムライン』の開発」については荒川下流河川事務所、葛飾区役所の推薦を得て助成を受けることが出来ました。ただ、助成金額は申請額に対し三分の一に減額されたため、開発内容について絞

り込みを行い、災害時の救助に大きな役割を果たすことが期待される共助を支援するアプリの開発を行うことにしました。具体的には災害発生時に救助を求める人が赤旗を立てたときに救助要請者の周辺の会員に自動的に通知され、救助可能な会員は白旗を上げて救助に赴くこと、もし現場について一人では救助が難しいときにはオレンジの旗を出し追加の支援者を募ること、救助が完了したときはその旨地域の管理者（町会本部を想定）に連絡すること、この間地域の管理者は全体の動きを注視し、必要な支援を救助者に行うというものです。

当面活動は町会単位で実施するものとし、予め登録した町会員に限定して使用可能なものとするにしました。そこでモデル地区として選んだ東新小岩七丁目町会で、出来上がったプロトタイプのアプリを使ってオンライン方式による実機テストを実施し、問題点の抽出と解決を図った上で、成果品として関東地域づくり協会に提出しました。

併せて来年度は共助支援アプリ「天サイ！まなぶくん II」の開発を申請しました。申請にあたってはこのアプリの開発が地元からの求めに応じて開発されること、分散避難にあたって近所で「近助」するという「丁寧に見守られた分散避難」を目指していることの説明を行いました。その結果、来年度も関東地域づくり協会からの助成金を受けることが出来ました。が、昨年度から希望していた額には届かず、今回を以てこのプロジェクトに対する助成は打ちきりとなるため、今後どのように開発を行うのか慎重に検討していく必要があります。まずはモデル地区（町会）で初期の目標の近所による救助「近助」の実施に役立つものとして使用可能なアプリとすること、これを使っての救助訓練を定期的実施し、それに併せてインプットするデータの鮮度を保っていく体制の確立を行うことを目標としています。その後、モデル地区（町会）から他の地区（町会）への適用を進めていきたいと考えています。

4. 地域小学校への出前授業等

昨年度も葛飾区地域活動支援団体事業費助成制度を利用しての地域の小学校での出前授業や中学校での部活支援活動、保育園での講演活動を行いました。当初緊急事態宣言に伴い一斉休校が行われ、このため授業時間の不足から NPO による出前授業の時間が取れるか案じられましたが、このような環境下でも引き続き学校授業のカリキュラムに組み込まれ実施されたことは、これまで 10 年余りに渡り継続的に行われてきてその必要性が学校側に評価化されてきたものとして喜ばしいことでした。

小学校での出前授業は松上、二上、上平井、上小松の 4 校で、ワークシ

ートによる「家庭で親子で語り合う災害発生時の避難方法」については上小松を除く他の3校で、うらら保育園での講演はビデオ講演で開催されました。上平井中学「地域防災ボランティア部」の支援活動は部活がコロナ禍で制約を受けたために、支援活動も限られたものとならざるを得ませんでした。これらの事業は引き続き来年度も実施していくべく、区に申請を行っています。

5. 街づくりニュースの発行

NPOの前年度の活動報告を兼ねて毎年発行している「街づくりニュース」は、ますます多くの方々からの寄稿を得て、第26号が昨年7月半ばに会員及び関係先の皆様にお送りできました。今年も7月の発行を予定しています。

6. 出前授業のパンフレット作成検討

昨年11月理事長より将来出前授業の講師不足が課題となったときに備えて誰でもが講師ができるような教材としてパンフレットを作ったらどうかという問題提起がなされ、そのたたき台として盛り込まれるべき項目の提示がありました。これに対し最初に共有すべき事項としてパンフレットは①どのように使うか、②対象はだれか、③何を狙ってつくるのか、④汎用性、⑤完成時期、⑥分量、⑦学校で学習する内容とのリンクなどを討議する必要があるのではないかと意見があり、検討することになりました。その後アプリ開発が大詰めとなり、そちらに時間が使われることになったため検討は一時中断されたままになっています。令和3年度に改めて検討する予定です。

今年も「天サイ！まなぶくんII」の開発、出前授業等の実施、輪中会議の開催、出前授業のパンフレットの取りまとめ、20周年記念事業の検討など取り組むべき課題は山積しています。全力をあげてこれらの課題に取り組んでまいりますので、引き続き皆様方のご支援をお願い申し上げます。

以上



理事から



「葛飾区水害ハザードマップを読み解く」動画作成

中村 仁

NPO ア！安全・快適街づくり 理事 / 芝浦工業大学

例年、うらら保育園の子育て講座の一貫として、NPO（増澤一朗氏が主担当）の主催で「大規模水害への備え」について講話をしています。2020年度はコロナ禍への対応として、対面の講座ではなく、中村が動画を作成して視聴していただく方式にしました。動画の題材として選んだのが、2020年3月に発行された葛飾区の新しい水害ハザードマップとその解説編です。新小岩北地区を対象に絞って、ハザードマップと解説編に記載されている内容をパワーポイントのスライドとして再編集し、解説編の重要なポイントを自分なりに説明を補足しながら解説しました。20分くらいの3つの動画に分けて、全体で1時間くらいとなっています。

今回、動画を作成して思ったことを述べたいと思います。まず、葛飾区が作成した水害ハザードマップの解説編は、内容が非常に充実しているという点です。葛飾区の地域特性、避難行動、情報収集、多様な水害リスクとそれに応じた避難行動、対策について、きめ細かく解説されています。

ただし、解説を細かいところまで読むとなると、それなりの意志が必要です。動画であると、もう少し気軽に情報を得ることができるように思います。また、動画であれば、特定の日時に拘束されずに視聴できます。動画の作成には手間がかかりますが、一度作成すれば、多くの方々に視聴していただくことが可能になると思います。

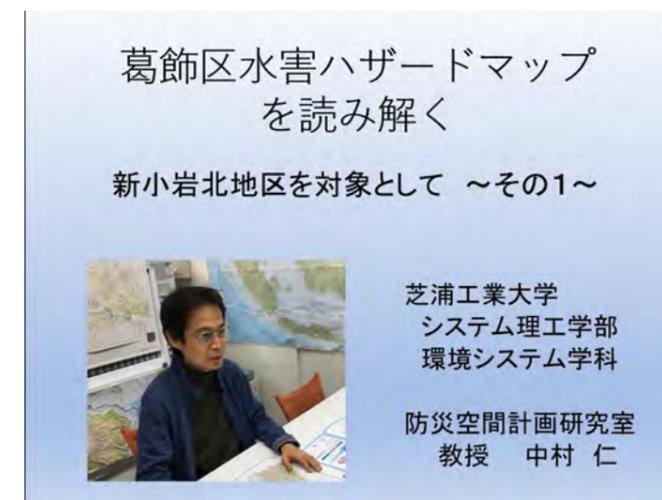
一方で、対面での講座のように、その場での質疑応答ができません。今回は実施していませんが、質疑応答については、メールやSNSなどを用いて対応することも可能と思います。コロナ禍が収束して対面での講座が可能になった後でも、対面とともに講座の録画など、動画を活用して参加できなかった方々が視聴できる機会を増やすことは意義があると思います。

しかし、動画に関しては著作権の問題に留意しなければなりません。今回の動画のスライドでは、葛飾区が発行しているハザードマップと解説編に掲載されている図や文章のみを使用しました。作成に当たって



「葛飾区水害ハザードマップ」の表紙

は、葛飾区危機管理課の了承を得ています。一方、作成した動画そのものの著作権にも配慮が必要です。今回作成した動画について、中村自身が著作権を主張する意図はなく、新小岩北地区の多くの方々に自由に視聴していただきたいと思っています。ただし、動画が無断で不特定多数に公開されるようなことは避けたいと思います。そのため、地域の信頼ある機関（町会、学校、地域活動団体など）に預けて、視聴者を増やしていく方式がよいのではと思っています。



コロナウイルスの可視化と地域に封じ込め 【明日から経済活動復帰】

中川 榮久
東新小岩七丁目町会 会長

コロナ感染者数の拡大中ですが、令和3年4月現在の感染者数は五十数万人あるが、未発病感染者が多数地区内外を横行している事が、感染拡大を促しているはずだ。

コロナ感染者が多数横行するのは、コロナウイルスを可視化出来ないのが、現状はコロナウイルスの野放し状態にあるからです。そこでコロナウイルスを可視化して、地域に封じ込めてしまえば、すばやく経済活動の復帰が可能です。

コロナウイルスの可視化と地域封じ込め

PCR検査・その他検査機材の確保・拡充（午前中検査・午後結果確定）。

国民全員早期検査実施（無料）して、陰性者には検査済陰性者票を発行（首掛け式）。

陰性者は陰性者証明書を持参して、地域内外を自由に行動して、経済活動にも復帰可能（夜間飲食・旅行等含む）。

陰性者証明書は書き換え方式とする（書き換え期間は専門家の意見による）

感染下降次第により、書き換え期間を緩和する。

未検査者は地域（区・市・町・村）外の行動禁止（罰金あり）地区内行動自由。

以上を繰り返し行えば、コロナウイルスの地域封じ込めが可能になり、コロナウイルスの可視化が可能になり感染者が下降になると思う。

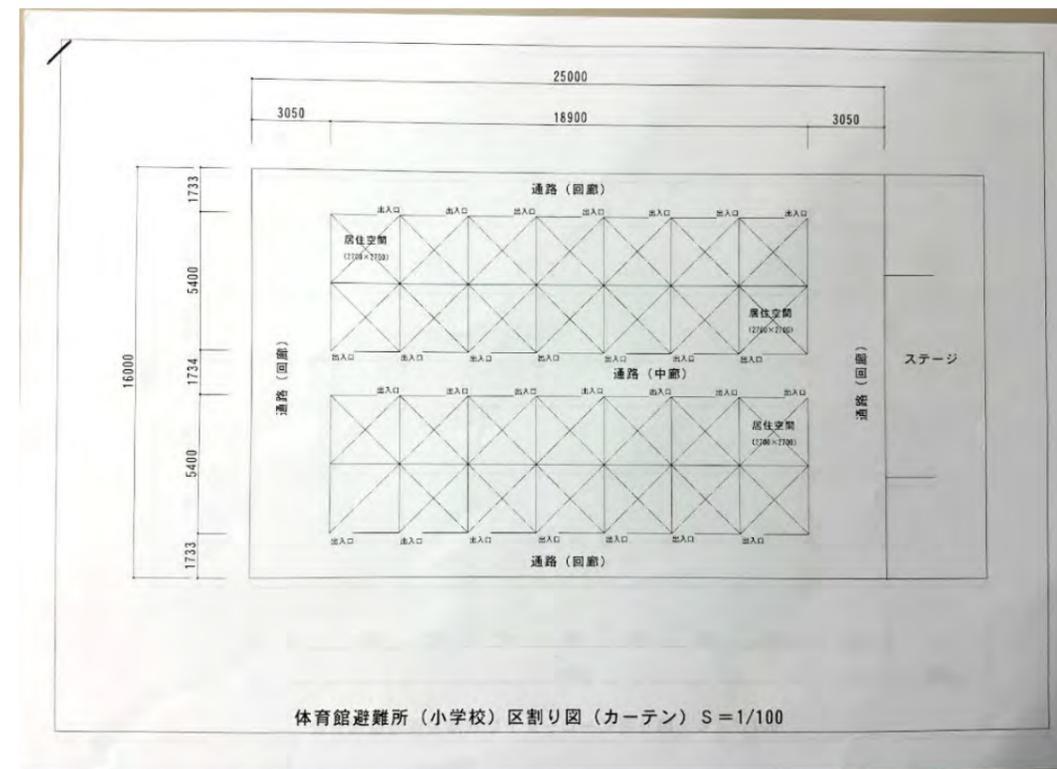
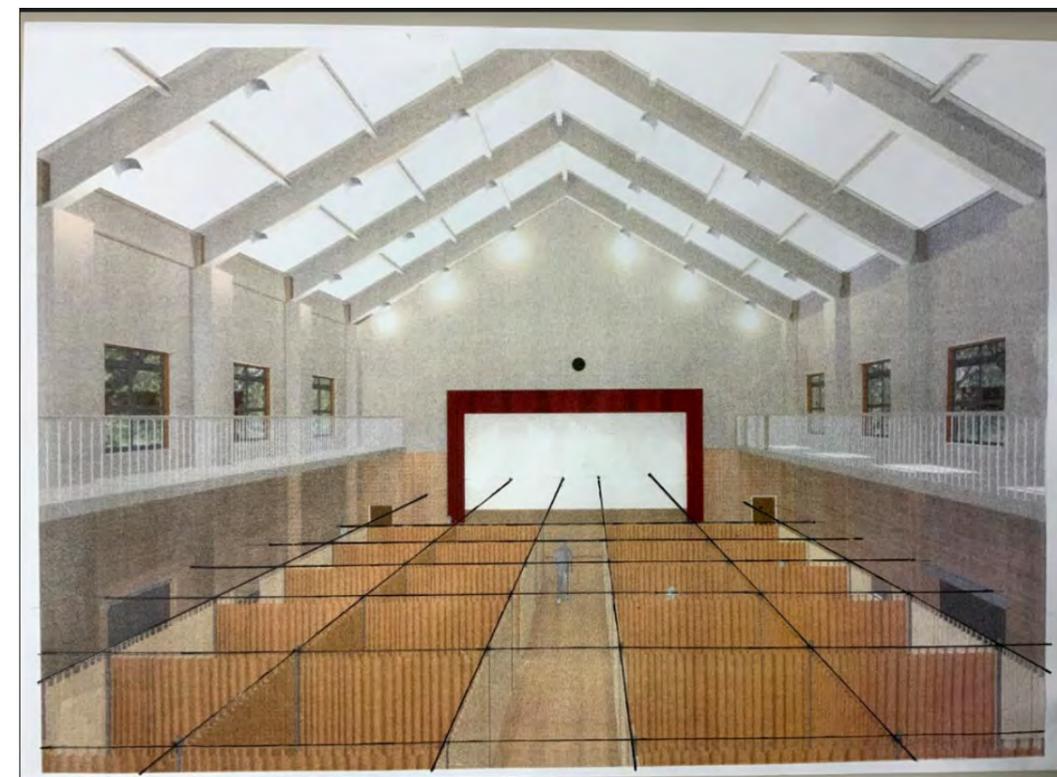
飲食業・ホテル（観光旅行）等の開店・開業

飲食業者・ホテル従事者等全員陰性証明者のみ営業可能（店頭等に許可書貼る）。

陽性者は地域内に封じ込め【重傷者＝病院・軽症者＝施設又はホテル等・未発症者＝野戦病院などの施設に収容（感染予防の為家庭内待機は厳禁）】。

今一番先に行うのは、PCR検査で国民全員からコロナウイルス陰性者の発見です。コロナ感染者を封じ込めて、感染下降を鑑み、ワクチン接種を行うのが最良と考えます。

五十数万人のコロナウイルス感染の為に、一億数千万人の人々の行動が制約されています、一刻も早くコロナの可視化とコロナを地域に封じ込めば、従来通りの生活が戻って来ると思います。



体育館避難所の抗菌カーテンによる間仕切りの導入案（設計：中川）

「地域社会が社会全体を変えた」 ～そして次のステージへ～

加藤 孝明

東京大学生産技術研究所 教授 / 社会科学研究所 特任教授

2019年の台風19号を経験し、水害に備える街づくりの必要性がやっと全国的な問題として取り上げられるようになり、国でも水災害に備えるまちづくりが本格的に議論されるようになりました。遅ればせながら、やっと世の中が新小岩北地区の意識に追いついてきたと感じています。

2006年12月に新小岩北地区連合町会、NPOで大成化工の食堂にて第1回のまちづくりワークショップが開催されました。これが今に至るすべての始まりです。15年も前の出来事です。当時は水害に備える街づくりをテーマにする活動は全国的にほとんど見当たりませんでした。故石川金治前理事長の「水害に備えたまちづくりが手薄である」という問題意識、新しいまちづくりを市民とともに創り出す必要がある」という熱い「思い」に共感し、その時々で輪を広げ、それぞれがそれぞれの立場で多様な活動を積み重ねた結果が今に至っています。これまでの活動は、まさに今の社会の動きの先駆けとなる、また社会をリードしてきた活動だったと自信をもって言えるのではないかと思います。

さらに2019年6月、葛飾区から「浸水対応型市街地構想」が発表されました。これは、NPO、東京大学、葛飾区、そして地域の皆さんと議論してすすめた共同研究の成果です。この構想づくりは、昨年(2020年)に国と東京都が発表した『災害に強い首都「東京」形成ビジョン』につながっていきます。「高台まちづくり」と呼ばれるものです。浸水する危険性の高い街を、高台まちづくりによって安心して住める魅力的な街にしていこうとするものです。まさにこの16年間テーマとしてきた「安全・快適まちづくり」です。

「地域からはじめれば社会全体が変わる」。このことを改めて実感することができました。私は国の街づくり分野の委員会に参加する機会があります。そこで問われるのは、先駆的事例です。先駆的事例があれば国は一步前に進める、逆に言えば、先駆的事例がなければ、国は変わらないとも言えます。新小岩北地区のような先駆的事例こそが社会全体をより良くしていくのです。

16年前の第1回ワークショップ当時、私は若く、それほどたくさんの経験があったわけではありません。正解は存在しない中で、ワクワク感とドキドキ感を感じながら臨んでいました。この間、リアルなまちづくりの現場に身を置き、考え、活動する中で、専門家としても人としても成長することができたと思っています。きっと他の参加メンバーも同じことを考えていることでしょう。まだまだ成長の伸びしろは十二分、いや無限大です。皆さんとともに次のステー

ジへ向かって次の一步を進められればと思います。

2012年3月、NPO主催でシンポジウムが行われました。そこでは、土肥英生理事の発案で、新小岩行動宣言が読み上げられました(図1)。いずれも今の活動の基軸になっています。この宣言にのっとるとすれば、次の展開は二つの方向性があるのではないかと思います。

「広げる」の中にある「新小岩から世界へ」。これについては、当時の正直な感覚は「世界はちょっと大きすぎるかな」でした。しかし、今、「新小岩から日本社会全体へ」は、達成されつつある状況になりました。世界も射程に入ってきたのではないのでしょうか。

気候変動への適応は、今、世界的、地球的課題となっています。特にヨーロッパでの問題意識は日本と比べ物にならないほど高まっています。大学4年生だった2006年から活動に参加する塩崎由人さんは、この1年間イギリスに留学し、先日帰国しました。国際会議でも新小岩での活動を活かした発表を精力的に行っています。今、改めて世界をみると、「新小岩から世界へ」は決して大げさな表現ではありません。次のステージでは、「新小岩から世界へ」をぜひ目指していきましょう。

また、「長期的展望に立つ」では、「歴史から地域から学び、未来に向けて行動します」とあります。この点をしっかりとすすめる必要があると思っています。

「流域治水」という言葉が昨年(2020年)に登場しました。国の社会資本整備審議会の答申の中で定義された言葉です。気候変動をふまえると、流域、すなわち、沿川の地域社会、市街地、農地、山、すべてが総力を挙げて取り組む必要があるという意味です。水害とは「川の容量を超えた雨が降れば、どこかで水は溢れる。溢れた水は高いところから低いところにしか流れない」という当たり前の自然の摂理です。今後、気候変動が進み、降雨の強度が増すと、インフラの力と自然の力の関係が昔に戻っていく可能性があります。これからは「温故創新」という考え方がとても重要になってくると思います。古きを温め、新しきを「創る」。創新とは、中国語ではイノベーションのことを指します。かつての地域社会は、川の恵みを享受し、一方で川の脅威と共生してきました。今一度、かつての知恵を学び、そして現代的な知恵、技術、工夫を加えて街づくりを考えていくことが重要だと思います。地域での活動の中で地域の歴史を学ぶ、また歴史の中から未来に生きるヒントを発掘する活動をしていけるとよいと思っています。またこのことは、流域の地域社会において、ある種の「運命共同体意識」を醸成し、結果として「安全・快適街づくり」の実現につながると思います。

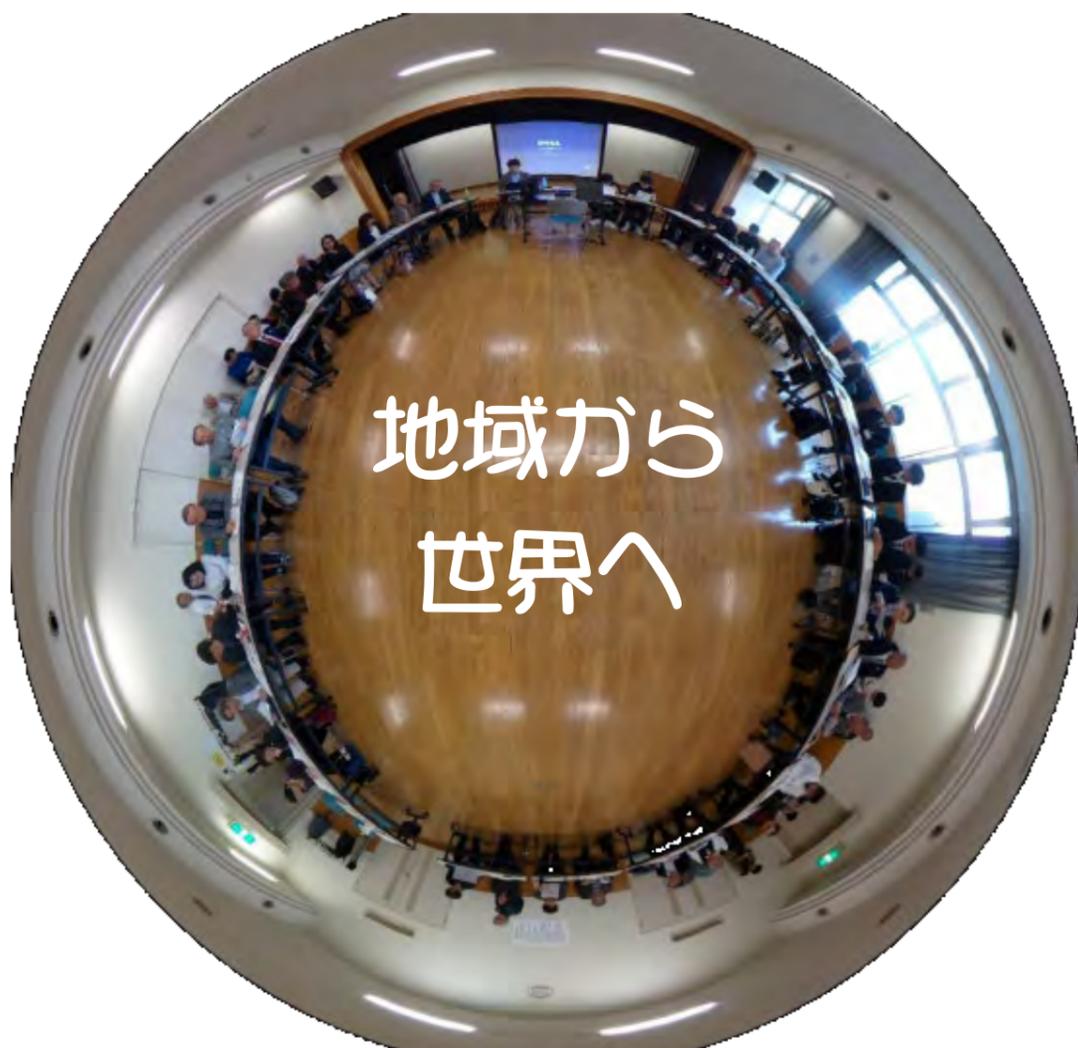
次のステージへ！少々、気合が入ってきました。

新小岩 行動宣言－1

“次の行動へ向けて”

1. 広げる…新小岩から世界へ向けて活動を広げます。
2. 深める…これまでの経験を地域内で深めます。
3. 長期的展望に立つ…歴史から、地域から学び、未来に向けて行動します。
4. 地域主体…地域が主体となってさまざまな連携をしながら進めていきます。

新小岩行動宣言（2012年3月、NPO主催でシンポジウムにて）



いま進めたい弾力社会

渡邊 喜代美

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

■ いま進めたい弾力社会

「婦選会館」というところへ講師として招かれた加藤教授（以下加藤さん）のお供をして伺った。2021年7月上旬「いま進めたい弾力社会へ」としてオンライン開催で行われた。加藤さんのお題は“大災害の時代に私たちはどう備えるか”。参加者は60人ほどであるという。私が興味を持ったのは、おおむね女性の参加者のうち全国でそれぞれ活躍する女性議員さんが約半数程度らしい。進行役は婦選会館にある「市川房江記念会女性と政治センター」の常務理事の方。

私は緊張して同行したが、先方は物腰柔らかな方々。全国津々浦々で活躍する女性たちが、災害への備えに関心をもって講座を開設したことは、同行したというより一緒に受講した私も教訓を受けた。これまで今回の受講者の存在を見落としていたかもしれないと思った。地域における“大災害の時代に私たちはどう備えるか”という視点を持ってきたが、“弾力ある社会”とは言い切れない日本の状況からすると、災害時に女性、あるいは老人、子供など弱者が抱える課題は、災害時に凝縮され見える。問題だらけかもしれないと思いつつ講座の後の質疑に耳を傾けた。地域における“大災害の時代に私たちはどう備えるか”質疑応答は、「防災もまちづくり」の“も”を理解しようとした発言が多く感じられ、総合的な弾力社会への模索を示唆していたように感じた。

いま進めたい弾力社会、いい表現である。いい体験であった。女性の議員さんたちが、地域社会の中でリーダーとして“も”を考えてくだされば、弾力社会へのまさに弾力になると感じた次第です。

■ Webでニュースレター編集

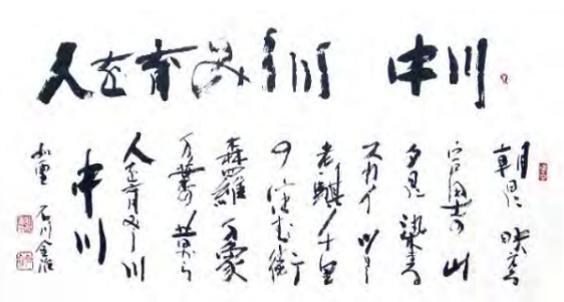
Webで、南さんと「ア！安全・快適街づくりニュース」No. 27号の編集会議をおこなった。

「輪中会議」もWebであったが3時間以上の記録を文字にして記録に残す作業や、皆さんから寄稿いただいた原稿の確認、まだ依頼したが届いていない方への催促、表紙や全体構成など、一冊の冊子をまとめるには結構な時間を要する。1年1回の発行だから頑張ろう。寄稿も4月にはすでにいただいたものもあれば、時間差もある。南さんの博士論文に支障がないように配慮しながら8月は毎週金曜日3:30～6:00ごろまでかなりの集中作業でしたが、発行は9月になってしまった。コロナ禍中もあって、Webだけで行う作業は制約もある。

一方集まる時間や場所、そこまでの移動往復時間を考えると合理的でもある。これからも編集会議は Web でいけるかもしれません。しかし、今回は南さんのようなその前は塩崎さんのような IT 術も現場体験や現場感覚も時間の融通しあいも可能な仲間がいてのこともである。と思いつつも「よしやりましょう」と気合を入れつつも、その気になれば、場所はどこに居ようと編集会議はできるということでもあると思いつく。

また今回は写真提供を古川親子が担ってくれた。“人を育みし川 中川”の故石川金治の詩に馴染んだいい表紙もできた。

“Web で輪中会議”に続いて、“Web でニュースレター編集”いい体験だった。でも、面子を合わせられる日がきたら、改めて口角泡を飛ばした議論もしたいね、と思いました。

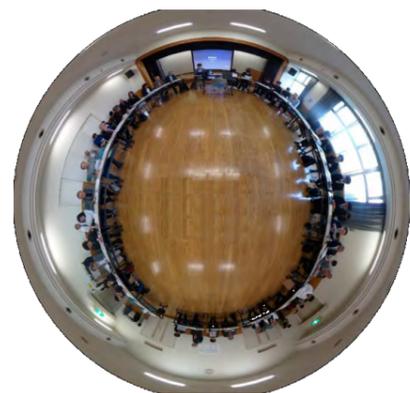


■ 当ニュースに掲載する災害記事検索の試み

水害、広域避難、流域治水などのメディアの取り上げ方を、渡邊の切り抜く以外にたくさんあるだろうと思って、南さんと検索し始めて驚いた。この1年ぐらいい実に多い災害記事が検索された。まとめて掲載してみようと試みることにした。見出しも何かを伝えようとしているが輪中会議などで議論していることなどにつながる記事も多い。

“大規模水害 命を守るためには” “逃げる先”の確保急げ”など具体的な問題に触れるものもあれば、流域治水系は、“流域治水は国を変えるか” —防災だけでなく地域も産業も発展「第2の列島改造」を目指す—との論考はまさに「防災もまちづくり」だ。これらの検索詳細は本ニュース紙面中に取り上げる (P.152-156) が、私たちの地勢学にいずれもつながる。私たちの活動の方向性はぶれていないとおびたしい災害ニュースをみながら思った。

また、災害の発生は地球温暖化と密接につながる。私たちの暮らし方から考



える課題は多岐にわたる。今、深刻な状況にあるとつくづく思う。

■ 地球温暖化 IPCC「地球温暖化報告書」は私たちの暮らしに密着

すでに読んでいる方もいることと思いますが、「地球温暖化の原因は人間の活動と初めて断定、国連 IPCC が報告書」を出しました。

私はニュースを見ると見メモをすることもありますが、以下は 2021 年 8 月 10 日 NHK ニュースの記事から。

世界各国の科学者でつくる国連の IPCC = 「気候変動に関する政府間パネル」は、地球温暖化に関する報告書を 8 年ぶりに公表し、温暖化が進めば熱波や豪雨といった「極端現象」の頻度や強さが増すと、温室効果ガスの排出を削減するよう警鐘を鳴らしています。

今回の報告書では、去年までの 10 年間の世界の平均気温が、すでに 1.09 度、上昇したとしています。そして温暖化が進むほど、世界各地で熱波や豪雨といった「極端現象」の頻度や強さが増すと指摘しました。そして、地球温暖化の原因は“人間の活動によるもの”と断定。今回の報告書の大きな特徴です。

踏み込んで「人間の影響が大气、海洋および陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない」と記し初めて断定する表現となりました。

その理由については、産業革命以降に観測された急激な気温の上昇が、過去 2000 年以上の間で例がない水準であり、過去 10 万年で最も地球が温暖だったころの気温の推定値を超えていることや、人間の活動と自然の影響を両方とも考慮して試算した気温の推定値とおおむね一致していることなどが挙げられています。

@まずは暑さです。猛暑日が全国の平均で、半月以上に当たる、およそ 19.1 日増加すると予測されています。@非常に激しい雨 頻度は倍増、雨の量もさらに増える見込みです。@猛烈な台風 できる頻度は増えるとされています。高潮や高波による浸水被害のリスクが高まるおそれがあります。@勢力の強い台風 上陸する可能性 ますます高くなること。台風の専門家は、こうした海面水温の上昇で、台風が勢力の強いまま上陸するリスクが高まると指摘しています。「地球温暖化が進めば、勢力の強い台風が上陸する可能性はますます高くなっていく。去年大丈夫だったからといって油断せず、備えていくことが重要だ」と指摘しています。

@日本周辺 “史上最高の海面水温 10 年後には頻発も” 専門家解析は「海面水温が高くなると、台風が勢力を落とさずに日本に接近や上陸をするリスクが高まるほか、漁業などにも影響を与える可能性がある」と指摘しています。

@国連 グテーレス事務総長「報告書は人類に対する警鐘」としています。

IPCC の報告書の公表を受けて国連のグテーレス事務総長は「報告書は人類に対する警鐘だ。温室効果ガスの排出が地球を窒息させ、何十億もの人たちを差し迫った危険のもとにさらしている」と危機感を表しています。

そして「私たちの社会を存続できるかどうかは、各国の政府や企業、それに市民社会のリーダーたちの手にかかっている」として断固たる行動が求められているとしています。

そのうえで「今、力を合わせれば破滅的な状況は回避できる。しかし、今回の報告書で明らかになったように対応を先延ばしにしたり言い訳をしたりする余裕はない」として、直ちに行動をとるべきだと強調しました。

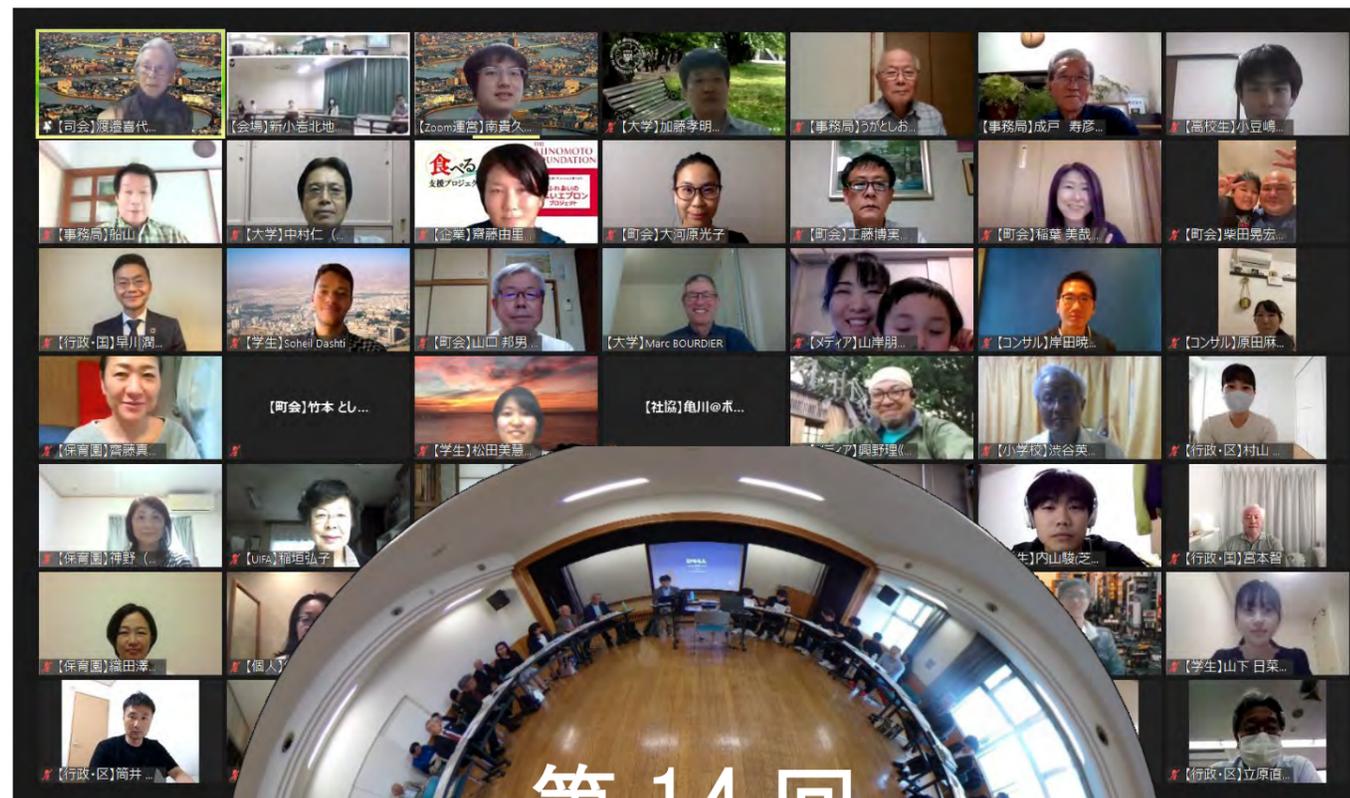
———— NHK NEWS WEB 「地球温暖化の原因は人間の活動と初めて断定 国連 IPCC が報告書」より、一部要約のうえ引用

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210809/k10013191801000.html>

長々と引用しましたが、地球温暖化は私たちの暮らしに密着していることを言い表したかったからですが、いかがでしょうか。



浸水対応型拠点建築物のケーススタディ
(東京大学生産技術研究所今井公太郎研究室+加藤孝明研究室)



第14回 Web「輪中会議」 (2021) プログラム

第14回 Web「輪中会議」 2021

今回はコロナ禍中、Web で「輪中会議」を試みます。長いたかひになるか、新たな日常なのか、いや歴史的繰り返しなのか、あなたにとってはいかがでしょうか。

輪中会議は、“水害リスクと賢く共生する親水都市”を目指しつつ、“浸水対応型市街地形成”“浸水対応型建築”など、平時の暮らしの継続計画を考えると共に、“災害とコロナ対策”など広く意見を交わします。

それぞれの取り組みの報告を受けて、ゼロメートル市街地における持続可能なまちづくりひとづくり、近所で近助など、経験・情報の共有を図ります。

■ テーマ：親水・浸水 × まちづくり・ひとづくり × 近所・近助

■ 開催日時：2021年(令和3年)5月9日(日) 14:00～17:00

■ 場所：Web環境のある場所<自宅 あるいは 町会事務所など>

- * Web会議ツール「Zoom」を使用します。各自PC・タブレット・スマホ等をご用意ください。
- * Web環境が用意できない方は、サテライト会場「新小岩北地区センター 大会議室」にてご参加いただけます(定員30名)。ご希望の方は、参加登録時にお申し出ください。

■ 参加登録：<https://forms.gle/cketHT2zV6PnKtUu7> (登録締切 4/25)

- * 会議の参加方法をご案内しますので、上記より事前に連絡先等をご登録ください。
- * 不明な点があれば、NPOア！安全・快適街づくり(事務局) tegami@banktown.org へお問い合わせください。

■ 主催：葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会

※ 構成メンバー：新小岩北地区連合町会、NPOア！安全・快適街づくり、葛飾区、広域ゼロメートル市街地研究会、認定NPO日本都市計画家協会

■ プログラム(案) 進行：渡邊 サテライト会場担当：加藤 記録とWeb運営：南

□ 第0部：はじめに

- | | | |
|------------------------------|------|----|
| 1. NPOア！安全・快適街づくり理事長 / 協議会会長 | 成戸寿彦 | 5分 |
| 2. 新小岩北地区連合町会会長 | 中川榮久 | 5分 |

□ 第1部：基調講話

- | | | | |
|-------------------------------|-----------|------|-----|
| 1. 浸水対応型市街地×流域治水×コロナ | 東京大学 | 加藤孝明 | 20分 |
| 2. 近年の水害と治水対策 | 荒川下流河川事務所 | 早川潤 | 10分 |
| 3. 浸水対応型拠点建築物などの取り組み状況+コロナ禍対策 | 葛飾区 | 情野正彦 | 10分 |

————— 休憩 5分 —————

□ 第2部：多様な活動報告と意見交換 1時間30分

- 地域から 各町会、それぞれ地域活動など
- 小・中学校から 学習支援など 校長先生など
- 大学から 研究のさまざま イギリスからなど
- 行政から 葛飾区のまちづくり・非常時対策など
- 企業から コロナ禍中の企業対策など
- NPOから 共助支援アプリ「天サイ！まなぶくんII」開発中など



経験を共有し、地域の未来を語らう。

【これまでの経緯】 詳細は『NPOア！安全・快適街づくりニュース』参照

20年あまりにわたって町会、NPO、専門家、大学、行政などが中心となって、大規模水害に備えるための様々な活動、研究をすすめ、2012(平成24)年度「新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」を組織し、安全・快適まちづくり活動を広く地域に繋げ、交流、発展、創造の場として「輪中会議」を立ちあげました。

今回は第14回目。13回目は2020年3月に予定しましたが、コロナ禍中にて中止となりました。

【これまでに参加した人・組織】

- 新小岩北地区連合町会の各町会・自治会のみなさん
- 地域住民のみなさん(葛飾区、江戸川区、足立区など)
- 地域の社会福祉法人(保育園、幼稚園、老人福祉施設)
- 地域の民生児童委員
- 地域の消防団
- 地域の市民消防隊
- 地域の小中学校
- 地域の小・中・高生
- 地域のPTA
- 地域の企業
- 地域の消防署(本田消防署、同上平井出張所)
- 行政(葛飾区、東京都、国土交通省、内閣府)
- 専門家(東京大学、芝浦工業大学、認定NPO日本都市計画家協会)
- 学生(広域ゼロメートル市街地や輪中会議など勉強したい学生たち)
- 葛飾区保健所と医師会
- 広域ゼロメートル市街地研究会
- NPOア！安全・快適街づくり



第14回 Web「輪中会議」(2021) 議事の流れ

次の P.26~75 には、第14回 Web「輪中会議」の議事録を可能な限りリアルな形で採録している。それに先立ち、ここでは議事概要を発言者ごとに見出しをつけてまとめてみた。各トピックのページ番号も併記しているので、議事録全体の目次としても活用していただきたい。

第0部：はじめに	26
【サテライト会場紹介】進行：加藤 サテライト会場の参加者：11人.....	26
【主催者報告 成戸】初の Web 輪中会議 天サイ！まなぶくんⅡの開発など.....	26
【主催者報告 中川】コロナ禍の町会活動 機材の充実・トランシーバーの導入など 『徳川家康』26巻読破、江戸時代の水害調べ、イチョウの木の紹介.....	28
【参加者紹介】70~80人参加 新規参加者が約50% ※Webによる新規参加者増.....	29
第1部：基調講話	30
【東京大学 加藤】流域治水×浸水対応型市街地×コロナ.....	30
【荒川下流河川事務所 早川】台風19号の荒下の対応、河川管理の流域治水への展開 SDGs、ナッジ(Nudge)、ベスト避難チャレンジ、DX、 ミズベ・グリーンコミュニティ、立体のハザードマップ.....	37
【中学生の質疑】 Q1. 専門家と世界・日本社会の認識のギャップを埋めるには？ Q2. ダムが大事なものと認識したが？.....	44
【葛飾区 情野】 葛飾区における具体的な浸水対応策の紹介 学校の浸水対応改修、避難場所の民活.....	46
第2部：多様な活動報告と意見交換	50
【二上小 三谷】 出前授業は評価、この間コロナで地域/保護者の参加が実現できなかった が今後も継続してほしい、学校の浸水対応改修の検討.....	51
【松上小 渋谷】 出前授業に地域参加嬉しい・コロナだからこそ避難所運営訓練 地域と連携 これからの出前授業とコロナ対策.....	51
【葛飾区 長谷川】コロナ禍における葛飾区の総合防災訓練.....	52
【JMAR 岸田】出前授業講師・子どもたちの意識の高さに感心.....	53
【東七 竹本】出前授業講師・大人が考えつかないことに気付く力に刺激を受ける.....	53

【松上小 渋谷】 意識の高さは家庭による・出前授業から子どもをと通して家庭に波及を願う.....	54
【中川】子どもたちの意識の高さにテレビのディレクターも感心.....	54
【NHK 興野】自分も葛飾の子どもたちに意見を聞いてみたい.....	55
【NPO 事務局 (山上・古川)】天サイ！まなぶくんⅠ・Ⅱの紹介.....	56
【NHK 興野】「天サイ！まなぶくん」についてコメント.....	60
【個人参加 椋】高台の整備・総合設計制度の活用.....	61
【情野・加藤】七曲りは親水型で・荒川沿いは高台化.....	61
【上小松 山口】台風19号とコロナ禍を受けての避難所運営の検討.....	63
【東七 大河原】女性市民消防隊・実践訓練の体験談は次の輪中会議で.....	63
【JMAR 原田】広域連携で東七 女性市民消防隊に参加 竹本補足：原田さんは千葉県居住だが、危機意識は共有.....	64
【社協 亀川】共助の大切さ・内部と外部の連携.....	65
【かつしか FM 山岸】地域のメディアとして防災意識の向上に寄与したい.....	65
【中央大 松田】かつしか FM の番組に出演・町会と外部の人の連携.....	66
【仏 ENSAPLV マルク】災害体験は日仏共有の課題・高台化の建築的対応.....	67
【芝浦工大 中村】うらら保育園の支援活動「水害ハザードマップ解説」動画作成.....	68
【うらら保育園 齋藤】中村支援は若い層の保護者に対して有効だった.....	69
第3部：次の展開を考える「とっかかり」を発想してみる	70
【東大 加藤】次の展開を考えるためのキーワード.....	70
【味の素ファンデーション 齋藤】 食と栄養と防災・東日本大震災被災地での参加型料理教室の支援.....	71
【渡邊】南三陸の支援の体験・コミュニティの大切さの体験.....	73
【事務局】ニュースレター原稿依頼、Web 会議参加者全員の写真撮影.....	75
【おわりに】高校生のコメント.....	75



サテライト会場の様子

第14回 Web「輪中会議」(2021)のリアルな記録

初の Web 輪中会議なので、できるだけ再現型で記録をしておきます。一つの会場に集まった輪中会議より、若干テクニックを要しましたが、結構成功したと同時に楽しかったと思っています。(渡邊)

<第0部：はじめに>

渡邊 ざっと参加者の全体像を紹介します。それから今日は特別なやり方なんですけど、サテライト、いつも本会場として使っている葛飾のセンターの方にサテライト会場を設置してあります。そこの運営は加藤さんが総司会をすることになっていて、そこに Web 上で参加できない地域の方々が割合参加してくるという体制を作りました。ですから私が全体の進行役を、それから南さんが全体の運営記録をし、加藤さんがサテライトを運営する、こういう感じで3点連携で進めたいと思います。

サテライト会場の状況はいかがでしょうかね、加藤さん？聞こえますか？

■ サテライト会場紹介

加藤 はい、加藤です、聞こえますか？

渡邊 はい。

加藤 サテライト会場は新小岩北地区センターで、今合計 11 名が参加しております。お願いします。

渡邊 はい、分かりました。今日は今までの輪中会議に参加したことがない方が 30 から…よろしいですか？サテライト会場からですか？

*サテライト会場の雑音が入って議論しにくいので雑音が入らないよう南さんが操作

南 ちょっと申し訳ないですが、今ご発言されていない方の音を止めさせていただきますね、申し訳ありません。

渡邊 では、進めます。

それでは時間が制約された中で、実りの多い輪中会議にしたいと思いますので、主催者側の報告から。協議会の会長を務めています「NPO ア！安全・快適まちづくり」の理事長の成戸さんからご挨拶をしていただきましょう。宜しくお願いします。成戸さん伝わっていますか。成戸さん？

*成戸さんのまだマイクが入っていない様子

南 成戸さん、マイクの ON をお願いします。

■ 主催者報告 成戸さん

成戸 みなさんこんにちは。成戸でございます。この輪中会議、Web で行うということで、みなさん慣れない面もあるかと思えます。私も今マイクがオフになっておりましたけども、80 名ほどの方にエントリーをしていただいて、それでそのうちの 4 割が新しい方ということで、たいへんこの輪中会議も多方面で関心を持っていただいているなあと、主催者としても嬉しく思っています。その初参加者の方の中でも上平井中学の皆さん方は、このコロナ禍の中で 1 時間という時間制約がありますけども、元気な姿をお見せいただいています。また、

今日お話をいただく荒川下流河川事務所の早川所長さんにも、初参加っていうことで、お話をお願いしています。早川さんいらっしゃいますか。

早川 はい、おります。本日はよろしくお願ひいたします。

成戸 はい、よろしく。のちほど講話よろしくお願ひいたします。

渡邊 初めまして、渡邊です。よろしくお願ひいたします。

早川 よろしくお願ひします。

成戸 それで、この輪中会議は昨年 3 月に企画をしたんですけども、コロナの第 1 次の緊急事態宣言が出る直前でしたので急遽中止といたしました。で、1 年前に比べて感染者の数も格段に多い、また緊急事態宣言も延長されている、そういう状況がありますけれども、我々もこの 1 年でかなりいろんなことを学んできました。皆さん方と話をして、「洪水もコロナも正しく怖がる」ということで、そういうことを学んできましたので、Web を使ってこういう形で加藤先生のご協力をいただいて、Zoom で皆さん方を繋いでいるわけです。

一堂に会して行う輪中会議はですね…。ちょっと南さん、いつもの画面を出していただけますか。

南 はい、今出しますので、お話を続けてもらえますか。

成戸 一堂に会して行う輪中会議は、会場のレイアウトを輪のようにして雰囲気を出すんですけども、今回は Web 方式で皆さん方、拠点になって…。

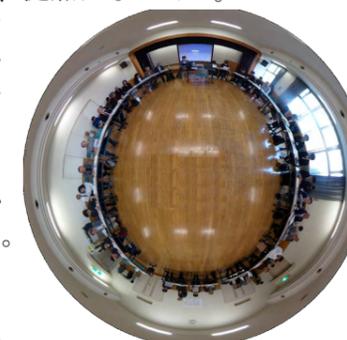
このような形で、これはちょっと魚眼レンズで極端ですけども、輪のような形でやるんですけども、結局、運命共同体という思いを一つにして皆さんここに集まっているんですね。

したがって、その“しんすい”に対する思いを皆さん方各々の立場で語っていただいて、心を輪のように、この輪のように繋いでいきたい。Web による輪中会議はそういった形で、心をつなげていきたいというふうに考えています。各々のお立場でのご発言をお待ちしたいと思えます。

私ども NPO ア！も報告がありまして、後ほど詳しく話しますが、関東地域づくり協会っていうところから助成を得てこの 1 年間精力的に取り組んできたんです。共助支援アプリと言います。「天サイ！まなぶくん II」と名付けましたけども。共助支援というのは町会を支援するっていうことですね。東新小岩 7 丁目の中川さんの所の町会で赤旗白旗の活動をされていたんですが、雨が降ったり夜になったりするとなかなか赤旗が見えませんが、それをスマホでアプリ化してやったらどうだろうということで、考えてみたわけです。

で、いわゆる SDGs で、ご近所さんが「近助」すると、こういうことをスマホを使ってやると。誰一人取り残さないために、こういうような文明の利器を使ってやっていきたい。

昨年度でだいたい 1 つの町会で使えるような目途が立ってきたということ。この辺のところ、昨年やったデモンストレーションの様子を後ほど詳しく説明することで、どういうことを



我々がやろうとしているのか、具体的なことをご覧いただきたいと思っております。我々の目論見はやはり他の町会にも波及させていきたいということですので、今年度も関東地域づくり協会から助成を得ています。したがって今年度も精一杯取り組んで、皆さんの他の町会にもつなげていきたい。したがって他の町会の皆さん方もぜひ関心を持っていただきたいと思っております。

最後にもう一度申し上げますけれども、Web方式で行うのは初めてですので、色々不都合な点も出てくるかと思いますが、皆さん方のご協力を得て進めていきたいと思っております。それでは渡邊さん、この後の進行をよろしくお願いたします。

渡邊 ありがとうございます。アプリの開発が再び行われ始めていますので、またその詳細は後ほどお伝えすることができると思います。

それでは2番目の主催者報告、中川会長いらっしゃいますか。

■ 主催者報告 中川さん

中川 はい、中川です。

渡邊 はい、それではよろしくお願いたします。コロナ禍の町会活動などについて触れてご発言願います。

中川 みなさんこんばんは。こんにちは、ですね。いつもここでやるのは夜やるものですから、こんばんはと。申し訳ございません。こんにちは。中川でございます。コロナ禍の町会活動というお話だったんですが、残念ながら何もできないということございまして、練習もできなければ会議もできないというところございまして、町会といたしましてはこの輪中会議で皆さんのおっしゃってくださった、リスクと賢く共生しようということで、いつ来てもいいようにゴムボートのペンキを塗り替えるとか、パンクしているところはないかとか、色々やっております。特に昨年度・今年度に関しては機材の充実を図っています。例えば、トランシーバーを16機、これは遠くまで聞こえる、お金を払わなきゃならないやつですが、それを揃えたり、ソーラーパネルとか発電機とか、そういうものを今揃えているところで、何とか頑張っていきたいと思っております。

それから私ですが、本来ですとだいたい忙しいんですが、今回忙しくなかったものから、念願でした徳川家康の26巻を完全に読ませていただきまして、その時に感じたんですが、徳川時代にはこういう水害はあったのかな、江戸時代にもあったのかなということで調べてみたんですが、実は1603年から1867年までの間に181件の水害があったということが記録されているそうございまして、その中には大変大きな災害も見つかりまして、その1つとして天明っていうのは1780年代ですか、その大水害のときは3万人の人が亡くなったというような記事がでていましたので、これは大変だなあと思っているところでもあります。ただ、私はこれから先どうなるか分かりません。人間の寿命も100歳ぐらいですから。ただ、これをずっと見守っていてくれたのがあるんですね。南さん、先ほどちょっと、イチョウの木の写真が行っていませんか？



南 今見ます。

中川 それが何かというと、徳川時代にここで災害がたくさん来てただ黙っていたわけではなくて、これは関東郡代でありました、3代の

方が…。これですね。この方々が、郡代の人たちが、このところ全部護岸工事その他、全部やってきたんですが、天災にはかなわないということで、これを見守ってきたのがこの木なんですね。じつはその中の…。伊奈氏が3代にわたってこの江戸の執政をやってきたわけですが、伊奈氏3代目の伊奈半左衛門忠克という方が、利根川の東遷、それからいまの荒川を隅田川に流したり、そういうことを完成させた人らしいんですが、その方が天正3年に植えた木だそうございまして、この木は、このちょっと北側に稲荷神社があるんですが、稲荷神社のところにあるんですね。ですから今から約400年ぐらい前に植えた木なんですね。この木はずっとその181件もあるような水害も見てきたし、これから先、何年も我々がここで今やっていることを見ていてくれるんじゃないのかなと思っております。幹回りが4m15cmあります。高さが21mほどあります。すぐ見られるようで、もし（機会が）ありましたら見ていただければありがたいと思っております。いま加藤先生、それからNPOの方々にもこのようなことを教えていただいたことを、これから我々が活かさせて行って、それでこの木に見ていただこうかなと思っております。一つよろしくお願したいと思っております。以上です。ありがとうございます。

渡邊 ありがとうございます。まあ、コロナ禍といえども、ボートの塗り替えとか、トランシーバー実験とか、なんか結構色々やることはあるものですね。読書時間というのもすごいと思っておりますが、100年生きるのは結構大変なことですけども、イチョウの木が見守っているんだと思うと元気が出るような気もいたします。

それでは主催者報告はこれでいかが？

■ 今回の「Web 輪中会議」の参加者紹介

南 では、私の方から参加者のご紹介をこの辺で入れます。

渡邊 そうですね、参加者の紹介、間に合いましたか？

南 はい、すみません。ちょっと手間取りましたが。

皆様のお手元の、パソコンやスマホ、タブレット等でご参加いただいていると思うんですが、「参加者」というメニューがあると思います。そちらを押していただけますでしょうか？もし「参加者」というボタンが出てこない方は、「詳細」という「…」のボタンを押していただくとその中に「参加者」というボタンがあるかと思っております。これを押していただくと今日、今この会場に入っている皆さんのお名前が一覧で出てきますので、どういう方が参加されているかというのが分かるかと思っております。ちょっと時間はあまりないんですが、私の方で…あ、私の自分の顔をまず映すべきですかね、はい。

私の画面上での順番になるので、皆様の画面上の順番とは違うかもしれませんが簡単にご紹介します。申し遅れましたが、私本日Zoomを担当します、加藤研究室の南と申します。よろしくお願いたします。本日サテライト会場の運営は加藤さん。司会の渡邊さん。それからサテライト会場にいる事務局の古川さん。以上の4名がZoomのホストということで、上の方に出ているかと思っております。

次に事務局なんですが、先ほどお話のあった成戸理事長、それから宇賀さん、船山さんがNPOの事務局から参加しています。

次に渡邊さんのご紹介でUIFA JAPONの宮本さん、薄井さん。

それから葛飾と一緒に活動されているコンサルタントの岸田さん、原田さん。メディアのほうでNHKの興野さん、かつしかFMの山岸さん。

それから学生が今回かなり多く参加されていて、ちょっと全員の名前は省略させていただきますが、中央大学、明治大学、東京大学、芝浦工業大学などからご参加いただいています。

企業の方からは味の素ファンデーションの齋藤さん。

個人参加は、棕さん。静岡の地域まちづくり研究所の小池さん。葛飾区新小岩でお店を開こうと考えられていた鈴木ひろみさん。

それから行政の方で、葛飾区役所から4名、プラスこの後お話しいただく情野さん。それから江戸川区の方から立原さん。国交省の方から、講話いただく早川さんを含む荒川下流河川事務所の方々。

上平井中学校の地域防災ボランティア部から8名と、OBの高校生が5名。

葛飾区社会福祉協議会の亀川さん。

小学校から松上小学校の渋谷校長先生。それから、二上小学校の三谷校長先生が会場にいらっしゃるかと思えます。

大学関係はフランスからマルク先生、東京大学から大津山先生、芝浦工業大学から中村先生。

町会関係はかなり多く、初めて参加くださっている方もいらっしゃるとお聞きしています。よろしくお願ひします。

最後に、保育園の方から、織田沢さん、神野さん、斉藤さんにご参加いただいています。早足になりましたが以上が現在ご参加されている皆さんです。

渡邊 今のところ合計何人になるでしょう。

南 Zoom 上で56名と、サテライト会場・中学校からの参加者で、だいたい70名くらいはいらっしゃるかと思えます。

<第1部：基調講話>

渡邊 それではだいたい参加者状況が把握していただけたので、いよいよ第1部の基調講話に入りたいと思いますが、加藤さんよろしいですか？

Web 繋がっていますか？

加藤 はい、大丈夫です。

渡邊 それでは、第1部の基調講話に入ります。

1 番目には加藤先生。まあ NPO のこの輪中会議では「先生」というのをやることにしているので、加藤さん。

ここでは主題は「流域治水×浸水対応型市街地×コロナ」。この大変煩雑なテーマについて迫ります。加藤さんよろしくお願ひします。

加藤 はい、よろしくお願ひします。聞こえていますか？

渡邊 はい、聞こえています。

■ 基調講話 加藤さん

加藤 今回の輪中会議はなんと2年ぶりなんです。昨年開催できませんでしたので、2年ぶりなんです。この2年の中で相当世の中が変わってきた。そのキーワードとして取り上げたのが、この3つになります。

そして今日ご参加されている人の中で、輪中会議が初めての方が結構多いので、そもそも輪中会議は何かという話をしたうえで、先ほどの3つのキーワードについて話をしていきたいと思えます。

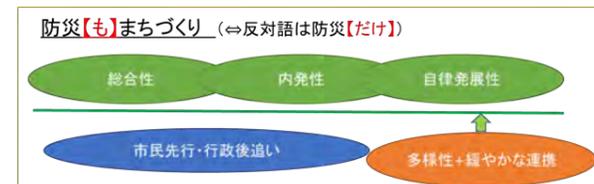
まず輪中会議なんです。2013年ごろから始まりまして、おそらく既に10

回以上、当初は年2回ぐらいやりましたので、10回以上を迎えております（P.160-163 年表参照）。意味は2つです。1つ目は木曾三川の「輪中」というのがありますね。集落を堤防で囲む輪中。ここから持ってきて、要は水害を織り込んだ豊かな地域文化を作っていこうと。それが1つ目の意味になります。そしてもう1つの意味は、地域の皆さん、輪の中に入って会議しましょうと、そういう意味がありますね。そうすることで、地域の人々を輪のようにつなげていきたい。今回オンラインですけども、従来は先ほど成戸理事長が写真を皆さんにご覧いただいています。こんな感じの円卓会議で、かなり熱気のある会議です。残念ながら今年はオンラインでしか…。いま僕はサテライト会場にいますが、わずか12人のこじんまりとした会議になってしまっています。ただオンライン上では非常に大勢の方が集まっているので、ぜひ今回の輪中会議で、皆さん繋がっていただければと思っています。

主な構成メンバーはこんな感じなんです。ここで何をやるかっていうと、特に特別なことをやるわけではなくて、経験・悩み・工夫をみんなで共有しましょうと。その共有することによって、相互に刺激・触発を受けて、それぞれ次の年に向けて新しい、なにかの発展の種をつかんで帰っていく。また1年後、共有をして、それぞれがまたステップアップしていくというようなことを目指しているということです。

「民・学・官」の共同事務局でやらせていただいて、ここに参加されている人たちは非常にフラットな関係です。先ほど渡邊さんが僕のことを先生と呼ばないと言っていましたけれども、まさにフラットな関係で、それぞれの立場でお互い学び合う、情報を交換し合う。これまでもいろんな人が参加して、基本的に誰でも参加可能ですので、次の会議にこの人を呼んだ方がいいんじゃないかという人がもしあれば、会場に連れてきていただければと思います。

そして、こういった活動を2004~2006年ごろから現在に至るまで継続していますが、その間にだんだんこういう活動を発展させていくために必要な要素っていうのが分かりかけています。で、ここに書いてあるキーワード、これが非常に重要なキーワードで、これを頭に置きながら活動していくとどんどん発展していくんだということが分かっています。



防災【も】まちづくりという言葉があります。これは、反対語は防災【だけ】ですね。防災だけでなく、防災【も】考える。防災も他の話題も考える。この緑の3つのキーワード、これが地域社会の中に入っていくと素晴らしいという結論になっているんです。1つ目、「総合性」です。防災【も】まちづくりという言葉に表されるように、防災だけではなくて総合的に地域課題を考えていこうと。そして2つ目。自分たちでやるべき、やりたいと思う「内発性」。義務的にやるわけではなくて自分たちでやる。そして3つ目が「自律発展性」。これは、やりながら内容がどんどん膨らんでいく。この3つのキーワードが地域課題の中に埋め込まれると、どうも素晴らしい活動に繋がっていくんだということです。

それをするにあたっては、この「市民先行・行政後追い」。市民が先に走って、行政があとから追っかけて丁寧支援をしていく。このスタイルでやっていくとどうもうまくいきそうだと。そして、5つ目のキーワードが「多様性と

「緩やかな連携」です。いろんな人が、いろんな組織が緩やかに連携することが結果的にこの緑色の3つのキーワードをきちんと下支えしていくと。こういう構造で前に進めていくといいということがだんだんわかってきました。この輪中会議はこのオレンジ色の「多様性と緩やかな連携」を促進させるという位置づけになっております。

では、本題に入っていきたいと思います。まず1つ目のキーワードです。「流域治水」です。流域治水、これはいま非常に重要なキーワードになっています。一昨年10月、台風19号、荒川ではぎりぎりのところまで水が来ました。そのころから、世界から遅ればせながら、やっと気候変動とか、最近の気候危機と言う言葉が日本においても一般化してきました。それに関係する言葉として「流域治水」という言葉がいま流行っています。

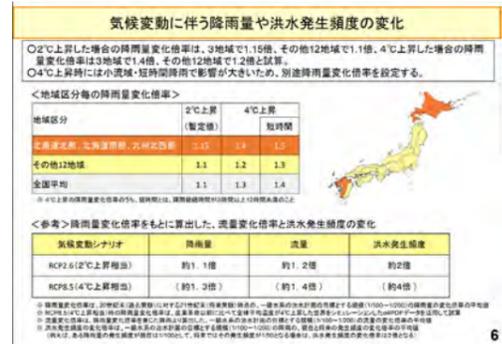
そして「コロナ」ですね。コロナ、というものもこの2年間にありました。この気候変動なんですけども、昨年やっとな、昨年やっとな、東京を台風が襲いましたので、やっとな全国的な話題になったんですが、その前の数年間を見ても、首都圏以外のところでは死者が大勢出るような水害が毎年のように、毎年確実に起こっているんですね。で、要は地球が温暖化して、結果気候変動が進んでいく。この気候変動って何かって言うと、こういうことになるんですね。「今まで大丈夫だったから」は通用しない時代に入ってきているんだと。どうということかという、これはいつも説明している図なんですけども、台風のシミュレーションをやると、地球が温暖化すると台風の個数が減るんですね。ということは、1個の台風が大きくなるということを表している。気候変動が進むと、雨が降るときはものすごく降るし、降らないときは降らない。要するに現象が極端化していくというのが気候変動なんだと。ですから水害が起こるのは雨が極端に降るときです。水害リスクは非常に高くなるんだということなんです。

ではその速度はどうかという、実は思いのほか、どうも速いかもしれないということ。これは京都大学の中北先生が国の会議に出した資料なんですけど、累積の二酸化炭素の排出量と地球の温暖化っていうのは、だいたい関係しているという結果です。

で、国土交通省の資料(右図)によると2度上昇すると水害リスクは2倍になる。つまり100年に1回の雨が50年に1回になる。今まで50年に1回の雨だったのが25年に1回の雨になるということで、わずか数十年で劇的に水害リスクが上がるかもしれない、という話なんです。

過去を振り返ってみると、2000年ごろの国土交通省の資料では、戦後河川整備がどんどん進んでいったので、水害の被害はどんどん減少しているんです。ということだったんですが、この先はちょっとどうなるか分からない。雨の強度がどんどん右肩上がりに上がっていく。インフラも一生懸命整備していきんだけど、雨の強度の右肩上がりにインフラの右肩上がり、もうそろそろついていけなくなるかもしれないというのが今の状況です。

そうすると、水害の外力、雨の力と、インフラの力の関係が、今まで差が縮まっていたんだけど、これから開いていくかもしれない。つまりこの関係が昔



の時代の関係に戻るかもしれないというのが、いま僕たちが置かれている状況であるということですね。

で、そういう状況を踏まえて、こういうことが言われています。「流域治水」です。「気候変動を踏まえた水災害対策のあり方について」というのが国で審議されました。これ、僕もメンバーです。あらゆる関係者が流域全体で行う持続可能な「流域治水」への転換が必要だと。ここでいう流域っていうのは、河川と市街地と地域社会と農地と山、要するに流域にあるすべてのもので頑張っていかなないと、どうにもならないとか、やばいかもしれない。だからみんなで一生懸命やりましょう、という時代に入ったということです。

ただ水害って何かって言うと、「川の容量を超えた雨が降れば、どこかで水は溢れる。溢れた水は、高いところから低いところにしか流れない。」という当たり前の事実があると。一方で、川の容量を増やすには長い時間と膨大なコストがかかると。ただこの当たり前のこの現象に対して僕たち人間社会はどう対応していくかということを考えていこうということなんです。で、この「流域治水」、流域のみんなで考えていかなければいけないと、川だけに任せておいても無理ですよという話なんです。昨年、埼玉の東松山市の議員さんからこんなことを言われたんです。「東京の友人から、『今回は東松山のおかげで助かったよ、ありがとう』と言われたんだけど、先生、これどういうことですか?」と言われたんですね。台風19号、この辺は被害がなかったんですが、埼玉では荒川の支流が溢れて大きな被害を受けている訳ですね。そのことに対して、東京のご友人の方は東松山のおかげで助かったと。どういうことかって僕は問われたんですけども、僕はこう答えました。「それはね、1人の友人からありがとうと言われるんじゃない、もっと大勢の人からありがとうと言われるべきです」と僕は答えたんですね。要するに、いま埼玉の方が整備水準が低くて、水かさが増えると埼玉でとれあえず溢れる。溢れたところは復旧できちんと直されます。次はたぶん、また埼玉のどこかで溢れる。順番に弱いところで浸水していくという被害になると思います。ただ1回浸水したところは骨折と同じで強くなりますので、しばらくすると、またこの下流が危なくなってくるという構造にあるんだということです。

ですから上下流のバランスっていうのも僕たちはきちんと考えていかなければいけないんですね。今までは地域の中を見ていたんですが、地域の外を見る眼差しっていうのがこれから大切になってくるのかなと改めて感じました。

次は「浸水対応型市街地」です。浸水対応型市街地構想。これは2019年7月に葛飾区から晴れて公の計画として公表された。実はこの輪中会議を含めて2006年ごろからのさまざまな活動の成果の1つとして、この「浸水対応型市街地構想」というのが取りまとめられました。キーワードとしては、「三位一体の対策」「浸水対応型街づくり」「浸水と親水」という。これは半分ダジャレなんです。

順番にいくと、まず「三位一体の対策」というのは、「貯める・流す」という治水対策。「逃げる」という広域避難対策。これまではこの2つでやってきたんですが、ここはこの2つだけではちょっと心配だということで、3つ目の「浸水対応型街づくり」、これは「受け流す」と。これを重ねていこうということですね。まあ治水と広域避難もやってはいるんですが、治水は非常に長い時間がかかる。広域避難対策は、いろいろ頑張っているんですけども、100%大丈夫かという、まだまだ努力が必要な状況だと。なので、この「貯める・流す」「逃げる」が仮に失敗したとしても上手に受け流せば大丈夫じゃないか

ということで、この「浸水対応型街づくり」というのが出てきているということです。

この「浸水対応型街づくり」は何かって言うと、浸水しても大丈夫な市街地です。要は「逃げられる」「生き延びられる」「容易に復旧できる」。それをソフトとハードで実現していこうということになります。

ソフトに関しては、2004年ごろ、2006年ごろからですね、この地域ではいろいろ活動していて、現在も継続しています。ある程度地域の中でさまざまな実績ができてきたかなと思っています。

ハードに関しては、まだまだこれからということなんです。これは先ほどご挨拶された中川さんです。2017年の朝日新聞にこんなことを書かれています。「都心に近く、リスクはリスクとしてきちんと取り組めば東京で一番いい街になる。100年後、200年後のことを考えたい。」非常にかっこいいセリフですね。

じゃあどう進めていくのかっていうことなんです。先ほどの「逃げる」「生き延びる」「容易に復旧できるようにする」と。それを30年以上かけてやっけていこうと。そして最終的には安心して住める街にしていくんだということです。

具体的に何をしていくのかっていうと、まずは今の施設を活用して避難空間をきちんと確保していきましょう。そして、浸水対応型拠点建築物・街区というのを作っけていこうと。これは自立型のライフラインを持っていて、かつ浸水しても大丈夫な空間をたくさん持っているような街区・建築物。さらに低層建物については、これから建て替えるときには被害を受けにくい形状・工法。そして被害を受けにくいライフスタイル。例えばリビングは3階にすることですね。寝室は浸水しないところにすることですね。あとは浸水したとしても復旧しやすい工法で建てていくと。こういう工夫をすることで、仮に浸水したとしてもちゃんとすぐに復旧できるような、そういう街をつくっけていこうということです。

浸水対応型拠点建築物というのはこんなイメージ（右図）なんですけども、周辺に対して避難空間とライフラインを提供する、要するに周辺に対して安全のお裾分けをします。こういった空間を地域の中に計画的に作っけていくというの、この浸水対応型市街地構想に含まれている要素であるということです。



で、すでにいろいろ進んでいますので、これについては後で葛飾区の情野部長から詳しく話があると思います。これを進めるにあたっては、「浸水と親水」です。要するに、「浸水」リスクだけを考えるのではなくて、水に親しむ「親水」性を高めることで、この浸水対応型市街地というものを、より早く実現していこうと。まさに快適かつ安全な街をつくっけていこうということです。

これ（表紙ウラ・下段の写真）は葛飾区、中川の七曲りですね。こういった素敵な水辺空間を都市開発の資源としながら、街をどんどんよくしていこうということです。都市の魅力を高めることで、浸水対応化を促進させていこうと。

2019年の6月に浸水対応型市街地構想が区から発表されました。それに先立つこと、東京都が、東京都の都市計画の上位の基本方針のなかで、都市計画で気候変動に備えるために浸水対応化を検討していくべきだということ、東

京都が書いたんですね。それは、葛飾区はすでにこういう検討をしているっていう根拠があるので、自信をもって東京都も書けたんですね。このなかで、国などにおける検討を踏まえて、浸水対策について検討していくんだと。葛飾を含め広域ゼロメートル市街地における都市開発諸制度などの活用によって浸水対策を検討していくんだということが書いてあります。このときには、都は「国等における検討などを踏まえて」と書くから、ちょっと当事者意識を持たず、逃げたんじゃないかって僕は一瞬思ったんですけど、「都市開発諸制度などの活用による浸水対策について検討する」と、ちゃんと書いてあったので。

去年は東京都と国がきちんと検討して「災害に強い首都『東京』ビジョン」、これは何度かテレビの報道でも出ています。「高台まちづくり」と呼ばれているんですが、こういった新しい制度の検討につながっているわけですね。これ（右図）の右下は葛飾区の浸水対応型市街地です。新小岩から都を動かして、そして国を動かしていくということなんです。



ちょっとここで、昔を振り返ってみたいんですが、活動当初、年に1回ぐらいシンポジウムをやっていました。2008年、2010年、2012年とあるんですが、この中で2010年のシンポジウムのときに「新小岩から世界へ」っていうキーワードを出したんですね。宣言で。そのときに、「いや、新小岩から世界へって、ちょっと大げさだし行き過ぎじゃないか」という風に思ったんですが、少なくとも「新小岩から日本全体へ」っていう話には今、なっているんですね。ですからもしかすると、この「新小岩から世界へ」っていうキーワードも、僕はこれから実現できるんじゃないかなと思っています。

今日はフランスからもマルク先生が参加されていますけど、この「気候変動への適応」というのは、いま全世界的に進められていることなんです。もしかすると世界的に見ても今回のこの葛飾区でやろうとしていることが、先駆的なモデルになり得るかもしれない。そういう意味ではこの2010年に皆さんが宣言した「新小岩から世界へ」っていうのが、実現される可能性があるということです。

そして、世界で言うところの「SDGs」。これいま、とても流行っています。17の目標があるんですが、この目標っていうのは世界共通ではあるんですけども、いま私たちが活動してきた、これから活動していくときの、ある意味チェックリスト的に使うととてもいい世界になるんじゃないかなということ、このSDGsと少し絡めることでより世界に近づくんじゃないかなということを感じていたりしています。

最後に、「コロナ」です。今回のオンラインもそうなんです。コロナは非常に壮大な社会実験だというふうに捉えられる。じゃあその壮大な社会実験の成果は何かということなんです。価値観の大転換と既存概念の刷新と。今まで常識だと思っていたことの、非常識さに気付くきっかけになったのかなと思っています。例えば毎朝殺人的な満員電車って、あれは当たり前だと思って乗っていましたが、冷静に考えると随分変なことだったりする訳ですね。そういう意味でいろんな意識の刷新がありました。ここに書いてあるのは、僕が感じたことなんですけど、満員電車然り、オンラインでいろんなことができるよ

うになってきたんですが、逆に言うと今までいかに漫然と人と対面してきたのかということにも気づかされたんですね。そうすると、対面することの価値っていうものを逆に再認識できた、とかですね。あとは家にいる時間が長くなりましたので、生活の最小単位の重要性を改めて認識することができた。つまり家庭の重要性を改めて認識することができた。それを家内に言ったら、「何をいまさら言っているんだ」とかなり怒られたんですけども、要するにいろんな意味でプラスの価値観の転換とか刷新というのができたんじゃないかと。これを受けて、この先たぶん世の中がいろいろ変わってくるに違いないというところですよ。

防災に関してみると、実はこれマイナスの影響ばかり報道されていますけど、プラスの効果っていうのもかなりあるなと、僕は思っています。

例えば家庭の大きさが改めて分かったお父さんがいっぱいいますので、自助の拡充に当然つながると。いまオンライン会議をやっていますけども、これまで地域防災の活動ってどうしても昭和的なやり方をやっていたんですが、これが一気に技術革新されたとかですね。

あとは「避難所」といえ、今までは屋内空間だった訳ですね。必ず屋内空間でしたけど、今は感染リスクがありますので、実は屋外空間のほうが価値があるかもしれない。最近の公園利用を見てみるとものすごくたくさん公園が使われているんですね。つまり屋外空間の価値が高まって、そこが避難所として使えれば、避難所のキャパシティがものすごく増えるという見方もできると。

あとは家にいる時間がたくさんになりましたので、地域コミュニティで活躍できる人の数がものすごく増えている。これをチャンスとして生かすべきだということです。

とはいえ、ちょっと気になるのはこれです。「分散避難」という言葉がこの1年よく使われるようになりました。要するに避難所は三密になっちゃうので、皆さん分散して、避難所に来ないようにしてください、という話なんですけど、これ僕は非常に大問題だなと思っている。分散避難って分かりやすい翻訳をすると、「勝手に逃げなさい」ということなんですね。要するに自助を相当強調している訳ですね。これ、勝手に逃げられる人っていうのは条件に恵まれている人であって、条件に恵まれていない人って、勝手に逃げようと思っても逃げ手段も逃げる先もないということなんですね。ある意味弱者にしわ寄せが行くような考え方がこの中に含まれているんです。そういう意味では、きちんと弱者に眼差しを向けた、バランスの取れたコロナの時代における避難というもの、僕たちは改めて考えていくことが重要かなと思っています。

だいぶ長くなってしまいました。これで終了です。どうもありがとうございました。

渡邊 はい、ありがとうございました。まあなんか、非常にたくさんの論点が出てきましたけど、第3部のところでの課題にも若干触れていますので、お話しの内容は非常に分かりやすいものでしたから、次に進みながら、中学生の質問も後で交えていきたいと思えます。それでは、荒川下流河川事務所の早川所長いらっしゃいますか。

早川 早川でございます。

渡邊 はい、お願いします。主題は「近年の水害と治水対策」ということですが、よろしくお話しください。

早川 よろしくお話しください。プレゼンテーション資料の共有をさせていただきますけど、よろしいですかね。

渡邊 南さん、よろしいですか。

南 はい、お願いします。

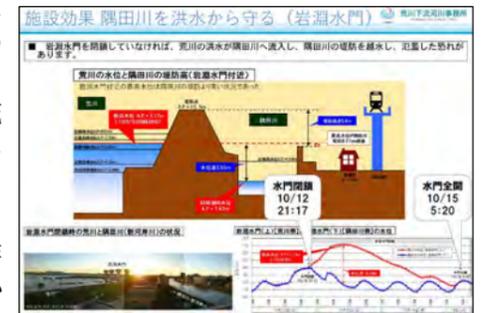
早川 はい。ちょっとお待ちください。

■ 基調講話 早川さん

早川 始めさせていただきます。
2年前に、台風19号、「令和元年東日本台風」と名前が正式につきましたけども。あの時は荒川の都内では13日(日)の朝方にピークが来まして、右の写真の通り、Arakawa Peil (A.P.) の7.17mまで上がったということでございます。これは、今までの大きな洪水を起こしたのものとしては、カスリーン台風、1947年ですね、終戦から2年後の昭和22年にございました。この時には荒川の岩淵(北区)の青水門・赤水門がある地点で8.6mまで上がったということで、それ以上の雨が降ったというのが、2年前の台風でした。その結果としては、水位としては7.17mということでそのカスリーン台風より1.5mぐらい低く抑えられたということです。これは雨の降り方もありますけども、上流側の方でダムの整備が進んだり、治水の事業が進んだ結果ということもいえるかもしれません。雨量に関しては戦後最大、ただし水位に関しては戦後3位ということになりました。



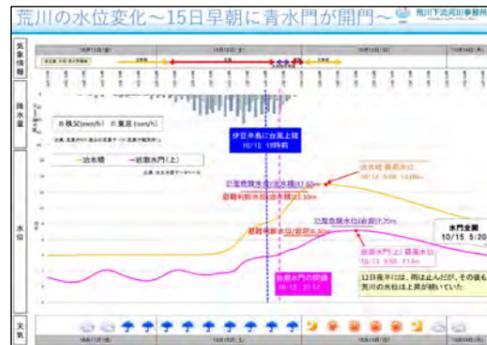
その結果、さっきの加藤先生の東松山の話もありましたけども、入間川の方で決壊が5箇所ありました。その結果として、この堤防から川が溢れたということが上流の方で発生したということです。各水系でも非常に高い水位まで上がりまして、施設としましては、荒川調節池というのがさいたま市・和光市、東京都内のちょっと上流側の方でございます。こちらの方で過去最大の3,500万m³という量をしっかり溜め込んだということで、下流側の水位を下げるすることができたということがあります。また岩淵水門からは、人工で掘った放水路です。明治の前にはそこには川がなくて、人工的に掘った河川です。で、ここの分波点がこの岩淵水門になっておりまして、岩淵水門から、今の荒川、荒川放水路のほうに洪水を流すことによって、隅田川の方は洪水が一切流れないという運用操作になっておりまして、実際これ、もし水門が開いていたらどうなったかと言うと、荒川の水位よりも隅田川の堤防の方が低かったんで、非常に危なかったと。どれぐらい水が高かったかということが分かると思います。



またこの右下のグラフを見ていただければ分かると思うんですが、赤いグラフのピークになっている、一番水位が高くなっているところが潮位ですね、高潮です。月の影響で満潮・干潮が起きますけども、幸い、低くなってきた時だ

ったということで、もしこれがちょっと時間がずれて高潮の、大潮のところ
に被っていたら更に水位が上がったということで、これも本当にタイミングによ
っては、さらに大きくなった可能性もあるということです。

これは時系列で見ますと、下に天
気が書いてありますけども、ご記憶
かもしれませんが、もう 13 日の朝
には晴れていました。青空のもとだ
ったんですけども、この状態が一番
危ない状態で、朝の 9 時頃に岩淵水
門のところピークで 7.17 とい
うことになりました。この水位がどん
どん下流に行きますんで、空
は青空でも、実は河川は危なかった
というところがあったというのが、前回の台風でございます。



我々の荒川下流の事務所としては、災害対策本部を立ち上げて対応している
んですけども、岩淵の水門の方が閉まったわけですけども、その洪水がある程
度収まったということで水門を開いたのが 15 日の朝の 5 時ということで、そ
れまで徹夜の作業で皆さん対応したということになります。

一方、利根川の方はもっと大きい河川ですので、利根川の下流の方も水位が
ピークがいったのが 13 日（日）のもうほんと深夜の深夜、14 日にかかるまで
ということですし、ある程度その洪水が収まったなど言えるところの水防団待
機水位が終わったのが 15 日と 16 日の境目だったということになります。

この利根川の上流側にはハッ場ダム、当時は試験湛水中でしたけども、ハッ
場ダムを含めて 7 つのダムがありまして、この中で 1 億 4,500 万トンの水を貯
めたということで、水位を下げられました。で、八斗島（やったじま）とい
う点が群馬県にあるんですけども、
そここのところ、ダムのおかげ
で 1 m 水位が下がったという効
果があったということです。



利根川上流のダム（国土交通省 HP より）

また国土交通省では排水ポン
プ車というのを持っておりまし
て、洪水の水が市街地に行った
時に川に水を戻すという所で活
躍する機械でございます。で、
私はあの当時関東地方整備局の
方の災害対策本部でこの排水ポ
ンプ車の運用ですね、どこにど
の車両持っていかというオペ
レーションをやっていたんです
けれども、全国から排水ポン
プ車を導入しまして、全部で 89 台
を 24 時間展開させて、決壊した
ところ、茨城県的那珂川、久慈
川の方でもございましたけども、
そういうところで大量投入させ
ることで、できるだけ早く終わ

らせようと。そして、17 日の夕方に排水が全て終わりました。

私も 12 日に出勤して、17 日の夕方、これが終わったのでようやく家に帰れ
たということで、ほとんどそれまで徹夜で、少し仮眠を取るぐらいでずっと泊
まり込んでやっていたということになりました。

ただ、台風が終わったあとに、さらにまだ雨が降るという予測もありました
ので、関東地方整備局のところにかかった全国の排水ポンプ車を、決壊した危
ないところに前進配備させるということをやったと。こういう対応を国土交通
省はやっております。

で、以上が台風 19 号の時の対策・対応でしたけども、こういう洪水になら
ないように河川の中で洪水を安全に流すということが大事ですので、橋梁の部
分で低い所がある JR 東北本線の赤羽付近のところの両脇を盛り土したり、京
成本線のところもまだまだ 3.7 m も低いということなので、この京成本線を新
しい橋に架け替えるということも進めています。

また、高規格堤防、「スーパー堤防」とも呼ばれていますけども、そういう
ところの堤防の背後の街自体も嵩上げしてしまおうということも、引き続き、
荒川下流ではやっております。

さらに、先ほど紹介した荒川調節池は第一なんですけども、これで 3,500 万
トン溜めましたけども、さらに上流側に第二・第三の整備を今しております。
工事によく着手したという状況です。これで更にプラス 5,100 万トン貯
められるということで、これによって大きくその下流側に住む、特にゼロメー
トル地帯にお住まいの方の皆さんの水害リスクを下げるということを一生懸命
やっているということになります。

他方、まだ気候変動の影響というのはますます可能性大きくなるというこ
ともありまして、気象庁・環境省から出しているような報告書であっても、国
管理河川や、それよりちょっと小さい都道府県管理河川においても、氾濫危険
水位を超過した洪水の発生件数も増加傾向とか、内水被害の被害額の増加とい
うところが、確信度の高いところから出ているということなので、ハード対
策もしっかりやらなきゃいけないということになります。

ただし、川の中ですべての水を貯めて流すということになかなか限界があ
るのかなというのが、この「東日本台風」だったり、気候変動の影響で感じて
いるところです。

そこで、国としては、先ほどもありましたけども、「流域治水」というキー
ワードで流域のあらゆる関係者が協働するという、パートナーシップのものと
水害対策というのを始めました。これは、我々河川管理者だけじゃなくて、流
域の市街地に住む皆様とか、あと山側の森林とか田んぼとか、あらゆる関係者
の皆様が水害対策をやっていくと、一緒にやっていくということが大きなポ
イントになります。

そこで、荒川下流におきましては、「SDGs」を活用してこの流域治水に取り
組んでおります。昨年の 8 月にキックオフした時には、葛飾区の区長さん、青
木区長さん含めて、7 人の区長さん全員揃いになりまして、非常に意識の高
い、水害に対して意識の高いということが確認できたということございませ
ぬ。この SDGs につきましてはまさにこの今回の輪中会議のように、円形になっ
ているというのが実は肝でして、全てのこの 1 から 17 のゴールをまとめてやっ
ていくと。あと一つの目標を達成することによって、他のゴールにも影響して
良くなるということが、この円形の SDGs のアイコンに表れているというこ
とになります。

で、この SDGs の一番大事なところとして私が思っているのは、**経済・社会・環境**ですね。右側のイメージ図は「ウェディングケーキ」と呼ばれますけれども、それぞれ経済と社会と環境が 3 つ全部関係し合っているのです、これを不可分のものとして調和させて、最適な目標を目指していくところが SDGs のとても大事なことであります。実はこれが、「河川法」という法律で我々は仕事をしているのですが、**治水、洪水のこととか、水を利用することに加えて、環境**ということも一緒にやるというのが法律の役割になっておりますので、とても親和性が高いなということになりまして、**流域治水と SDGs を始めた**ということになります。



では、ちょっと具体的に 3 つゴールをお示ししていますけれども、例えば 1 番の「**貧困をなくそう**」というゴールがあります。それはどうしても「**貧困**」という言い方をしてしまうので、海外の非常に所得の低いところの方々のことを考えたりしてしまったり、海外の国際協力の方が言われてしましますが、実はこの「**貧困**」というところの意味には、**気候変動で脆弱な状態を軽減する**ということも入っております。

つまりこれっていうのはゼロメートル地帯とか、洪水に浸水しやすい所に住んでいるということ自体がこのゴール 1 で非常に重要な点でありまして、ここをしっかりとやっていくということも大事なことであります。

結果的に**レジリエントな、強靱なまちづくり、水害に強いまちづくり**ということも実現できる**ゴール 11**のオレンジになったり、気候変動も、地球温暖化を弱めるということ、二酸化炭素を減らそうとかいう話がイメージしやすいと思いますけれども、**適応策**ということで、気候変動で激甚になる水害に対しても対応していく**適応策**というものも、水災害に対しては重要なゴールになってきます。

これを SDGs の「**誰一人取り残さない**」というキーワードのもとに、誰一人取り残さない防災・減災を、あらゆる関係者でやっていく、「**マルチステークホルダーパートナーシップ**」っていいんですけども、それを**経済・社会・環境**の課題解決で取り組んでいくということをやっている、ということを目指しています。で、SDGs のいいところは、多くの皆さん弱み、弱いところと強いところがありますので、その強いところの様々な多様なメンバーが、いろんなプロジェクトに関与することで、トータルとして世の中を良い方向に持っていくということが大事なことかなと思っています。

で、建設業の皆さんもこのような工事看板を作って、流域治水を荒川下流の事務所と建設会社と一緒にやって SDGs に貢献しているんだっていう看板も貼るようになってきました。そして、この**流域治水**に関して一番下流域で重要なのが、「**高台まちづくり**」になります。この後の葛飾区の情野部長からも具体

的な話あると思いますけれども、堤防の背後の幅を広げることで高台を作るような高規格堤防だけではなくて、川から離れている場所の公園で高台の公園を作ってあげたり、また先ほどの浸水型の建築にもありましたけれども、建物自体で洪水をいなすと言いますか、洪水にも対応できるようなものを組み合わせるところが高台まちづくりの大きなポイントになります。



このような取り組みを、荒川下流の事務所で、SDGs を使って、あらゆる関係した多くの皆さんが防災をやることで、SDGs、防災【も】SDGs、ということも PR しながら今進めているところでございます。

で、今までは「**水防災意識社会**」ということで意識改革というところを先行して行っておりましたけど、この「**流域治水**」になったところから行動変容ということも非常に大きなキーワードになってまいりました。

ここで皆さん、我々も含めて皆さん非常に苦労しているところなんですけども、「**避難しましょう**」と言っても皆さん避難してくれないんですね。あと私もちょっと地元で町内会に言われて、なんとか若い人を町会に入ってもらえないかって言っているんですけども、チラシとかで自治会に入りましょうって言ったからといって誰かが入ってくるわけでもない。この言い方、正しいこと言えば人は行動するわけではない、ということはどうするか、っていうのがとても大事なところになってきています。

で、そこで、最近では「**ナッジ (Nudge)**」という言葉で、人の行動を促すということもちょっとトレンドになってきています。人々が強制的に「やれよ」と言われてもやる気にならないんですけども、**自発的にその行動を選択するように促す**仕掛けっていうのが大事なかなと思います。そのなかで、去年から NHK の取り組みとして、有名な Youtuber の「**フィッシャーズ**」っていうのがいるんですけども、そこんこで動画で非常に素晴らしいナッジがあったので、ちょっと何個か紹介させていただきます。

ちょっと動画がうまく動かないんですけど、ごめんなさいね。PowerPoint で示してしまいますけれども、この一つ目のやつは、「**雨がだいぶ強いなあ。でも避難したいんだけど、まだ編集が終わってないからね**」と Youtuber がいうと。だけど「**避難先体育館だし、筋トレできんじゃね？**」と。彼は筋トレ大好きなんですけども、そしたら「**よし行こうか**」という形で避難すると。また、2 段目においては



「父ちゃん。裏の川がだいぶ増水してきたよ。」「今コロナもあるし動かない方がいいんだよ」と言っているんですが、「高台のお姉ちゃんなら孫の顔も見られるよ」と言う。「すぐ避難しよう」と言う。あと、「おばあちゃん台風が近いから避難しなくていいの?」「いや、おじいちゃんの仏壇おいてけんよ」というところに対して、「もう紅白で紅組が勝つところ見なくていいの?」っていうと、「避難しましょう」と言って動いたり。やっぱり人を動かす言葉って様々だと思うんですね。こういうのをうまく使いながら、どのように**防災力**を地域で高めていくか、というのも大事なところになっているのかなと思います。

また流域治水に関しては「**ミズベリング**」という取り組みも国土交通省でやっております。今まで河川管理者で一生懸命責任感持ってやってきていたところもあったんですけども。ここに加えて、皆さんに少し楽しみながら言ったら少し誤解もあるかもしれませんが、積極的に、流域治水、水害に強くするにはどうすればいいのかなってところの**アプローチ**というのでもやってかなきゃいけないのかなと思っています。

最後ですけども、この行動変容ということで、我々荒川下流では「**みんなで一緒にあらかわろう!**」というキャッチフレーズを今年の2月に立ち上げまして、**三つの柱「SDGs」「DX」(デジタルトランスフォーメーション)と「ミズベ・グリーンコミュニティ」**に取り組んでおります。これを実現することで、人も、街も、川も、ウェルビーイングな状態、幸福な状態・健康な状態に変容していくというトランスフォーメーションを目指そうと思っています。こういう取り組みをするのは、本当に**みんなで一緒にやらなきゃ実現できない**と思っています。

あと最後ですけど、こちらの方でもアプリを開発したりしていますけども、国土交通省でも三次元の河川管内図を開発しまして、これを活用することで、今まではハザードマップって色で深さを表現してましたよね。これを実際に3次元の図で深さを具体的に表現することで、家一軒本当に沈んでしまうとか、そういうところも具体的にお見せすることで、水害リスクを皆さんに正しく理解していただきながら、**高台まちづくり、流域治水、というところを展開したい**と考えております。

以上、荒川下流の早川からの発表になります。ありがとうございました。

渡邊 はい、ありがとうございました。まあなかなか大変なものですね。19号の体験というのは実はNPOの機関誌でも取り上げているんですが、なかなかこの「水への対応」というのは、言わばどんどん難しくなっているんでしょうかね?それとも、なんて言いましょうか、たかだか知れた対応しかまだできてないと言うべきでしょうか?またその辺は後ほど中学生からも質問がありそうな気がします。

この**三つの目標**ってというのは、もうひとつよく分かりにくかったんですが、日本語で言うとうどういうことになりますか?

早川 ありがとうございます。

SDGsについては「**持続可能な開発目標**」という日本語になっていると思いますが、ちょっと日本語の翻訳がちょっと悪くて、本当は「**持続可能な発展目標**」って言った方が皆さんに伝わりやすいとは思いますが。本当は中国か韓国とかは、ちゃんと「**発展**」って翻訳しているんですけど。開発って言うと**資源の開発のイメージ**があるけど、我々の生活というか、**人間自体が発展していくためにどうするか**というのがSDGsですね。

で、DXというのはちょっと分かりづらいと思うんですけども、今はそのデータとかデジタルとかが非常に豊富な状態になっておりますので、それを使いながら、多くの方、高齢者の方も含めて分かりやすいものとして伝えるというのが大事だと思ってまして、先ほどお示したのは三次元、立体のイメージ図を作ること、どれぐらいの深さ、自分の家が沈んでしまうのかなとかいうのも具体的に見せるということもあったり、デジタルのところをうまく使って皆さんに**水害リスクを共有**するようなことをしたいということです。

で、最後の**グリーンコミュニティ**というところも、ちょっと時間があれば丁寧に説明したいところだったんですけども、我々、河川、荒川に関して関心を持っていただいている市民団体の方もいっぱいいるんですけども、これをやれば持続可能な状態で皆さんに参加していただく仕組みが重要だと思っております。この**グリーンコミュニティ**というキーワードのもとに、荒川のSDGs絡みでいうと、やっぱプラスチックゴミとか、ごみ拾いとかがとっても大事だと思うんですけども、そういうところに皆さん参加していただいたり、その中で結果的に「**荒川ってというのは放水路だよ**」とか、「**洪水に対応するものなんだよ**」っていうのも**気づいてもらったり**、そういう直球勝負ではなくさまざまな取り組みのアプローチから水害のリスクについて皆さん認識しながらやっていただければありがたいなと思って取り組んでいるところございます。

渡邊 ありがとうございます。また色々お話を伺いたいこともたくさんありますのでよろしくお願いします。

早川 お願いします。

編集部より

ミズベリング (MIZBERING) は、新しい水辺の活用可能性を切り開くための官民合同プロジェクト。「水辺+RING (輪)」および「水辺+R (リノベーション) +ING (進行形)」を由来としている。例えば、毎年7月7日 (川の日) に全国各地の水辺で同時に乾杯をして SNS でシェアする「水辺で乾杯」や、東京スカイツリーから隅田川・浅草にかけての鉄道高架下と親水遊歩道を一体的に整備した「東京ミズマチ」など、ソフト・ハードの両面で、民間の活力を生かした取り組みが進められている。

持続可能な開発 (Sustainable Development) は、「環境と開発に関する世界委員会」が1987年に公表した報告書「Our Common Future」の中心的な考え方として取り上げた概念で、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」のことを言う。この概念は、環境と開発を互いに反するものではなく共存し得るものとしてとらえ、環境保全を考慮した節度ある開発が重要であるという考えに立つものである。この理念は1993年の「地球サミット」の「アジェンダ21」や2000年の「ミレニアム開発目標 (MDGs)」へと継承され、2015年の「持続可能な開発目標 (SDGs)」に発展している。

■ 中学生からの質疑・感想

- 南 渡邊さん、今、中学生もう出なきゃいけないので、質疑をここで入れさせていただきます。よろしいでしょうか？
- 渡邊 じゃあここで質疑を入れましょうか。
じゃあ中学生諸君は誰が、誰が、どうですか？荒下の早川所長さんと、加藤さんの話は非常に分かりやすかったと思うんですが、どうですか？ここが分からないな一つというようなことがあったらまず聞いておきましょうか。どうぞ。どなたか手を、渡邊には皆さんの映像が見えているので手をちょっと上げてみてください。はいどうぞ。
- 渡邊 声がちょっとこもるから、もうちょっとマイクに近づいて。
南 前に出てきたほうがいいのかもわからない。
- 中村 上平井中学校の2年の中村です。さきほど加藤先生のお話の中で、専門家と世界の認識と日本社会の認識の間でギャップがあると言っていたと思うんですけど、そのギャップの溝と言うのはどのように埋めていくと考えているんでしょうか？
- 渡邊 なるほど、加藤さん、どうでしょうか、このなかなか鋭い質問ですけども。加藤さん？
- 加藤 質問の前半部分がちょっと聞き取れなかったんですが、何のギャップですか？
- 渡邊 中村くん、もう一度。
中村 専門家と、世界の認識と、日本社会の認識の間にギャップがあると。
加藤 世界的に見ると気候変動の速度感について、ほかの国はかなりはやいと感じていて、日本社会は割とのんびりしていると。そういう意味でギャップなんです。なので、そのことにやっとなら日本社会がいま気づきつつあるので、若い世代も、全ての世代を含めて、頑張って急いで走り出すことが重要だと思います。
- 渡邊 はい中村さん。中村君にしましょう、中学生。中村くん。
要するに自分もその一緒に考えなきゃいけないメンバーの一人で、重要なメンバーだというふうに私は思うんですけど、いかがですか。
- 中村 はい、私もそう思います。
- 渡邊 そう、良かったです。で皆さんの活動はすごくこれから大事になってくると思いますのでまたもうちょっと深い議論をいつかできる機会を持ちたいと思います。よろしいですか、中村君。
- 中村 はい。
- 渡邊 その他にどうですか、中学生の、時間ギリギリですが。手を挙げてください、見えますので、渡邊に。はいはい、先生？太田先生？はい、よろしくお願ひします。手を、中学生の手をあげると私見えるんですけど、はいどうぞ。
- 大金 3年の大金です。
南 はい、大金さんですね、はい。
- 大金 さきほど話に出ていた、ダムの方で、川が1mほど下がったっていうことを聞いて、とてもダムが大事なものだと思いました。
- 渡邊 はい、ダムと川の水位のような関係性を、実際に自分で観察したんですか。
大金 いや、観察はしていないんですけど、先ほどお話を聞いた中ですごくいいと思って。

- 渡邊 なるほど。早川さん、このような発言に対してどうですか。河川管理者として。成功しているのか、まだまだ心配なのか。
- 早川 ありがとうございます。やっぱり、こういう大きな洪水が起きると初めて、ダムというものが何のためにあるかって理解できるんですね。今回台風19号、とっても大変だったんですけど、そうやって多くの皆さん、中学校の皆さんも含めて、こういう洪水対策の施設の役割を理解していただければとても嬉しいです。
でもやっぱり気候変動でどれだけの洪水が起きるかは分からないので、ダムに信じ切るのではなくて、ダムも大事だし、川で洪水をしっかりと流すのも大事だし、またもしかしたら堤防、今も立派な堤防あるんだけど、その堤防を乗り越えて洪水が来ることもあるかもしれないってことも意識しながら、皆さんのところを、どうやってみんなの命を守るのかとかいうのは、ぜひ考えてもらえれば嬉しいです。
- 渡邊 なるほど。いま質問した大金さん。まだ深い疑問は残っていると思いますが、まあダムだけで考えない、堤防も大事。そして私たちの暮らし方もおそらくすごく大事になってきて。そここのところはまた部活で少し議論できる機会があるといいですね。
- 大金 はい、ありがとうございました。
- 渡邊 時間の制約があつて、深く議論できなくてごめんなさいね。また部活でやりましょう。
- 中学生一同 ありがとうございます。
- 渡邊 あ、これで質問は終わりですか。どうもご苦労様でした。今日は短い時間の参加でしたけども、いい質問でした。
- 成戸 参加していただいてありがとう。
- 南 じゃあちょっと、中学生の皆さんと、いま発言していただいた、加藤さん、早川さん、渡邊さんのこのメンバーで、私の画面上で写真を撮りたいと思います。大金さんちょっと戻ってもらって、全員映るように入ってもらって、なるべく密にならないように工夫して並んでもらっていいですかね？はい、ありがとうございます。ちょっと私のパソコンで取らせていただきますね。チーズ。もう一枚撮りますね。チーズ。はいではこれ後で送りますので、はい今日は皆さんありがとうございました。
- 成戸 ありがとう。
- 渡邊 なんかWebで参加者で写真が撮れるというのも面白いですね。
- 南 また後で質問出たら、皆さんにお渡ししたいと思います。
- 渡邊 それでは情野さんに移りましょうか。情野さんの話を中学生に聞いてもらえないのは残念ですが、これは区の方からパンフレットも届けることができるのではないかと思いますので、情野さんあとでフォローしてください。では情野さん、それではよろしくお願ひします。

■ 基調講話 情野さん

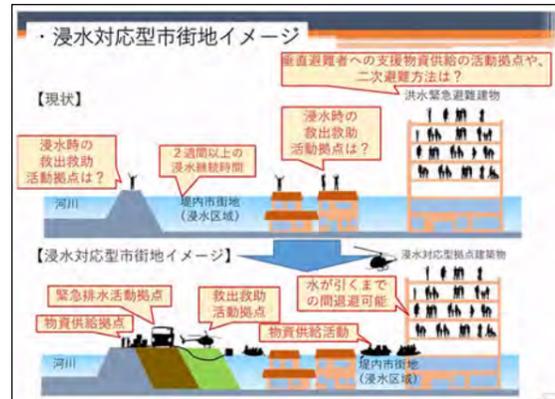
情野

葛飾区の情野です。よろしくお願ひします。
私からは画面共有して進めさせてもらいますので、よろしくお願ひします。
もう先ほど、加藤先生と早川所長の方から関連ある話がだいぶありましたので、**葛飾区が何をしているのか**ということに絞ってお話しさせていただきます。

いま画面に映っている(右図)のが**浸水対応型市街地のイメージ**ということで、画面を見て上が現状、下が将来ですね。左側を見てもらうと、河川の堤防では今、どちらかという、ここで救出・救助を待っているような人が、堤防にわずかな高さしかないということなんですが、**浸水対応型市街地**になった場合は、そこが避難場所としても使用できるというメリットもありますけども、実際には家などに取り残された方の救出・救出の拠点になったりとか、物資供給の活動拠点になる、というイメージを、堤防沿いや**高台の公園**でしていると。また、右側の方は「**洪水緊急避難建物**」ということで葛飾区は指定しているんですが、実際にはエネルギーとか何も無いということで、水が引くまでの間、避難活動などをしようとする、前の鬼怒川の決壊のときみたいに、実際にはヘリコプターでの救助のような形で長く時間がかかってしまう。そういうことがあるので、救出・救出の拠点にして、かつその避難先の拠点でのエネルギー供給などをできるようにして、そこでもできる限り長く暮らしができるような場所を作っていこう、というのが市街地のイメージです。左側の方は「**浸水対応型の拠点高台**」、右側の建物は「**浸水対応型拠点建築物**」ということで、こういうものを作っていこうという取り組みを今具体的に進めることが始まって来たという状態になっています。

あとは、先ほど**浸水対応型拠点建築物**のイメージは加藤先生のところでもありましたので、**いま実際に取り組みを開始したもの**を紹介しします。まず「**拠点建築物化**」については、公共側のところでもできる限り早めにやっっていこうということで、**小中学校で拠点建築物化をするにはどうすればいいか、ということから取り組みだした**ということです。これは当然ですけども、地震災害でも**避難所**になる、身近な場所にあるということ。また今後建て替えが計画的に進んでいく、ということがありますので、できる限り小中学校をそういう考え方で建て替えることをしていけば、地域に最低限の拠点建築物ができるんじゃないか、という発想で進めているところがございます。

学校についてはこれまでも**マンホールトイレの整備**や**井戸の整備**などを進めたんですけども、実際には地震対策というところがあったものですから、水害時にはあまり機能しないものだったというところがあります。こういうこともあって、今回**浸水対応型拠点建築物化**にあたっては、**水害**ということをイメージして、具体的に“**どんな対策をすれば水害時に少しでも避難者がそこで生活が可能になるのか**”ということテーマに検討をしたというのがこの絵になります。絵にもありますように、**避難者のメインとなる収容場所として体育館**がありますので、それを水没しない、**2階とか3階以上の高さ**に設置をしていく



ということとか、ポンプの水没によって飲料水が使えないという話もありますので、それを、**直接水道を使って確保していこう**という話です。また**受電設備系**についてはなるべく**屋上などに設置していこう**。また**救助・救出**を受けるには**外階段が有効だ**ということが今明らかになっていっていますので、**外階段を設置していこう**、みたいなことを整理しているところです。

もう1つは今言ったエネルギーの関係ですけども、**中圧ガスを導入して**、少しでも**被災リスクを減らしていこう**というところで、**コ・ジェネレーションシステム**とか、**ガスヒートポンプ**とあわせて導入するっていうことを今進めています。また**太陽光発電**、**プラス大型の蓄電池**の導入とか、**バーチャル・パワープラント**というような方策を示しまして、特にこの分野と言うのは**革新が速い**という所もありますので、できる限り、何、という決め打ちをするんじゃなくて、その時期の最新のものも取り入れていこう、という方針で、今進めているというところがございます。

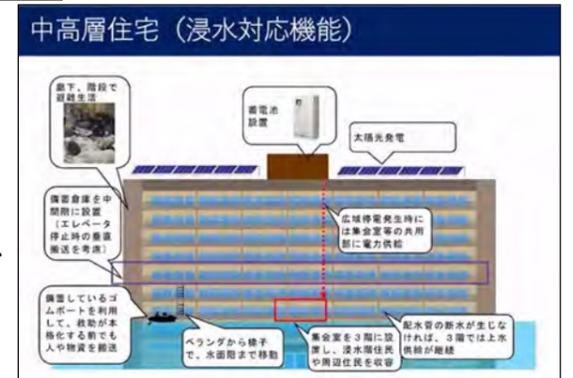
これ(右図)が実は、その検討を進めているときに建て替えの計画のあった小松中学校の建て替えです。ここにもありますように、ここについては**浸水しない階への屋内運動場の設置**、あと**外階段の設置**、先ほど言ったような**中圧ガス**とか、**非常用発電機**を**水没しないところに持っていく**とか、**太陽光発電施設の設置**など、特に**エネルギー系については複数導入**をして、どれかがダメになっても最低限のエネルギーが供給できるようにというところで、取り組みを、もう進めだしているというところなんです。



また**本田中学校の建て替え**については、ここは残念ながら**中圧ガス**が近くに来ていなかったということで、それ以外の**2つの対策**を入れて建て替えを進めました。そういう形です、**“公共としてできることが何か”**ということ今テーマを絞ってやっているとこのところなんです。

ただ、当然ですけども、葛飾区の小中学校って**73校**しかないですから、それだけでは**避難場所**、皆さんが逃げ切れるという形にはならないというのがありますので、**今後一番多く進めなければいけないのは民間建築物の浸水対応型拠点建築物化**ということが重要になってくるということで、どうすれば誘導できるのか、という検討をしています。

今想定しているのが、例えばですが、**中高層住宅**や**大規模小売店舗**です。なぜそういうものを想定しているかっていうと、現状でも協定を結んで、地震災害ですけども、やり取りをしているということもありますので、これを**水害時の避難場所**にも使えるように進めていこうということで、今、どういった策がい



いのかという検討をしています。

中高層住宅ですと、ほとんど学校避難所と同じような機能ができる限りやっつけていこうということで、いま集会所などを設置してくれ、というお願いをしていますけども、それをできる限り水没しない場所に持ってもらうということ、中高層住宅の中では入っていたり。また大規模小売店舗ですと、立体の駐車場を併設しているところが多いので、これを避難所として活用していくにはどうすればいいのか、という視点でやっつけていまして、例えば太陽光発電の活用を、EV 充電器、自転車のEV 車を蓄電池として活用するような形で、エネルギーとして使えないか、というような検討も、今させていただいているという状況でございます。

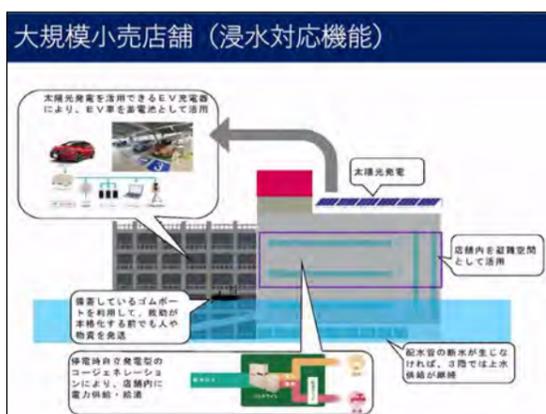
これについては、今年度制度構築をして、令和 4 年度から区の補助金制度を作って、民間を誘導していきたいと考えているのと、また国でも同じような取り組みをしていますので、国の補助要綱との整合をどう図っていくか、想定を令和 3 年度中にして、令和 4 年度スタートということを考えているという状況でございます。これが（浸水対応型拠点）建築物化についての進行状況です。

もう 1 つが、先ほどあったスーパー堤防もあわせてなんですけど、拠点の高台を作っつけていこうということで、これは実は都市マスの中にも書いてあって、すでに柴又公園とか東立石緑地公園のように一部ができているという状況になっています。ただこれまでは、先ほどもちょっと話したんですが、“避難場所にしよう”というところがメインだったんですが、いま新小岩公園について検証を進めているというところですけども、これは昨年地域の方と一緒に作った基本構想と言う形なんですけども、「未来志向の公園づくり」を目指そうということで、単に防災だけではなくて、平時の使い方も含めた改善を図ろうということで、取り組みをいま進めています。

具体的なイメージですけども、特に新小岩公園は、皆さんも知っていると思いますけど、首都高速とも土手をつないでいくと直結できる。ですから浸水しない形の中で車での移動も可能になる場所だということもあって、いま東京都が進めている緩傾斜堤防の整備とも一緒に、一部公園を高台化していくということも考えているという状況です。高台ゾーンでは、車での活動も想定したような、荷捌きとか、車両の転回スペースを設置したりとか。あとは、ヘリの離発着。こういうようなスペースを設けていくということ、いま整理をして、“こういう機能については最低限入れていく”ということ、地域の皆さんとある程度合意しています。

それ以外のところの使い方については、斜面をうまく使った処理ができないかということも含めて、今どうリニューアルしていこうかをまとめていまして、今年度できれば基本設計を進めたいという状況でございます。こういった形です、区の事業と連結してやれるところを、いま取り組みを進めています。

最後が、先ほど加藤先生の方からもあった、災害に強い首都「東京」形成ビジョンということで、実はこの中にはモデル地区っていうものの設定がされています。葛飾区については「浸水対応型市街地の検討」ということで、こうい



う市街地構想を作っつけてやっつけていたということがありますので、全域をモデル地区という位置づけにして、できることをやろうということ。想定しているのは、再開発が今だいぶ、立石、金町、新小岩で動いていますので、こういう所で再開発と合わせた建築物による拠点建築物化をやっつけていけないか、という検討も、この中で合わせて進めたいと思っています。また、先ほど言った、葛飾区の補助要綱と国の補助要綱をうまく連携してやれるようにという検討も、この中でやっつけていければと思っています。

また、今日は江戸川区から立原部長が出ていますけれども、江戸川区も実はモデル地区として 3 つエントリーしています。具体的な取り組みが多くて、今篠崎地区で進んでいる公園と一緒に高台化とか、小岩駅周辺では今再開発が何か所も動いているんですが、そういうところをうまく回遊させていくような形のものやっつけていこうということ。それともう 1 つは新庁舎建て替えに今取り組んでいますので、そこで実現していこう、というような 3 つを江戸川区が挙げた中で取り組みを進めているということで、こういった形で今、各区で取り組みが具体的に進みだしているということがあります。

これまでは葛飾区独自の市街地構想だったんですが、ほとんど同じ発想の高台まちづくりっていうものが、国と都の、先ほど言った計画の中に出されたので、葛飾区としてはこれをチャンスとして、具体的に動けるところを少しでもやっつけていく、ということを引き続き進めたいと思っています。

すみません、簡単ですけども以上とさせていただきます。ありがとうございます。

渡邊 はい、ありがとうございます。情野さん、随分なんか細々しくというか、リアルに進んでいるように思うんですが、これは 4 年前の輪中会議からすると、非常に具体的に進展しているなあという印象で受け止めていいんでしょうか？ それとも、どうでしょうか、国と区はうまく連携できているという理解でよろしいんでしょうか？

情野 はい、これまではどちらかというと本当に「葛飾区の構想」というものだったんですけども、先ほど加藤先生の方からあったように、今は都・国という形の中で葛飾区だけじゃなくて、こういうような低地帯、全部の取組みとして今後はやっつけていこうというイメージで進んでいますので、そういう意味では前進してきているのかなと思っています。ただ、具体的な取り組みは、先ほど学校の取り組みを言いましたけども、70 校全て、すごいスピードで進むわけじゃないから、本当に着実にやっつけていかなきゃいけない取り組みだと思っています。

渡邊 なるほど、分かりました。初めてのご参加の方が 40 人近く入るんですけど、どなたかこの 3 つのお話で何か質問しときたいってことありますでしょうか？ 初めての方いらっしゃいますか？ どなたか？ まあ、なければまた後ほどの議論の中で出していいただければと思います。第 1 部はだいたいこういうことですが、南さん、タイムスケジュールはいかがでしょう？

南 はい、現在 40 分押しになっております。

渡邊 あ、そうですか、ここで 40 分押しですか。じゃあ休息なしでいきますか。Web だから、それぞれおトイレ休憩はご自分で取っていただくことにして、2 部に入ってよろしいですか？ 加藤さんよろしいですか？ サテライトの加藤さん。

加藤 はい、大丈夫です。進めてください。

＜第2部：多様な活動報告と意見交換＞

- 渡邊 では2部に移ります。
2部の多様な活動報告と意見交換ということで、予定時間は1時間ですが、40分押しているということは、先で詰まる可能性もありますが、地域からそれぞれ町会、地域活動などについて、少しさっきあの19号のお話も出てきましたので、景山先生いらっしやいましたね。景山先生いらっしやいますか？
- 南 景山先生は…
- 渡邊 いらっしやない？
- 南 まだ入ってらっしやらないかと思えます。
- 渡邊 分かりました。竹本さんはいらっしやいますか？いらっしやらない？
- 南 竹本さんは先ほどいらっしやいましたが。
- 渡邊 聞こえてないですか？
- 南 竹本さんいらっしやいますね。
- 渡邊 竹本さんいらっしやいますか？
- 成戸 ミュート中？
- 渡邊 さもなくば、青柳さんはいらっしやいますか？
- 南 青柳さん今日ご欠席です。
- 渡邊 あ、そうですか。じゃあ、地域からの活動についてどなたか？中川さん？
- 中川 竹本はいた訳ですけど…。
- 渡邊 中川さんのところでどなたかいらっしやいますか？
- 中川 ここにはいないです、私一人なんです。
- 渡邊 台風19号の経験の共有がどんなふうになっているかというのは、ニュースレターの追記的に何かありますでしょうか？
- 中川 はい、今回の19号につきましては、竹本と当時連合町会長だった青柳会長が主に担っていらっしゃいましたので、聞いていただければそのほうがいいんですが。
- 渡邊 いままだ入ってないですね。
- 中川 先ほど竹本いましたんですが、いませんか今？
- 渡邊 南さんどうですか？
- 南 竹本さんは中にはいらっしやるんですが、今マイクもビデオもOFFになっているのでちょっと離席されているかもしれません。
- 渡邊 なるほど、はい。では地域のことはまた追って。
- 中川 それじゃあもう来ると思いますので、私がしゃべるよりいいかと思っておりますので、よろしくお願いします。
- 渡邊 分かりました。小中学校からということで、校長先生今日はどなたがいらっしやいますか？
- 南 今日は小学校から松上の渋谷先生と、あと会場の方に二上の三谷先生がいらっしやるかと思えます。
- 渡邊 お二方ちょっと、お話しただいてよろしいですか？会場にいらっしやるのは？三谷先生いらっしやいますか？加藤さん？
- 加藤 いま準備しています。
- 渡邊 はい、分かりました。学習支援などについて、NPOの学習支援などについ

て、あるいは出前授業について、あるいは部活支援についてなど、色々のご意見を伺えればと思いますが。

■ 三谷さん（二上小学校 校長）

- 三谷 初めて参加させていただきます。今日はいろいろ勉強させていただいています。二上小学校校長の三谷でございます。
- 渡邊 はい、よろしくお願いします。
- 三谷 よろしくお願ひいたします。本校でも**水害の授業**を、5年生対象と6年生対象にさせていただいております。昨年はコロナで学校公開ができなかったのですが、保護者の方の参加とか地域の方の参加ができなかったんですけども、その授業を葛飾教育の日と言って、本来ならば地域の方・保護者の方も一緒に参加していただけるときに設けておりますので、昨年は無理だったんですが、本年はぜひできるような、コロナのほう落ち着いてくるといいなと思っております。子どもたちにとって新中川がすごく近くにはあるんですが、水害の授業を通して、教えていただいて、いろんなことを知ることとはとても大事なことだと思いますので、今後とも水害の授業をしていただければと思っております。
- 渡邊 はい。今のようなやり方でいいのか、改善点があるのかということは、また改めて議論でやりましょうか。
- 三谷 はい。またよろしくお願いします。
- 渡邊 何かご意見がありましたら、どうぞ積極的に私どもに教えていただければと思います。
- 三谷 ありがとうございます。
- それから、**浸水対応型拠点建築物**が出ていたんですが、本校は**改築**の予定がこれからありまして、またその浸水対応型拠点建築物に何年後かの、いま基本構想をしているところですので、たとえば改築懇談会のほうでも、体育館は2階以上のところにしましょうとか、そういうような話もでていっているところですので、たぶん先ほど葛飾区のほうからお話しがありましたが、地域の防災の拠点になるような学校になっていくんじゃないかなと思っておりますので、そちらの方もこれから区の方、それから地域の方と話を進めていきたいと思っております。
- 渡邊 なるほど。そういう改築予定などの内容も…理解を進められると素晴らしいですね。子どもたちは実際を見ながら学習もしていけるということであれば、非常に理解も深くなるような気がいたします。また南さんたちと相談して、先生たちとも意見を交わしたいと思います。よろしくお願いします。
- 三谷 今日はどうもありがとうございました。
- 南 よろしくお願ひします。
- 渡邊 次はどなたに…
- 南 渋谷先生にも…
- 渡邊 渋谷先生いらっしやいますか？
- 南 渋谷先生よろしいでしょうか？
- 渋谷さん（松上小学校 校長）
- 渋谷 松上小学校の校長の渋谷です。聞こえていますでしょうか？
- 渡邊 聞こえています。
- 渋谷 まずお礼申し上げたいと思うんですが、先ほどからお話ありました**出前授業**

ということで、今日運営をしてくださっている南さんや、それから地域の竹本さん、菅野さんなどに来ていただいて、**水害の授業**をしていただいています。東京都から出されているマイ・タイムラインなどを使って、水害に備えての子どもたちの行動をどういうふうにしたらいいのか、その実際の記入の仕方などをご指導いただきながら、出前授業していただいて、子供達の意識を高めるという上で大変効果的な授業していただいています。ありがとうございます。

一点お話しさせていただきたいのは、**避難所の運営訓練**についてなんですけど、水害というよりも、地震に対する備えの訓練なんですけども、毎年行って来たんですけど、去年はコロナということで、私としては無理かなと思っていたんですけど、地域の方がこのコロナの状況だからこそやらなきゃいけないんじゃないかという話がありまして、コロナを想定して、入口のところで具合の悪い人を区別するというような形の訓練をしました。ただそれは、地震を想定しての訓練ですので、水害はまた別な形になりますので、地震想定なので体育館への避難が中心になったんですけど、水害となると本校の体育館は一階ですので、もっと上の階への避難を考えていかなきゃいけないということで、水害についてもこれから考えていくのが課題なんですけど、そういったコロナの状況の中でも地域の方、避難所の訓練をやるということ、先ほど加藤先生の中で、内発性というお話がありましたが、地域の方が自ら訓練をやるうとしてくださっていると。たいへんありがたいことだなと思っています。以上です。

渡邊 はい、ありがとうございました。

情野部長、コロナ禍の訓練っていうのは、その後何らかの進展というか、コロナ禍の場所の選定とか、その辺りを少しフォローすることありますか？

■ 長谷川さん（葛飾区役所 危機管理課長）

大田 危機管理課の職員もいるんですけど。長谷川課長いらっしゃいますか？

渡邊 あ、大田さんですか？

大田 大田です。

長谷川 長谷川です。聞こえますか？

渡邊 はい、聞こえます。

長谷川 聞こえますか、大丈夫ですか。では私の方から説明させていただきます。昨年の8月2日に**総合防災訓練**を実施したわけなんですけども、**コロナ禍**で同じような状況でもやらしていただきました。自治町会の、町会長の方々から、なぜこの時期にやるのかという厳しいご意見も多々いただいております。その中で実際にやったわけなんですけども、今年度につきましては少し長いスパンを持って防災訓練をやっているというふうになっておりますので、是非とも町会の方々にご協力のほどよろしくお願いいたします。以上でございます。

渡邊 はい。そういうご意見もあるわけですね。町会の方からね。まあなんかその辺は地域で今後様々な問題をどう乗り越えていけばいいか、また**新しい意見をそれぞれ聞かせていただく機会があればいい**と思います。子供達もこの辺りの理解というのをどういう形で深めていけばいいのかってことをまた改めて議論の対象に出来ようと思います。よろしくお願いいたします。

校長先生、その辺でまた一緒に何かできることがあると思うんですけどいかがでしょうか？松上の渋谷先生。

渋谷 はい、どうもありがとうございます。毎年出前授業に来ていただいていますので、その事前打ち合わせのときに、そういったコロナを意識したこととか、

打ち合わせの中で詰めていきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

渡邊 ありがとうございます。じゃあここは南さんいいですね。

南 はい。

渡邊 また学習支援の中でいろいろな改善もあるかもしれませんので、いろいろ研究していきましょう。

南 はい。では、のちほどもし時間があつたら、その**出前授業の講師**をされている方からもお話を聞きましょうか。

渡邊 そうですね。講師をされている方が…。

南 今聞きますか？岸田さんと竹本さんも先ほどいらっしゃりそうでしたけど。

渡邊 いるんですか？

南 まず岸田さんいらっしゃいますか、今？

岸田 はい、岸田です。こんにちは。

渡邊 岸田さん、こんにちは。

岸田 声聞こえていますでしょうか？

■ 岸田さん（日本能率協会総合研究所、出前授業講師）

渡邊 聞こえています。大学・NPO では、できるだけ**地域の協力を得ながら学習支援**を組んでいるんですが、いかがでしょうか。今のやり方で大丈夫ですか。

岸田 はい、私は昨年・一昨年と講師の方を担当させていただいて、まず非常に驚いたのが、小学生の方々、どの学年の方々も非常に知識がおありで、水害に対して、そこに対してまたどういうふうに教育していくか、どういう手伝いができるかということで、一昨年で行きますと、荒川が決壊したときということで、浸水深と浸水継続時間、それからあと自宅の建物構造と住んでいる階数で、先ほど加藤先生からもありましたけど、どこに避難するかということで私の方からも少しご案内させていただいたりしてまして、非常にですね、小学生の方もつまない授業しているとつまんなそうにしているので、私のほうもどういう風にしたら興味もってもらえるかということで、毎年冷や汗かきながらやっています。お手伝いできることがありましたら、また引き続き興味を引くような授業を研究してやっていきたいなと思うところです。

渡邊 そうですね、なかなか聞き手の小学生の方がレベルが高いというか、教材を使って基礎的なことを勉強しているということはありますね。

岸田 そうですね。

渡邊 はい、分かりました。講師になる方もまた、大いに勉強しながら進められていけるといいですね。

岸田 はい、研究して行きたいと思えます。ありがとうございます。

渡邊 今後よろしくお願いいたします。南さん、よろしいですか？

南 はい、今竹本さんも映しましたけど。

渡邊 竹本さん、いらっしゃいますか？

南 マイク入りますかね？

■ 竹本さん（東新小岩七丁目町会、出前授業講師）

竹本 はい、すみません。ちょっと退席してしまして申し訳ございませんでした。

渡邊 小学校の学習支援の講師のチームワークについて、今聞いたところですが、岸田さんは“小学生はとても意識が高い、多くの知識を持っている”という意

見でした。なんか、しっかりと講師の方も務めなきゃいけないと思うんですが、よろしいですか。どうですか。

竹本 そうですね、私は南講師と一緒に、松上小学校と上平井小学校で出前授業をさせていただいているんですけど、主にこの「東京マイ・タイムライン」を使って、子供達に“災害の時にはどういうふうに対応したらいいのかな”というところの想像を膨らませてもらう取り組みをしているんですね。南講師から東京低地のリスクと、良い所・悪い所のプラス・マイナスのところを話していただいて、“実際に災害が起きてしまったらどのように対応していくのか”という想像を巡らせるということで、この「東京マイ・タイムライン」をツールとして活用させてもらっているということで。あらかじめ学校の方で指導いただいているようで、子供たちの意識は大変高いです。それで、このツールをもとにいろいろな発想で、大人の我々が考えつかないような、オリジナリティに溢れたような、対応の仕方・考え方を発露してくれるので、我々としてもかなり刺激になっているのかな、と感じながらやらせていただいていますね。

渡邊 ありがとうございます。またよろしく支援してください。
松上の渋谷先生、どうでしょうか。このような形で、小学生のレベルは高いそうなんです、小学生に書いていただいているコメントを NPO はさまざま分析をしようとしているんですが、先生から見ると子供達のレベルは高いというんですが、いかがですか。

■ 渋谷さん（松上小学校 校長）

渋谷 はい、ありがとうございます。今、竹本さんが紹介してくださったとおり、「マイ・タイムライン」を使っての授業をしていただきまして、子どもたちもそれぞれですので、各ご家庭のいろいろな意識がありますので、ご家庭の意識が高い家の子供っていうのはよく色々考えていますし、またさほどでもないというおうちもありますので、全体にご指導していただくことによって、全体的に意識が高まっていくと、今まであまり考えてなかった子も、おうちに帰って、学校でこういう授業があったと話をすることで、子どもから家族の方への意識の啓発というようなところもあるんじゃないかなと思いますので、非常に重要な取組みだというふうに捉えています。ありがとうございます。

渡邊 はい、ありがとうございます。そういう連携をすることによって、子供たちの命、あるいはご高齢の人や障害を持っている人の命を、意外と子どもたちがもしかしたら助け人になるかもしれないというような場面も出てくる可能性がありますよね。そういうために、また一緒にお勉強をしていきたいと思しますので、今後もご指導よろしくお願ひします。

渋谷 ありがとうございます。

渡邊 よろしいですか。またこういう議論はたくさんしたいと思います。

■ 中川さん

加藤 サテライト会場です。

中川 よろしいですか？中川です。いま皆さんがだいたい生徒たちの意識が高いとおっしゃいましたが、そういう一つの例なんです、実は私も町会でよくテレビの取材があるんですが、そのときに取材に来た人が、本当に町会で言っている通り、みんな一生懸命、子どもたちが、生徒たちが勉強しているのかな、という疑いを持っているかと思ひまして、たまたま中学生が帰ってくるころにぶつかったもんですから、撮影する、あれはディレクターですかね、この人たち

に聞いてみようということで、歩いてきた人をつかまえて、「これは知っているか」「あれは知っているか」「ボートへ乗ったことがあるか」「水はどのぐらい来るか」という質問をすると、みんな「知ってるよ、俺知ってるよ」と言ってくれまして、“この地区は本当にレベルが高いんだな”と、“子どもたちの考えのレベルが高いんだな”と感心して帰っていかれております。それをひとつ報告させていただきます。以上です。

渡邊 なるほど、はい。いまメディアの方、どこか参加してらっしゃる方でいらっしゃいますか。

南 では、NHKの興野さんは今いらっしゃいますか。

渡邊 はい、どうでしょう。

南 もしよろしければ、マイクとカメラをオンにしていただけませんか。

渡邊 いらっしゃいますか。

■ 興野さん（NHK）

興野 興野です。聞こえませんかでしょうか。

渡邊 もしもし。なんか、どこか遠くにいらっしゃいます？

成戸 声が出ていない。

渡邊 南さん、“声が出ていない”とお伝えください。

南 そうですね、マイクは ON になっているんですが、ちょっと声が聞き取れないんですが。

渡邊 何か現場にいらっしゃるんでしょうか？

成戸 取材中かな？

渡邊 興野さん？今、声がこちらに聞こえてないんですが。

興野 私の声、聞こえますでしょうか？

南 聞こえました。

興野 すいません。今、ちょっと遠くにいて。茨城県の水戸で、私、実家の田植えをしながら皆さんの話を聞いております。

渡邊 田植え？

興野 田植えです。すいません。ちょっと手で植えなきゃいけないで、いろいろ汗かいています。はい、すいません。いろいろ会議ありがとうございます。

今の話はメディアの話で、皆さんの子供達とか意識が高いという話なんです、ちょっと私の方は、まだそちらの葛飾の方の子供達とお話をしたことないんですが、ただこの前中学校の地域防災ボランティア部の先生たちとお話ししたんです、相当子供たちが意識を持って、やる気があるし、いろいろ取り組みたいってということで、今度一緒に作業をしようかな、なんて思っております。どんなことしようかという、いま葛飾区さんと一緒にやっているのが、ハザードマップの中でも「AR ハザードマップ」というのがありまして、いわゆる、実際に自分がいるところで写真を撮ると“水がどのくらいの腰の高さまで来るよ”とか、その辺が全部リアルに分かるようなものです。その写真を撮りまして、町内の 3,400 か所でしたかな、掲示板にそれぞれの深さのところを貼っていくということ、いま葛飾区とやっております。

その中で、中学校の地域防災ボランティア部の人たちとも一緒にやっという動きをしています。校長先生もすごく「うちの子どもたちは意識が高いので、いろいろ一緒にやっというので、私も期待しております。

す。

渡邊 「天サイ！まなぶくん」はご存知でしたか？

興野 天サイ！まなぶくん？

渡邊 「天サイ！まなぶくん」は、そこに立つとどのくらい学校が沈んじゃうかってことがわかるようなアプリを私たちはすでに持っているんですね。

興野 はいはい。

渡邊 それは葛飾区と NPO、大学、それから技術者で皆さんが参加して作ったもので、これはなかなかの出来なんですけども、これは場合によっては活用いただきながら、そういう中学生との共同作業とかやっていただく参考になるかもしれないんですが。

興野 私たちが使っているのは、同じようなソフトだと思うんですけども、iPad を使って撮影をして、リアルに映像が浸水した状況をうまく建物の中とか外でも切り抜けるような状況で、相当リアルな、水の色も変えたり、水流を発生させたりとか、障害物が流れてきたりとか、そういうことができるようなソフトをある大学の先生と開発しまして、それを使って今回一緒に動いているような形です。

渡邊 なるほど。はい、わかりました。またいろいろ、そういう私たちが開発したものと、それから新たなものを、どういうふうに組み合わせると地域にとって有用であるかというようなことも、一緒に議論がしていけると嬉しいですが、よろしく。

興野 そうですね。はい、ありがとうございます。あと、私が特に興味は持っているのが、**災害弱者**の方々。いわゆるハンディキャップを持っている方々、高齢の方々。その人たちをどう具体的に助けていくのかっていうところに非常に興味を持っていて、なかなか一番そこが大変なところかなと思ひ、皆さんもご苦労されているんじゃないかなと思ひつつも、皆さんはその一番危ない状況、**大変な状況だからこそ最先端を行っている**んじゃないかなと思ひまして、そこなかもいろいろ取材させていただければなと思ひしております。

渡邊 そうですね。今後是非よろしくお願ひします。

興野 ありがとうございます。

■ 山上さん（NPO ア！事務局、天サイ！まなぶくんⅡについて）

成戸 渡邊さん、いまちょうど災害弱者の話が興野さんから出てきましたので、ここで**天サイ！まなぶくんⅡ**の紹介を、どうでしょうか。

渡邊 はい、してください。どなたがやりますか？

成戸 じゃあ天サイ！まなぶくんⅡのほうで、います？古川さんとか、

渡邊 古川さんか…

成戸 山上さん。

加藤 はい、サテライトにいます。いま準備します。

成戸 山上さんから始めるんですか？山上さんいます？サテライトに。

山上 はい。

成戸 よろしくお願ひします。

山上 では NPO の事務局の山上でございます。

渡邊 はい。あ、いま画がでていますね。

山上 はい。ちょっとこの文字について文字に従ってお話したいと思ひます。最

初に冒頭に成戸理事長が申し上げました通りですね…。

渡邊 あ、絵も見えるといいな…。

山上 絵も出します。お待ちください。コンセプトをちょっとまず説明させていただきたいと思ひます

渡邊 はい。

山上 区役所ですでに実用化されています「**天サイ！まなぶくん**」というアプリ、これに続きまして、私ども NPO では今年度と昨年度と 2 か年にわたりまして、「誰一人取り残さない」というコンセプトのもとに新たなアプリ「**天サイ！まなぶくんⅡ**」を開発中です。

いきさつを説明しますと、NPO ア！では、一昨年 10 月の台風 19 号につきまして、主に公助や共助のグループの方たちのそのときの状況につきましてかなり綿密にヒアリングを行いました。その結果、台風に向けて国交省、東京都、区役所などの**公助グループ**、その方たちが次から次へといろんな情報を発表していることが分かりました。この情報は、一人一人の家族ではとても理解できないことがたくさんあるんですけども、これを町会長をリーダーとする**共助グループ**の人たちが受け止めて各家庭に伝えたり、あるいは誘導したりするというのを一つの理想形として、いま訓練がされています。

しかし、この段階で共助グループにはとても捌ききれない多くの役割を期待されているんですね。これもすべて人命に関わることなんですけども、非常にヘビーな荷重がかかっているということが判明しました。

例えば神戸地震の折にも、自宅に孤立した人のうち、警察とか自衛隊・消防署に救助されたのはわずか 2%、あとの残りの 98%は近所の人によって助けられたというデータもあります。

また、災害時にいろんな町会で訓練している組織や連絡網は、実はかなり作られてから時間がたっていたり、人が変わったりしてしまっていて、実際にこれを役立てるためには、相当密に、例えば半年に 1 回ぐらい、避難訓練をやりながらいろんな情報の鮮度を保つということがたいへん大事なことであるということが、私どものヒアリングの結果で出ております。

NPO ア！は、令和 2 年度、昨年度ですけれども、国土交通省も関連しております「一般社団法人関東地域づくり協会」から補助金を受けまして、「天サイ！まなぶくん タイムライン」の開発を昨年度完了しております。そして今年度に入りまして、新たに共助を支援するという意味から、その人たちが働きやすいようなアプリ「**天サイ！まなぶくんⅡ**」を現在開発中です。

さらにこのアプリ開発と並行して、有効かつ強力な町会組織の形成を支援するために、定期的な防災訓練や組織の連絡網の鮮度の維持を促すことを含めた、総合的な災害訓練用パッケージを作成することも、現在検討しております。

これにつきまして、渡邊さんのおっしゃる「絵」を見ながら、古川さんに説明してもらいます。古川さんお願ひします。

■ 古川さん（NPO ア！事務局・（株）キャドセンター）

渡邊 古川さん、「**天サイ！まなぶくんⅡ**」について説明してください。

古川 その前にちょっと、さっき NHK の方との話にも出てきた AR の防災アプリですが、私たちが開発してきたのは 2013 年にリリースしました「元祖 防災アプリ 天サイ！まなぶくん葛飾版」というものがあります。この実写の風景の中に、水の風景を重ねるといふ、さきがけとなるアプリを作らせていただきました。このアプリは「防災まちづくり大賞」を受賞したり、国土地理院さんの

「防災アプリ賞」などを受賞して、さまざまなエリアに広がっていき、進化を続けています。

こうした流れの中で 2020 年度からは、新たなアプリの開発を検討し、最終的に共助支援アプリ「天サイ！まなぶくんⅡ」という名前で開発が進んでいます。ざっとこのアプリを紹介させていただきます。

渡邊古川

あ、「天サイ！まなぶくんⅡ」の紹介ですね。

はい、そうですね。

これ画面を4段階に分けておりまして、「災害が発生したとき」「赤旗で通知をするとき」「助けに行くとき」「完了するとき」という4段階、画面をキャプチャーしていますので、この先をお見せいたします。

まず、災害弱者という話がありましたけども、左にあるようなタンスの下敷きになった人がいたと。で、「赤旗を申請する」というボタンを押します。「動けない」「苦しい」というボタンがもともと用意されていて、「ここにいます」ということでボタンを押すと、“私はいまここで救援がほしい”という意味を持つ「赤旗」が立ちます。立てると、「赤旗完了」となりまして、右側にあるようなメールが飛ぶんですが、次の画面で、これ管理画面上でももちろんその状況は見えるんですが、左側にあるような、周りにいる人たちにその状況が通知されるということがまず始まります。



で、その通知を受けた周りの人が近所から助けに行くところ、で、「赤旗の状況」というところを今押ししましたが、それを見ると地図で「赤旗」が上がっている。で、そこにもし行ける状態だったら、「近助」、近くを助けると書きますけども、「近助に行く」というボタンを押すと、さっきの「赤旗」がいま青い旗に変わります。で、これが「近助に行く」という画面になっております。で、「近助に向かっていきます」というのも周りの皆さんにお知らせされるような機能があります。



そして、現場に到着して近助が無事終わったら「近助の完了」を行います。しかし、1人が助けに向かって完了となればいいんですが、例えば軽装のままそこに行ったとしても、おそらく助けられません。そういう時のための機能もつけております。



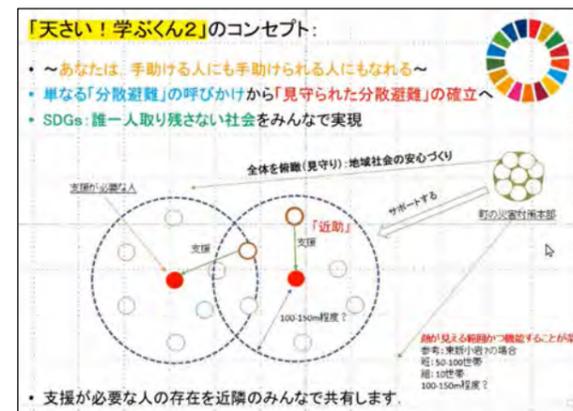
ちょっと名前はのちのち検討するんですけど、仮に「オレンジフラッグ」と呼んでいて、“増援が来てほしい”“3人來ないとちょっと辛いな”というのを、“担架とかバールとかジャック

加藤

キも要りますよ”“負傷者を運ぶのが辛いです”“一人では手に負えない”みたいな情報を入れられるようになっていきます。で、「確認」を押すと、オレンジ（の旗）が立ちました。これも周りに通知が行きます。で、先ほどと同様に「近助」に行ける人を集めることができるということです。

このようなアプリをこの1年間、さまざまにサーチなどもしつつ作ってまいりました。こういった流れになっておりまして、機能的には「近助」というか、支援が必要な人の存在を、近隣の皆で共助して助ける仕組みを作ってきました。では、加藤先生からフォローをお願いします。

では補足します。先ほどコロナのところで、単なる「分散避難」って“勝手に逃げなさい”っていう話で、取り残される人がいるかもしれないですね。だから「誰一人取り残さない社会」をみんなで実現していくんだという意識に立って、単なる分散避難ではなくて、きちんと「地域に見守られた分散避難」というのを確立していきたい。そのための支援のツールとして、今「天サイ！まなぶくんⅡ」が作られているということです。



先ほどタンスの下敷きになっていた絵がありましたけど、多分ああいう話だけではありません。例えば、大規模水害が来そうで、逃げなきゃと思うけれども逃げる手段がないとか、逃げようにも足の悪いお年寄りを抱えていて自分だけでは連れて行けないといったときに、近所で助けてもらえる人を募る。で、ボランティアで助けに行く。その様子を街の災害対策本部、これは町会の本部をイメージしているんですが、町会としてはその全体像を見守れる状態を作っていく。もし誰も助けに来ない場合は、町会の人が行けるような、そういう地域の災害時の見守りができるような仕組みが近々できるはずであるという状況です。以上、補足でした。

渡邊

はい。加藤さん、とてもこの「近所で近助」って私、気に入っているんですけど、これはかつていろんな体験の中から、消防自動車とかお医者様とか飛んで来ない間に近所で近助していたという、そういう体験も含めた進展でしょうか。

加藤

はい、中川会長が“そうです”と言っています。

渡邊

あ、そうですか。

中川

なかなか消防とかいろんな方はすぐには来られないと思いますので、すぐ助けに行かれる人はすぐそばにいる人。ですから「近所で近助」。“近所のところで近所を助ける”という形でもって進んでいただいているものだと思います。

渡邊

はい、分かりました。

共助とか分散避難の非常に具体的な提案という感じがしますが、そういう理解でよろしいですか？

中川

はい、そうなんです。私たちの町会のお話で申し訳ないのですが、私たち

の町会は、要介護者、1人では動けないよ、という人たちを全部リストアップして町会で持っておりますので、分かるんですけども、そこへ町会の役員に行くことは不可能だと思います。人数も限られていますので、やはりこういうものがあって、すぐに近所の人が行ってもらえるということで、皆さんを助けることができるんじゃないかなと感じております。このようなアプリが早くできればいいなと思っております。よろしくお願ひします。

加藤 かつての田舎の方のコミュニティであれば自然にできていたことが、現代の都会のコミュニティではできなくなっているんです。それを新しい技術を使って、できるようにしていきましょう、ということです。乞うご期待。

渡邊 目標はかなり高いレベルであると思いますが、乞うご期待ということで、皆さんよろしくご支援ください。

成戸 まだハードルが高い点があるのは、やはり中川さんのところのような意識の高い町会ですと、これをすぐ活用できるんですけども、これから他の地域でも活用していくにあたって、地域住民の危機意識の問題と、ソフトの使い勝手の問題。この2つのことを今年度、やっていこうと思っています。

渡邊 なるほど。そうすると、さっき加藤さんが言った「葛飾から世界へ」みたいな感じで、コミュニティをどう創成していくかと言うことが重要な課題のようにも思いますが。いかがですか？

成戸 そうですね。それで、メディアの感覚として興野さん、もし田植え中だったらできないかも分からないけども、メディアの感覚としてどうでしょうか？こういうようなソフトをこれから発信していこうと思っていますけども。感覚、感想をお持ちでしたら。

渡邊 興野さん、田植え中だけでも聞こえますか？

興野 聞こえますよ。

■ 興野さん（NHK）

渡邊 田植えしながらこの議論を聞いていますか。

興野 非常に聞き入っていました。面白い、というか。地方でしたら人口が少ないので、まだ自衛隊だったりとか、ヘリで助けに来てくれたりとか。2015年には水戸局にいましたので、常総市の水害を取材したり、現場に行っていました。ああいうところだったらまだ人口が少ないので、自衛隊とかヘリで助けるということが出来るんですけど、東京都の場合、これだけの人口がいた場合、まず無理だと考えた方が良くかなと、僕は個人的には思っております。

そういった場合に、皆さんが開発中のアプリでは、共助で半径数百 m 以内の人たちがお互いに助けに行くという。しかも“1人じゃ無理だからお助けください”というような内容も含まれているということ、非常によく聞かせてもらいました。実用的になればいいなと、本当に思っております。

渡邊 はい、ありがとうございました。

興野 具体的に運用を始めるのはいつぐらいからなんでしょうかね。

渡邊 さて、加藤さん、古川さん、どうですか。運用開始は。

加藤 早くて1年後ですかね。

興野 なるほど。いや、非常に面白いというか、**素敵なアプリ**だっているのはあります。そう感じました。

渡邊 はい。

成戸 はい、ありがとうございます。

興野 私も、普段は単身赴任で東京に住んでいるんですけども、実家のある水戸の町内会で結構町内活動をしているんですが、こういうところでも、地震がメインなんですけども、非常に、うちの町内会でもやっていきたいなと個人的には思いました。

渡邊 ではまたメディアとしての意見もいただきながら、研究開発を進められればと思います。ありがとうございました。

興野 また取材させてください。

渡邊 はい。この件について…。

加藤 ほかの町会の方から。

渡邊 発言ありませんか？南さん、分かりますか、どなたか手を上げている人。

南 手を上げている方ですか。少々お待ちください。あ、棕さんが今手を上げられました。

渡邊 棕さん？

棕 この「天サイ！まなぶくんⅡ」のことですか？

渡邊 そうでなくても、関連事項でも。

■ 棕さん（個人参加）

棕 あ、そうですか。個人参加の棕ですが、大変興味深く拝見しました。で、2点あるんですけど、1点はこの七曲りの写真が。渡邊とか南さんの背景の。

渡邊 あ、背景にあるやつですね。

棕 背景ね。これはよく私はド素人だから分かりませんが、ゼロメートル地帯で蛇行しているわけですよね。この蛇行している七曲りっていうのは、例えば一部埋め立てとか、直線にするとかというようなことはできないんでしょうか。それはなぜかっていうと、先ほどご提案のあった高台の整備という土地が捻出できるんじゃないかという、その質問で。荒川の所長さんがいらっしゃいましたから、それが一点。

それから浸水対応型の拠点建築物の整備については、東京都が、建築サイドが今年度からスタートした建築行政マネジメント計画の中にこの辺の浸水対策の対策も打ち出していますので、たとえば、総合設計制度なんかで容積率の緩和といったような、補助制度以外にそういうものをこの地域に適用するということを関係機関の方々、それから民間の方々、あわせて議論を進めていったらいいんじゃないかなというふうに思いました。以上です。

渡邊 はい、ありがとうございます。

まあ、ご意見は重要なことです、緩和規定をどうやって設定しながら、その市街地形成をしていくかというのは重要な議論であると思いますので、また色々とお知恵を拝借しながら、第3部で、次のステップの時に大いに議論できればいいかなと思いますので、今後もよろしくお願ひいたします。

■ 情野さん・加藤さん（七曲りについて）

渡邊 さて、七曲りの高台化っていうのについて、情野さんいらっしゃいますか。

情野 はい、情野です。

渡邊 これって、私は「おお？」とか思ったりするんですが、どうですか。

情野 単純に考えると、どちらかというとも昔は、こういう七曲りみたいにゆっくり

流して、っていう形だったものが、(今は)なるべくまっすぐに結んで、みたいな形で。中川の上流部、私は西水元に住んでいるんですけど、その辺ですと、古利根川のところをまっすぐにして、中川は今できているというものもありますから、当然そういう発想というものはあるんだろうと思います。

ただ、区としては、今はどちらかというこの七曲りの景観も含めて活かしていくっていうことです。このスーパー堤防化を、都と一緒に連携して、できる限りこの地形も生かしながら進めていこうということで、いま取り組みが進められているという状況です。

それと、先ほど総合設計制度の話が出ましたが、実はもう東京都の方である程度検討が進んでいるところがあります。ただ、ご存知のように、葛飾区って意外と容積率を使いきれていない場所で、あまりそこが開発のメリットにならないということで、葛飾区の場合だと、そこをどう、どこをどう進めていくのかというのが、実は駅前以外のところだとそこが逆にいま課題になっていて、少し補助の支援を厚くしていこうということ、いま考えているという状況でございます。以上です。

渡邊 この専門的な議論はまた、第3部で、次のステップの議論のところにつなげたいと思います。棕さん、ありがとうございます。七曲りは今のところ、親水対応で進めています、また意見交流できる機会をお待ちしたいと思います、よろしくお願いします。

加藤 加藤ですけども、一言コメントいいですか。
棕さんが言われるのももっともなんだけど、一方でいま情野部長が言われたみたいに、葛飾の場合、これ民間業者に非公式にヒアリングしたんですが、駅から徒歩10分圏内でないと、容積率をもらっても使えないという、むしろ建てすぎて売れなかった方が困るという、リスクになるって判断をしているんですね。そうすると、浸水対応化を進めようと思うと、街の魅力を高めるということと合わせてやらないと、なかなかその推進策が作れないんですね。じゃあ街の魅力を高めるためにどんな資源があるかっていうと、これは「川」のような気がするんですね。ですから七曲りってこの川の資源を生かして、街の魅力を高めて、街の魅力が高まれば、みんなが建物を建てたくないと。結果、浸水対応化がはやく進むと、そういうストーリーもありえるんじゃないかなと思って、今進めているところです。以上です。

渡邊 進めているっていう、議論がすでにあるということですか。すなわち、区も研究者も、合わせてそういう意見交流をしているということですね。

加藤 はい、そうです。

渡邊 わかりました。

ではまたこれは、先ほど私が申し上げましたように、第3部のところで次の課題につなげるということで、この段階ではよろしいですか？棕さん。

棕 はい、結構です。

渡邊 はい、よろしくお願いします。

さて次は、南さん、もう保育園の方に入って。

南 はい、保育園の方へ行きましょう。チャットの方に今後お聞きしたい方、リストアップしましたので、短くコメントを頂きましょう。時間があと30分になってきました。

渡邊 じゃあチャット指示を南さんから。

南 はい、私の決めた順番でいいですか？

渡邊 はい。

南 はい、じゃあ町会の方で、市民消防隊だとか、台風19号の経験などの、何か共有をしていただける方いらっしゃいますか？

渡邊 じゃあこの保育園・民生委員・社会福祉協議会。全体をくるんで。

南 じゃあ今準備ができていますので結構です。町会はどうですかね？竹本さんですかね？竹本さん席外されていますか？

加藤 上小松の山口さんが手を挙げています。

渡邊 お願いします。

■ 山口さん（上小松町会）

山口 上小松町会の山口です。今日は東原会長が出られないので、今日いらっしゃっている防火防災部の工藤部長と、それから濱野さんと3人で入っております。上小松町会としましては、2019年の台風19号の避難所の運営を受けて、昨年の9月12日と10月4日に、葛飾区と上平井中学校の校長先生・副校長先生と町会で避難所運営の打ち合わせを行いました。あと10月17日に町会独自で避難所運営の話を実践的にやらせていただきました。そのなかで、ちょうど昨年の後半だったものから、コロナウイルスの影響で、どのように避難民を誘導していくかということとか、水害もしかりですが、地震対策をどうするかということで、上平井中学校の体育館が1階にあって、校舎の方が2階・3階まであるんですが、それをどのように役割分担していくかってことで、全部色分けで、例えばペットを同伴されている方とか、発熱者があれば動線も含めて分離するとか、あと水槽の実際の開け方・閉め方とか、そういう実践的な訓練を行ってきました。今年は残念ながらまだ、緊急事態宣言が3回目なんで、そういった具体的な話はできてないですけども、一応着実に上小松町会としては進めることができました。以上報告いたします。

渡邊 上小松っていうのは広い町会ですよね？

山口 はい、区内でたぶん最大の世帯数だと思います。

渡邊 そうですよね、なかなか実践活動も大変だと思うんですが、かなり工夫されてやっているわけですね？

山口 そうですね。ただ、工藤部長のほうも、上小松小学校も範囲に入っているんで、上小松の中では2つの避難所を抱えているということで、それぞれ相談、役割分担しながら、あるいはいろんな、例えば本部を中心に衛生部ですとか、防犯部ですとか、いろんな役割分担もすでに全部決まってやっております。

渡邊 分かりました。じゃあまた進展して、いろんな課題が上がってききましたらよろしくをお願いします。

山口 はい、ありがとうございます。

渡邊 南さん、どうですか他は？

南 七丁目の市民消防隊の方は、何かご報告ありますか？稲葉さんですか？どなたでしょうか？ご発言いただく方いらっしゃいますか？

竹本 すみません、竹本ですけども。稲葉美哉子隊長か、大河原さん、どちらかちょっとご意見表明をお願いします。では大河原さん。

■ 大河原さん（東新小岩七丁目町会 女性市民消防隊）

大河原 はい、ありがとうございます。私自身は、台風19号の時は避難所に行って

おりません。普段、コロナ禍なんですけど、訓練をしたりですとか、新しいボートが来ましたので、その訓練を先日もさせていただきました。ちょうど、お花見のシーズンにぶつかってしまって、隅田川が遊覧船やレジャーボート、屋形船とかでも、首都高並みのラッシュで、荒波で命の危険を感じるぐらいの訓練になって、本当に「訓練」っていう感じでさせていただきました。

だから本当に災害時のことを考えると、本当にぞっとするとともに、これも訓練、リアル訓練だなんていうのと、あとどこに防災船着場があるのかっていうのが、先輩方がもう頭の中にあっただけで、すぐに船をあげることができたりすることができたので、これも訓練の賜物かなと思いました。

以上です。ありがとうございます。

渡邊 こういう日常的な混雑の中で訓練するって実は重要ですよ。

大河原 本当にそう思いました。

渡邊 危険を伴いながら。実際は危険を伴っているわけですね。まあしかし、なかなかできないことやってらっしゃって。また実際に現場で輪中会議が開ける時にはぜひ詳細をご報告下さい。

大河原 はい、ありがとうございます。

渡邊 ありがとうございます。南さんその他はどうでしょうか。

南 竹本さんからご指名ですので、原田さん、ちょっとご発言いただけますか。

■ 原田さん（東新小岩七丁目町会 市民消防隊・日本能率協会総合研究所）

原田 はい、こんにちは、原田と申します。

渡邊 原田さんは、外部の助っ人で消防隊に入っている方でしたかしら。

原田 そうです。東新小岩7丁目ではないんですけども、防災訓練とか色々、ボートにも乗せていただいて、活動に参加させていただいています。

町会のエリアには住んでないんですけども、通勤の（経路に）東新小岩七丁目がありますので、何かあった時に、ちょっとお助けにできればと。

南 ちょっと回線が悪いんですかね？途切れ途切れでしたが、代わりに要約しますと、原田さんは新小岩に住んではいないけど、通勤の経路に新小岩があって、何かあったら降りて駆け付けられるということで、外部からの支援という形で消防隊に入っているということですね。

渡邊 なるほど。じゃあ「近所で近助」にも繋がる場所もあるわけですね。

竹本 今原田さんにお話ししていただいて、回線ちょっと良くなかったんですけども、地域のつながりから一歩発展して、例えば原田さんでしたら千葉県に住んでるとか、そういったところでこの知識と技術と知恵の共有を図ることで、原田さんのお住みの地域でも我々の取り組みを還元できたりだとか、例えばちょっと離れているところでも我々が取り組んでいることを還元できたりとか、知識と知恵と技術の共有ができればいいなということで、我々の町会としては、特に町会内だけに限ることなく、広く「広域連携」という形で防災力の向上を図っているということなんです。ここをちょっとお話しさせていただきましたってことです。

渡邊 はい、ありがとうございます。また対面会議が出来る時に、大いにご報告をお願いします。ありがとうございました。

南 続いて亀川さん、社会福祉協議会の亀川さん、ご準備できているとお聞きしたんですが、いかがでしょうか。

■ 亀川さん（葛飾区社会福祉協議会）

亀川 お疲れ様です。大丈夫でしょうか、声の方は。

南 届いております。

亀川 改めまして、葛飾区社会福祉協議会の亀川と申します。改めて、私たちのところでやっていることを少しだけお話しさせていただければと思います。

私たち葛飾区社会福祉協議会は、災害が発生した時に「災害ボランティアセンター」を運営いたします。その災害ボランティアセンターは外部から、内部や外部のボランティアさんと、被災された方をマッチングさせるようなこともいたします。そういう活動をさせていただく中で、やはり災害が発生した時は、本当に皆さんがお話しされた通り、共助がすごく大切になってきます。

共助って言っても、コロナのことになって、なかなか外部からの支援が入らなくなってきています。例えば熊本の災害では、やはり外部からはコロナの関係で入ってこないことによって、大変なボランティア不足に陥って、支援の手がなかなか届かないということもお聞きしています。なので、やはり私たちとしては、そういう風に、もちろん内部の力もそうなんですけど、外部の力も受け入れることをしっかりとやっていって、内部と外部の力を合わせて連携をとって、災害が起こった時に、被災者の支援ができればと思います。そのために私達も講座や訓練などを行っております。

私たちは、そういうような情報も情報誌などで出していますので、またぜひ見ていただいて、ご不明な点等ございましたら、葛飾区社会福祉協議会のボランティアセンターに問い合わせいただければと思います。以上になります。

渡邊 はい、ありがとうございます。ボランティアと被災地を繋ぐのもコロナ禍の中ではなかなか難しい問題ですね。そういうところを色々和紐解こうとなさっているという理解で良いですか？

亀川 はい、ありがとうございます。

渡邊 また現場で、いろいろなお話ができるといいと思います。ありがとうございました。

南 さて。南さん。この地域の方のご発言の登録ありますか？

南 地域の方は…もしありましたら手を上げていただければと思いますが。また後段の方で交流会の方も含めましてご発言いただけたらと思います。

渡邊 以前に医療関係、介護関係の方も参加してらっしゃいましたが、今日は参加できてないですね。はい。

南 はい。ちょっと竹本さんの方から、かつしかFMの山岸さんからご発言いただければということでしたので、もしよろしければ。

渡邊 よろしいですよ。

南 よろしいですか、山岸さん。

山岸 はい、声届いておりますでしょうか？

■ 山岸さん（かつしかFM）

山岸 かつしかFMの防災コーナーのレポーターを担当しております、山岸と申します。よろしくお願いたします。

私は普段、防災のレポーターとして、防災訓練ですとか、講義中心の取材をさせていただいてはいるんですけども、私自身、区内の人間として防災に関してはまだまだ勉強中の身です。その中でやはりちょっと日々感じるのは、若い世代の方々に対しても、防災についての考え方、あと水害や地震に対して皆

さんの日頃の準備の広め方っていうのを、もう少し自分自身もかつしか FM を通してでも構わないんですけども、広めていけたら、若い世代を中心にもっともっと広めていけたらいいんじゃないかなと思っております。

私自身が、今息子が今年小学生になりまして、新宿（にいじゅく）地域に住んでるんですけども、まだまだ地域のことにに関してなかなかちょっと関わり合いがなかったりするものですから、こういった皆さんの関わり合いを通して学んだことを、地域に返していけたりとか、地域をつなげる立場になっていけたら嬉しいかなと、今思っている状況です。以上になります。

渡邊 素晴らしいですね。若者と地域がどんなふうに連携できるかって、これから町会活動を含めて、すごく大切な課題だと私は思っていますので、また意見を交わせる機会があるといいと思います。よろしくお願いします。

山岸 はい、よろしくお願いします。

南 では若者の話が出ましたので、かつしか FM の番組に出ている中央大の松田さん、いまお話いただけますか？一言だけご感想を頂けますか？

■ 松田さん（中央大学 学生）

松田 はい。皆さんはじめまして、中央大学の松田です。

私の大学は葛飾区にあるわけではないんですが、そのご縁、防災活動を文京区の方でさせていただいている関係で、ラジオに出させていただいております。

今回聞いていて、若い人も、私もその文京区の中かで町内会に入って防災活動をしているんですが、やはり“若者は少ないな”って、“求められているな”っていうことも日々感じております。しかし一方で、コロナがあって学校に行けない、学校から“来ないでください”っていうことを言われると、一気に存在意義を失うといえますか、せっかく学校の周りの町内会の方と防災を頑張ろうと思っても、私は行けないっていう状況もあるので、そこの連携というか、外部者が入る時には非常に考えないといけないなっていうのはあります。なので、逆にその地域にいないからこそその強みっていうことも、リスクを分散しているっていう強みもあると思うので、その連携の仕方などを皆さんと考えていけるといいのかなと思っています。ありがとうございます。

渡邊 なるほど。しかし重要な経験をなさっていますね。

しかし、コロナ禍であろうとなかろうと災害が来ちゃうわけですよね。だから、地域とどうつながっていけるかということ、大いに若者間でも議論していただきながら、こういう会議に大いに出していただいて、どうすればいいかっていうご提案などもしていただくと、町会なども役に立つというか、“ああそうか”と気がつくこともあるような気がするんですね。ぜひ今後もいろんな体験を含めた意見を伝えていただければと思います。よろしくお願いします。

松田 よろしくお願ひします。

山岸 よろしくお願ひします。

渡邊 ありがとうございます。

南 ありがとうございます。

渡邊 南さん、とてもいいお話ができましたね。

南 ちょっと手を挙げている方がいらっしやいますかね？味の素の齋藤さん。

齋藤 ごめんなさい、いま拍手のマークですね。

南 あ、拍手だったんですね。すみません、私が見間違えました。第3部の方でご発言いただきますのでよろしくお願いします。

渡邊 では遠いフランスから参加のマルクさん。フランスでも非常に大きな災害・水害の問題は沢山あるわけですが、いかがですか。これまでの議論を聞いて。マルクさん、伝わっていますか。

■ マルクさん（パリ・ラヴィレット国立建築学校）

マルク 聞こえています。またみなさんのおかげで、今日勉強させていただいてありがとうございます。

そうですね、みんなの話を聞きながら、どう思ったらいいかということ考えると、フランスにもやっぱりその災害の問題もありまして、日本と同様な環境で、気候変動のため問題が起こってしまいます。

フランスの中から見ると、対策とか、また現場からの市民の皆さんのイニシアティブもたくさんありますし。

それと、加藤先生の話を思い出しながら、災害とか、コロナを含めて、どう考えたらいいかということですね。いろんな問題あると思われれます。実際は、言いたいことが2つありまして、1つは今の大学での、パリの大学での経験から見ると、やっぱり教育の仕方とか、教え方とか、また学生に対する宿題とか、今のままコロナとか、それと関わっていることについてやっぱり、新しく考えなければ駄目だということになってしまっていて、昨年から新しく考えて授業の内容まで含めて、どう直したらいいかということがあります。

今日のお話の中で、非常に興味深かった1つの点を挙げてみると、具体的にその災害対策について、建築・都市計画についてみますと、数年前にミーティングに参加させていただいた時に、もうすでにあのプロジェクトも見ていたんですね。実際にどうなったか分かりませんが、考えたらですね、もっとそういうことを考えているから、モダン建築の、モダン建築ですね、つまり高台ということ考えると、私は人工地盤ということを考えて、どういうことを考えるかって言うと、高台ということは設備ですね、人工地盤も設備だったんですけども、それをできるだけ建築とかということまで考えたらいいんじゃないかと。つまり高台ということ考えると、初めて高台ということを考えるということじゃなくって、すでに人工地盤のこと考えると歴史があると、経験もあると、評価もあると、そうすると、高台ということ考える、設備だけじゃなくて建築空間、建築からみる空間を考えたらいいんじゃないかなと思っています。

例えば、「まちづくり」ということを考えているんですね。「高台まちづくり」。私は「高台まちなみ」ですね、どうであるかということを考えていいんじゃないかなと思っています。以上です。

渡邊 はい、ありがとうございました。なんかフランスの中心部パリも埋め立てて現在の形になっているという、100年計画で埋め立てて、今のパリ市内、市中があるという記録も読んだことがあるんですけども、今は水害は建築でも補っているんでしょうか？

マルク どうでしょうね？今のところだと、大学にはプロジェクトがあるんですけどそのほかには…。建築についてですね。例えば、この間学生を連れてパリの郊外に行っただけです。あそこは農地があるんです。農地の中に小さい村が残っているんです。それでその村は河川の近くにありまして、農業地区ですからね、水も関係しているんです。

で、散歩しましたら、やっぱり、さっきの情野部長の話の中で断面図があって、1階はできるだけ洪水があったとき問題にならないように、特別な機能・分け方がありました。1階から上までですね。これはすでにフランスの法律に

も入っているんです。で、この間学生を連れてパリから近い郊外へ行ったら、街を歩くと、「え？これはちょっとおかしいな。この1階は倉庫とかで、アパートや住戸はない。」と気付いたんです。何でそうなるかという、すぐ近くにある河川をみたら、やっぱり洪水の対策ですね。そうじゃないかと思っているんです。実際に災害に対して、すでに法律のなかに、または土地利用計画といひましようか、それに入っているんです。

渡邊 このあたりもいろいろと、葛飾区の勉強会でも研究していくと、結構役立つというか、共有できる情報がたくさんありそうですね。また今後も、いろいろ意見交流ができればいいと思います。

さっき「市民イニシアティブ」という言葉が使われましたが、これは市民が割合、何かイニシアティブをとるような仕組みになっているということですか？

マルク それは災害後ですね。

渡邊 あ、災害後ですね。はい、わかりました。

マルク 復興ですね、色々なステップ、タイムがあるんですね。その中での市民のイニシアティブは非常に面白い。協力とか、どうしたらいいかと、国の手伝いを待たずに、現場でどうしたらいいかというイニシアティブは非常に面白いですね。

渡邊 はい。そのへんもまた深く議論ができるといいですね。

加藤さん。高台の、高台と一体化というマルクさんの意見があって、なんかそれはこちらとも通ずるところがあると思うんですが、大成化工のときの開発の時に、開発っていうかモデル開発の時に、そんな議論もあったように思いますが、いかがですか。

加藤 はい。たぶんちょっと前までは、高台っていうと土で盛ると言う話だったんですが、現在東京都と国で議論しているものは土で盛る高台もあるし、人工地盤もあるし、建築的な対応も実は範囲に入っているんですね。この葛飾区で検討した浸水対応型市街地構想では、これは今日来ていない都市計画家協会の土肥さんが、“建築と土木のハイブリッド”という話をしていたんですね。マルク先生のおっしゃっている内容ときちんと重なっています。

マルク ありがとうございます。

■ 中村さん（芝浦工業大学）

渡邊 中村先生はいらっしゃいますか？

中村 います。渡邊さん、3時間ずっと司会をやっていますが大丈夫ですか？

渡邊 いや、実はまあ、大丈夫です。

中村 あとでどっと疲れが出ると思いますから。ちょっといま5時なので、今後何時までこれを継続するか、先に南さんと話し合っていた方がいいと思うんですけど。

渡邊 南さん、どうですか？5時をどのぐらい回すことは可能なんですか？

南 それは参加者の皆さん次第なんですけど、一つ気になっているのは、会場の方が何時まで使えるのかなということ、いかがでしょうか？

加藤 あと15分で、5時15分まで。

渡邊 じゃあ5時15分までにしましょう。中村さん助言ありがとうございます。

渡邊 そうすると発言を少しテキパキとやるしかないんですけど。

中村 すぐ終わります、じゃあ。中村が貢献できているのは非常に少ないんですけど、昨年行ったことで、うらら保育園の講座、子育て講座ですね。その講座、毎年行っているんですけど、NPOの増澤さんが中心で進めてくださっているんですけど、昨年はコロナということで、対面の講座ではなく動画を作りました。

20分ぐらいを3つに分けて、全部で1時間ぐらいの動画を作りまして、それを講演していただきました。内容は、葛飾区が2020年3月に発行した新しい水害ハザードマップの内容なんですね。その解説編がとても良くできているので、それを自分なりに新小岩に焦点をあててスライドを作って、作りました。それを任意の時間に保育園に来ていただいて、密にならないように3組ぐらいの方が同時に聞くような形で実施していただいたことが、中村が昨年度行った内容で、保育園の方に内容を補足していただくといいかなと思っています。私からは以上です。

南 はい、ありがとうございます。じゃあ保育園の方、3名いらっしゃると思いますが、齋藤さんカメラがONですかね？

■ 齋藤さん（うらら保育園）

齋藤 では齋藤から。中村先生、ありがとうございます。

中村先生がいま話してくださった通りなんですけれども、数年前から台風であったり、水害が大きくなっているの、子育て中の保護者の皆様も水害についてとっても興味がおありで、毎年人気の子育て講座となっているんですけども、昨年度はコロナということで、保育園に地域の方が入っていただくことも制限した状態でしたので、例年でしたら増澤さんがパネルを持ち込んでいただき、中村先生の方から講演いただくという形が定番になってきたんですが、動画を中村先生に作っていただきまして、うらら保育園の一つの部屋に3家庭が集まってご視聴いただくか、もしくはDVDに焼いてレンタルということで貸し出しも致しました。ご利用してくださった方々の感想としましては、新小岩地域にすごく限定されていたので、自分の居住区で、すごくリアルな情報だったということの声を頂きました。中村先生、ありがとうございます。

渡邊 なるほど。動画っていうのは非常に分かりやすいものなんですね。保護者の方々が実際に何人ぐらい聴講していらっしゃるんですか？

齋藤 うららに来ていただいたのが3家庭1グループ。貸出については、期限は設けてないので、継続的にどうぞご利用くださいということなので、ちょっとすいません、延べ人数の正確な情報が私の所には来てなくて、すみません、失礼いたします。

渡邊 まあ保護者の方っていうのは、保育園ってことは若い世代ですよね？

齋藤 そうです、大体30代。

渡邊 さきほどの若い世代と地域、なんていう議論がありましたけれど、そういうところも保育園が何か、率先して担っていただけそうなことも随分ありそうな気がしますね。

中村 あと渡邊さん、すみません、ちょっとひとつ補足をいいですか。動画を作ったときにハザードマップの解説編を使ったんですけど、とても良くできていて、大田さんに事前に許可を頂いて作ったんですけど、葛飾区のハザードマップの解説編っていうのを皆さんちゃんと読み込むといいかなと思いました。

渡邊 あー、なるほど。それは中村さんから公開されるということはあるですか？

中村 私が作りましたが、NPOの理事として行なったのでNPOとして取り扱

いを決めていただければ、誰でも見ていただいて結構かと思っています。

渡邊 なるほど。じゃあそれはまた改めて、どういう公開の仕方が適切かを相談していきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

じゃあ大学からは、この辺でどうですか。

南 そうですね、第3部の時間も含めて15分だということだと思ひるので。

渡邊 ここは行政・メディア・企業・NPO からと、だいたい終わっているんで、初めての参加者がたくさんいらっしゃることも気にはなっているんですが、第3部に入ります。

＜第3部：次の展開を考える「とっかかり」を発想してみる＞

渡邊 あと10分ぐらいしかないんですけど、「次の展開を考える取っ掛かりを発想してみる」と。加藤さん提案の。加藤さん、第3部に入りますが、第3部の「次の展開を考える」というのを説明していただいて。後10分ぐらいしかありませんのでよろしく。

■ 加藤さん（「次の展開を考える」ためのキーワード）

加藤 では10分で、まとめも兼ねて第3部をスタートしたいと思ひます。

今日初めてのオンラインの輪中会議を、ほぼ終了間際になっていますけども、思ったよりはよかったなという感じですね。ただし、対面のような熱気とか空気感はちょっと感じづらいなと言うのは。ただ、今日いろんな方がいろいろ発言されて、お互い何がしか相互に触発されたのではないかなという気がしています。これを大切にしながら、それぞれのグループ、それぞれの立場で、ぜひ次のステップに行っていただきたいというのが、とりあえずのまとめになります。

次の展開を考える取っ掛かりというものも、この会議の中でみんなで共有していくといいのかなというふうに思っています。この地域はさほど感じてないんですが、他の地域に行くと、とかく防災に絡むような様々な活動っていうのは、常にマンネリ化の危険性っていうのがある。そうならないためにも、常に「自律発展性」というのを活動の中に入れる必要があって、そのためにはこの取っ掛かりというものが非常に重要かなと思ひます。

今日は3つ挙げたいと思ひます。

1つ目は「世界から考えてみる」あるいは「世界に向けて考えてみる」、これが1つポイントかなと思ひています。今回先ほど来、出ているSDGs。これは世界の共通言語になり得るものなので、このSDGsというのを頭の片隅に置きながら、もう一度自分たちの活動を見直してみるといいと思ひます。今日は時間があれば…（議論したかったんですが）。

先ほどマルク先生がフランスから発言されました。それから中村先生はマレーシアで最近大活躍されているということですので、東南アジア。それから、今日はちょっと来てないんですが、ヤスミンさん。インド人で日本育ちでニュージーランド国籍という方がいるんですが、ここにも何回も来ています。世界

第3部：次の展開を考える「とっかかり」を発想してみる

- ①相互触発して、次のステップへ
- ①世界から考えてみる、世界に向けて考えてみる
 - SDGs: 世界共通言語として
 - マルク先生(フランス)
 - 中村仁教授(芝浦工大)、ヤスミン(芝浦工大)
 - 他
- ②多様な参加から主体的な活動へ
 - 齋藤由里子さん(味の素ファンデーション)
 - 他
- ③他地域との交流、刺激を受ける、学び合う
 - 被災地から学ぶ... 渡辺(南三陸町ツアー(2013頃))
 - 流域で考える... 加藤孝明

を少し意識してみるといいのかなと思ひます。

それから2つ目が「多様な参加から主体的な活動へ」。冒頭にお話したように、多様性というのが非常に重要である。今日も名簿を見ると、若干、今回に限っては男性が活躍しているような気がするんですけども、女性の参加を含めているいろんな年代の人たちを含めて、いろんな人が参加することで、それがいろんな活力になっていく。しかも単なる参加だけではなくて、それぞれの人が主体的な活動に移っていくのが良いのかなど。そのためのヒントとして、外部からの刺激を受けるっていうのをとても大切なことだと思ひていて、今日は味の素ファンデーションの齋藤由里子さんが、たまたま僕に声を掛けられて来ていますので、3分ほど後で話を聞きたいと思ひます。

そして3つ目が、「ほかの地域との交流」。2013年頃、ここの参加メンバーで南三陸の被災地ツアーをしたことがあります。あの経験からいうと、やっぱり学ぶべきものは非常にたくさん多いんですね。ですから被災地から学ぶのもそう、それから同じような活動をしているほかの地域から学ぶのもそう。いずれにしてもほかの地域との交流をして刺激を受けるということが、次の展開において非常に重要なのかなというふうに感じています。

それでは、2つ目に関連して、味の素ファンデーションの齋藤由里子さん、3分ぐらいどうぞ。

■ 齋藤さん（味の素ファンデーション）

紹介いただきありがとうございます。では少し画面をお借りしたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

私は、今日は逗子からお送りしていますけれども、逗子は津波のリスクがあるところとして、地域でこういう会議があって、みんなで防災について話合っているかっていうと決してそんなことはないの、個人的にもいろいろ身につまされながら伺っておりました。

ただ今日は私、「味の素ファンデーション」という組織の立場で少しお話しさせていただきます。『食のチカラ どこまで防災に活かせるか?』という題になります。

味の素ファンデーションの説明ですが、味の素株式会社が4年前に設立した公益財団法人で、食と栄養に関する4つの事業を行っています。ただ、食についてはコミュニティの持続的な自立なしではなり得ませんので、私たちもコミュニティの活性化っていうのはいつも念頭に置いて活動しております。

で、突然なんですけど、皆さん今日のお昼何召し上がりましたかね?というのを少し伺ってみたいと思ひます。栄養バランスを意識して召し上がっている方、どれぐらいいらっしゃるでしょうか?で、なぜこれを伺うかという、皆さんご自身の体は皆さんご自身が食べたものの積み重ねでできているということですよ。で、健康な体もちろん防災の資本になりますので、ここが私たちは、いつも誰に対してもお伝えしているメッセージです。

ただ、今日は輪中会議なので防災に対して関心の高い方ばかり集まっていられると思うんですけども、普段は皆さんも防災に関心のない人をどう巻き込むのか、ってご苦労されていると思ひます。

実は栄養に対しては全く同じでして、食べることに興味があっても栄養はどうでもいいと思ひている人も結構います。栄養をちゃんととるということは、なかなか関心が高まりにくいテーマです。なので共通点があるなと思ひまして、手間とコストがかかるし、行動も結果が出るまでに時間がかかる。でも大事だ

と思っているんだけど行動が伴わないとか、色々ありますよね。後で痛い目を見るっていうのも同じかなと感じています。私、防災に関しては非常にまだ駆け出しなので、皆さんから学ばせていただきたいと思っています。

ただ、食については一番、本当はハードルが低い防災だと思っています。なぜなら、毎日食べない人はいないですし、誰でもできるし、毎日の日常の延長線上でできる。何より小学校で習った知識で出来ますし、美味しいし、楽しいわけですね。先ほど「ナッジ」という言葉が出ましたけれども、美味しいし、楽しいから続けられる、態度変容につながるのかなというふうに感じています。

なぜ私たちがこの話をするかというと、東北の復興応援活動で得た活動を根拠に今話をさせていただいております。私たちは参加型の料理教室で「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」という活動を8年半東北で行ってまいりました。目的は、**食と栄養**の目的もあるんですけど、**コミュニティの再興**というのを目的として、参加型の料理教室という場を作ってきたという組織です。8年半で東北3県で活動してきましたんですけど、2019年でスタッフ派遣型の支援を終了しまして、2020年度から後方支援をしています。東北で40強の団体が自主的に料理教室をする後押しをさせていただいております。ただ、残念ながらコロナで中断しているところがほとんどです。



具体的な支援内容なんですけども、レシピの提供ですとか、まあレシピも今年度は本にさせていただきましたけど、ホームページに全て載っております。どなたでもご活用いただけます。あとは調理道具一式を差し上げておまして、自治会などでこの調理道具を使って料理教室をしていただいております。あとはこういう**栄養チェックツール**なんかもお配りしています。

ただ、コロナの間料理教室できないところが多かったので、紙でレシピを配布して、お便りを募集したりして、お便りに対してお答えする動画を作って、それを自治体にコードを配布して、集会所に集まらせていただいて、皆さんマスクして見ていただくみたいな、そんなこともさせていただいております。

食べることの価値ですけれども、皆さんもういろいろお感じになられるように、ただ栄養だけじゃなくていろいろな価値があります。特に私たちの東北の活動で感じたことは、楽しいので人と人が繋がりがやすいということをすごく実感しております。これが、**一緒に作って一緒に食べる**とより強化されるというところはぜひアピールしたいところです。コロナでなかなか料理教室ができないんですけど、先ほどの「天サイ！まなぶくん」とかも面白いなと思って見ていたんですけど、やはり地域の繋がりがあって初めて生きるアプリかなと思



いますので、地域のつながりをつくるために、参加型の料理教室というのもご提案させていただきたいなと思っております。

こちら、今日は駆け足の説明になってしまいましたが、さきほど南さんのほうに PDF 資料をお送りいたしましたので、Google ドライブの方に保存していただければ、皆さんご覧いただければと思います。

今日たくさんの方、皆さんいらっしゃっていますが、もし参加型の料理教室を防災に活かしたいよ、という方がいらっしゃいましたら、お声掛けいただければ、ぜひ連携させていただければと思います。宜しくお願いたします。

齋藤からは以上です。

渡邊
加藤
渡邊
加藤
渡邊
加藤

はい、どうもありがとうございました。

はい、どうもありがとうございました。

加藤さん、南三陸からの学びをちょっとだけ報告していいですか？

ちょっと一瞬待ってくださいね。

はい。

今の齋藤さんの話は、**防災×食**。防災【も】まちづくりの1つの例で、**防災とともに食も考えていく。逆に言うと食から防災を考えていくっていう。**今までこの地域では取り組んでいない新しいアプローチなので。**味の素ファンデーション**してもおそらく、まだ模索中なので、一緒にいいやり方というのが考えられるといいなと思います。

渡邊
齋藤

なんか一緒に**共同研究**ができるというようなことはありませんか？

あると思います。実際に東北でも研究をしておりますので、その成果が出ましたら、ぜひ皆さんに共有させていただいて、平時の防災活動としてやるときにどういう態度変容が起きるのか、みたいなことの研究を、もしやらせていただいたら、大変ありがたいなと思います。

渡邊
齋藤
渡邊

それは我々のようなチームワークでできますか？

もちろんです。

はい、ではそれは期待しつつ、また来年につなげて議論が深められると素晴らしいですね。

齋藤
加藤

ありがとうございます。

はい、では渡邊さん、3 番目のキーワードの「**他地域との交流**」という一環で、この南三陸町からの報告があるそうなので、どうぞ。

■ **渡邊 (NPO ア！安全・快適街づくり事務局、南三陸の支援体験について)**

渡邊

本来なら、今日の招待の中に南三陸の小野寺さんが入っていたんですが、たまたま町の催しが重なってしまっていて入れなかったんですけども、小野寺さんっていうのは南三陸の歌津地区に住んでいるリーダーなんですけども。リーダーに、災害以降なった方なんですけど、「**一燈**」。一の燈す。火へんに登ると書くやつですが、それをここの**記録**を見ると、**情報がないことが非常に大きな不安に繋がってきた**ということで、**2011年4月17日を第1号として、なんと2017年3月15日、計53号の歩みにプラス、つい最近送られてきた避難所72時間の記録**、これは聞き書きなんですけど、災害から3日間の**極限状態**のなか、**どういうふうに生き延びたか、**というような記録まで作ったんですね。こういう**記録を残す**ことによって、次々と持続可能な我々の助け合いが進むといいかなと思って、これをちょっと紹介したくて、入れてもらいました。

これは学ぶことがすごい多いです。一度このチームは、南三陸を含む町々を

訪問したことがあるんですけども、そこでも被災してしまった方々の話をたくさん聞くことができ、今後も先ほど挙がっていたような、新たにまた、10年後の街を訪ねるということは、非常に貴重な体験に思いますので、そういう体験に基づく新しい発想というものもしていければいいかなと思っています。できるだけ早い時期に訪問を皆さんに呼び掛けたいものです。

以上、簡単ですが、長い報告になりますので、この辺でやめておきます。

加藤 はい、ありがとうございます。一度南三陸町の小野寺さんを含めて、オンラインで話を聞く機会を作っても。

渡邊 それはぜひ必要ですね。以前にシンポジウムに出てきていただいて、壇上でいろいろ議論していただいたことがありますね。

加藤 はい。

渡邊 はい、それと同じように Web ならば、遠くからでも参加できると思いますので、そんなことを、機会を作りましょう、というふうには、皆さんに電話で伝えておきました。

加藤 はい、では是非そういう機会を何とか作りたいと思います。

渡邊 はい、お願いします。

加藤 あと、最後に、流域で考えるということに関連して、これまだ企画中なんですけど、板橋区の NPO が今企画していて、この「荒川流域（東京・埼玉）防災住民ネットワーク：防災ネットワークづくり会議」っていうのを今年の 11 月ぐらいに開こうじゃないかという話で進んでおります。実行委員会形式で、たぶん僕が実行委員会の委員長になることになるんだらうなって思いながら議論しているんですけど、実行委員会形式で、市民先行、行政後追い、という形で、この会議を流域でやりたいと思っていますので、是非このチームも一緒になって実行委員会に入っていたらいいかなというふうに思っています。

あわせて、後援には板橋区、これ板橋区の NPO ですから板橋区になっていきますけど、葛飾区や荒下などにも、ぜひ後援あるいは協力いただけるといいかなと思っています。今日は時間がなくて呼びませんが、この板橋区の市民の方がこの 1 から 6 までを書いてありますけど、いずれもなるほどということが書かれています。なお、この板橋区で企画された NPO の方っていうのは、以前この輪中会議にも何回かいらっしゃっている方ですので、ぜひ一緒にできるといいかなというふうに思っています。以上です。

渡邊 5 時 22 分になりました。流域で考えるネットワークについても、早川さんや情野さんのご意見もうかがいたいし、NPO のご意見もうかがいたいんですけど、これは次回の Web 会議に回すことにいたしてよろしいでしょうか？

加藤 はい、そうしてください。

渡邊 はい、ではそのようにします。あと、今日もう何か一言言っておかないと、ちょっと寝つきが悪いというような方がいらっしゃったら手を上げてください。大丈夫ですか？

南 ちょっと今見ますので。手を上げてください。Zoom 上で手を上げてもいいですし、カメラに向かって直接手を上げていただいても構いません。いらっしゃらないでしょうか？いらっしゃらなそうですかね。

渡邊 それでは加藤さん、この最終のまとめで今日は閉じてよろしいかどうか、どうですか？

加藤 はい、大丈夫です。

■ 事務連絡・写真撮影

南 事務連絡は先にしておいたほうがいいですか？

渡邊 はい、事務連絡してください。

南 いくつかあるんですが、1 つは、皆さん 3 時間半にわたってお疲れかと思いますが、Zoom 上で今日お話しされた方同士、あるいは参加された方同士でもう少し詳しい情報交換をしたいとか、連絡先の交換をしたいといったようなこともあるかと思いますが、こちらの Zoom の部屋のほうは終了後も開けておきますので、簡単な交流会のような形で、お時間のある方は残っていただいて、引き続き議論していただければと思います。

それから、今回の輪中会議の事務局を務めております NPO ア！安全・快適街づくりでは、毎年ニュースレターを発行しております。NPO の年刊誌「ア！安全・快適街づくりニュース」といまして、毎年この新小岩のきれいな景色を表紙にして、NPO の前理事長の石川さんの詩なども入った素敵な表紙です。

中身の方は、地域内の方、地域外の方、それぞれの立場でご自身のご経験だとか、伝聞だとか、あるいは研究だとか、さまざまに世界中から報告をいただいております。ぜひ本日ご参加いただいた皆様からも、A4 1 枚で結構ですので、それぞれの現場での活躍の状況やご報告などをいただけたら幸いです。

原稿の依頼につきましては、先ほどチャットの方でご紹介した Google ドライブにも入れてありますし、のちほどメールでも送らせていただきます。今月いっぱいを締切とさせていただきますので、よろしくお願いします。

渡邊 はい、ぜひ寄稿してください。お待ちしております。なかなかホームページを見ていただくと、いい冊子になっておりますので、ぜひお寄せください。

南 それから最後に、先ほど中学生と一部の方だけで写真を撮ったんですが、今だいぶ人が増えていますので、最後に全員で写真撮影をしたいと思うんですが、これは加藤先生のご挨拶のあとにしたほうがよろしいですか？

渡邊 加藤さん、このまとめでご挨拶はもういいですか？

加藤 ご挨拶、もうなしでいいです。

渡邊 はい。では写真でまとめて、またそれも掲載しましょう。全員の皆さん、ご了解いただいたと思って進めていいですか？

南 全員との返事は待てないと思うんですが、もし顔を絶対に出したくないという方がいらっしゃいましたら、カメラ OFF のままにさせていただいてもいいですし、後からメールで「私は写さないでください」と一言いただければ、写さないようにします。

渡邊 この 1 つの画面で今日の八十何人か入る訳ですか？

南 二画面に分かれてしまうので、2 回撮りますね。1 枚目撮ります。はいチーズ。2 枚目撮ります。はいチーズ。はい、ご協力ありがとうございます。あとでドライブの方に写真も入れさせていただきます。お楽しみに。

渡邊 はい、では輪中会議の全行程は終わりました。あとは南さんに交流会の方にお任せしていいですか？

南 はい、お疲れさまでした。

■ おわりに（高校生コメント）

南 さて、中学校の地域防災ボランティア部の OB で、高校生が今日 5 人も参加してくれていて、今までで最高の人数なんですけど、発展性、継続性、持続可能

性の1つでもありますね。地域内での防災活動の持続可能性ということで、中学生から高校生、大学生、社会人へとバトンを渡していくということで、ちょっと高校生の皆さん、顔を写してもらってもいいですかね？簡単に一言ずつ、今日の感想を。

小豆嶋 今日はお疲れ様です。たいへん貴重なお話を聞いてよかったですと思います。加藤教授からあった、SDGs。これは高校の都立入試にも取り上げていた課題で、自分も最近これについて詳しく調べていたんですけど、今日詳しく聞いてよかったですと思います。いま高校3年生なんですけど、総合的な活動で「浸水対応型市街地構想」について発表をしようかなと思って、自分も「浸水と親水」という表現が大好きなんですけど、それについて発表しようとして、今日また詳しく、新しい情報に更新できてよかったですと思いました。

柳原 「天サイ！まなぶくんⅡ」っていうやつが、今までの事前準備だけだったのが、実際にアプリが災害時にも使えるようになるかなと思ったのが、よかったですと思いました。ぜひこのアプリを入れてみたいかなと思って。

南 何か開発にも、意見をください。

柳原 はい、聞かれたら答えられるようにします。

鈴木 まず、2年ぶりに参加出来て、お話を聞いてよかったですと思います。同じで、天サイ！まなぶくんの旗の機能が、すごい使いやすいそうだったのと、印象的だったのは、このウイルスの、感染症が広がっているときだから避難訓練が大事だというのが、とても印象的でした。

増淵 今日参加して、防災が軸だと思いますが、防災だけでなく、コロナとか食とか、枝分かれして色んな話題を知れたのがよかったですと思います。

南 防災【も】まちづくりの話ですね。ほかに広げられそうな分野を、日常生活の中で考えてみてください。今後も一緒にやっていきましょう。

勝又 今回、増淵と上平井中学校の方から、現中学生の後輩たちと一緒に、1時間ほど途中まで参加させていただいたんですけど、新しく Zoom を使って会議をすると、もちろんちゃんと会場で、全員で集まってやるときとは違って、そこまで盛り上がりには欠けるところはあろうと思うんですけども、2年越しに一応は会議ができて参加できただけでもうれしいので、次回どういう形で輪中会議の議論に参加できるか不明ですけど、もしあるのであれば、また次回も増淵がよければ、2人で参加していきたいなと。

南 是非今度は、高校での活動など、発表もしてもらえれば。

渡邊 大歓迎です。

勝又 また何かしら情報を収集してきますので、そのときには、実は卒業式の1週間前に千葉県を横断してきました、利根川で資料を回収済み（P.91-95）なので、発表できる機会があればよろしくお願ひします。

成戸 いま若い人の話を聞いていて、「天サイ！まなぶくんⅡ」への関心が高かったのが嬉しく思いました。地域でどう取り込んでもらうかが大事なので、スマホがベースになっているので若い人に関心を持ってもらわないと地域に根付いていけないと思うので、ぜひ若い人に、赤旗を押した人を助ける立場にゆくゆくはなってほしいなと思います。

南 それから、チャットで宮本さんから、「災害時のネット環境をいかに確保していくかということについてもあらかじめ考えていくことが大事だと思います。そのことについても論点を入れていただけたら」とメッセージをいただきましたので、次の輪中会議で論点にしていけたらと思います。以上です。

第14回 Web「輪中会議」(2021)を振り返って

渡邊 喜代美

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

第14回 Web 輪中会議 総司会

初の Web「輪中会議」

2021年5月9日午後の輪中会議は初の Web で開催されました。ニューズレターへ記録を収録するにあたって、南さんとポイントをまとめる作業をしつつ、Web で“も”結構“いいね”という感想を持ちました。Web「輪中会議」は初めてのことです。

北地区センターに置いたいつもの会場は、サテライト会場としてその進行は加藤さん、そしてサテライト会場の参加者は12人。Web 総司会は渡邊、Web 運営記録は南さん、この3点を繋ぐ形です。参加者の皆さんはそれぞれのご自身の場所から参加です。

Web 参加 70~80人。うちこれまで輪中会議に参加できなかったが今回初の新規参加者が50%程度を占めました。これは、どこに居ても参加可能な Web というシステムによるものです。例えば、フランス・ラヴィレット国立建築学校(ENSAPLV)の Marc Bourdier。マルクさんです。マルクさんは日本での研究生生活の経験者ですから、実は新小岩エリアもよく知っています。遠いフランスからまさに同時に参加できることは新鮮な経験です。また、イギリスに留学中の塩崎さんなども海外に居ながらにして参加できました。こうした参加は Web「輪中会議」の最大のメリットですが、やーやー久しぶりで一すとかお元気？とか、ハグしたり握手したりのホットさにはもう一つです。また、地域の方で Web を活用できない方の参加は北地区センターのサテライト会場を予測したのですが、町会組織を活用しきれなかったようです。一方 Web を活用できる若い層の参加者多くいました。

さて、Web「輪中会議」。

■ 第0部：はじめに

輪中会議の開催主催団体の成戸協議会会長、中川連合町会会長に、コロナ禍中の近況を報告いただいた。中川さんは、コロナ禍中、地域の活動はできなかったが、と言いつつも、トランシーバーのチェックなどや、徳川家康全集全巻読破、歴史上の水害情報を調べたり、近隣に残された記念樹なども紹介、いつも地元愛にあふれたレポートが楽しい。



■ 第1部：基調講話

講話は、加藤さん、早川さん、情野さん。

加藤さんは浸水想定型市街地形成など、葛飾区における都市政策の新たな展開について紹介、ゼロメートル市街地形成の一つの型を示した。地域・NPO・大学・区・都・国が連携するも住民先行／行政後追いの先進的なあり方、バランスある連携を共有していくことや、参加の多様性などコミュニティの醸成など防災も街づくりの多岐にわたる話をした。

早川さんは、台風19号の荒下の対応、河川管理の流域治水への展開、SDGs、ナッジ(Nudge)、ベスト避難チャレンジ、ミズベ・グリーンコミュニティ、立体のハザードマップなど、河川管理者から見える多様な活動をわかりやすくお話した。流域治水への新たな展開は、これも防災だけではなく新たなまちづくりでもあった。私たちの日常に直結する防災もSDGs ナッジ(ちょっと背中を押す…)も近所・近助につながる。

「空は青空でも氾濫水域は危険」という話、あるいは川に流すだけでは限界がある。流域治水への展開は、網の目のような河川を有する国土の新改造論かもしれない。

浸水想定型市街地形成なども流域治水と関連した都市構想だともいえる。

ここで、途中で退席をしなければならなかった上平井中学校の皆さんから

Q1. 専門家と世界・日本社会の認識のギャップを埋めるには？

Q2. ダムが大事なものと認識したが？

などリアルな質問、むしろ、鋭い指摘でもあった。Q1は引き続き議論が必要、重要な指摘です。Q2は、“流域治水”という新たな方向性が示されたことと合わせ、ではその今後の在り方は？広く議論を求められる問題提起といえます。

中学生の部活支援のうれしい成果、“考える”風景が見えた感じです。

中学生の退席後、

情野さんから葛飾区における具体的な浸水対応策の紹介があった。学校の浸水対応改修・あるいは建て替え時の方策、避難場所の民活への拡大は、コロナ禍において示された具体策であった。いずれも具体性に富んだ区の方策は、コロナ禍で危機管理の基本も見直されたようである。

時間の制約で中学生諸君は情野さんの講義を聞きそびれたが、**部活でお招きしてお話しいただく機会もあろうか思う**。でも、一緒に聞いて、議論したかったなー。

■ 第2部：多様な活動報告と意見交換

参加者が意見交流をしたが、こちらもたいへん興味深い意見や問題提起があった。

例えば、二上小の三上校長は、出前授業は評価、この間コロナで地域/保護者の参加が実現できなかったが今後も継続してほしい。学校の浸水対応改築の検討も具体化に向かっているなど詳細な報告。基礎勉強の進んでいる小学生には学校の改築もまた学習の場なって、さらに危機管理意識の向上を促すだろう。

松上小 渋谷先生は、出前授業に地域の方々が参加してくれて嬉しい。またコロナだからこそ避難所運営訓練 地域と連携をしていることや、これからの出前授業も地域の方々も連携して進めてほしい点やコロナ対策などもしつつ交流もあってほしいといった意見があった。支援する私たちもうれしいご意見である。

葛飾区 長谷川さんは区の総合防災訓練の話など危機管理の側面からコロナ禍のようなダブル危機の場合の危機管理の話は臨場感もあり貴重な話であった。行政は部署ごとの役割がありつつも非常時、平常時間問わず、連携プレイがあり、ゼロメートル市街地のリスク管理はいずれにも生かされていると感じた。

日本能率協会総合研究所(JMAR) 岸田さんは、出前授業講師もしつつ、地域の小学生の意識の高さ、また基本的なことが十分学習されていることに感心しきりであった。確かに教室に同席した時の静かな耳の傾け方は自分たちのリスクを知っておこうとする真摯さが感じられ胸が熱くなった記憶である。

地元の竹本さんは、出前授業講師をする中で、大人があるいは自分が考えつかないことに気付く小学生の力に刺激を受け、こちらが教わることも大いにあるという。

渋谷先生は、小学生の意識の高さは家庭による差も多少あるといい、出前授業から子どもをと通して各家庭に危機管理の意識の波及を願うという。

一方、中川さんは、子どもたちの意識の高さにテレビのディレクターも感心していたという。危機管理意識の向上が感じられ、地域のことを知りつつ、快適な、安全な暮らしを醸成していければ、活動する私たちの側にも元気をもらえる。ご意見はNPOア！の活動の有用性が感じられてうれしかった。

NHK 興野さんも自分も葛飾の子どもたちに意見を聞いてみたいという。NHKも災害対策に関するポスターキャンペーンを進めている話は、公共放送の力を感じつつ、日常・非日常の課題の人々の理解の深まりを期待した。

NPO事務局(山上・古川)さんから、「天サイ！まなぶくんI・II」の紹介をしてもらった。NPOア！の開発アプリは、地域に根差しているゆえリアルで地域に役立つアプリと思う。会員でもある古川さんは地域に住む人でもあり、アプリの開発をする技術者でもあり、力強い。

Web参加者の椋さんは、高台の整備・総合設計制度の活用など専門分野からの発言で、中川七曲りの高台化利用や土地活用の制度活用による合理化などの発想を提起した。

これに対して葛飾区の情野は、中川七曲りは親水型で、荒川沿いは高台化、

高台化建築など区の方針を話し、加藤さんは、総合設計制度などは敷地の規模が小さい葛飾エリアではなかなか使いにくいなど現実的に可能な策を模索しているというリアルなやり取りがあり、諸制度は地域の特性にそった形、あるいはゼロメートル市街地にあった制度が求められることを考えさせられ良い刺激となるやり取りであった。

地域在住の皆さんもいろいろな活動が発信された。

上小松町会の山口さん、会長・東原さんが参加できなかったが、台風19号とコロナ禍を受けての避難所運営の検討など、エリアの広い町会活動の工夫が報告された。

東七 大河原さんは、女性市民消防隊・実践訓練の体験談は非常にエキサイティングな体験で、大川を埋め尽くす観光船の間をぬって、船を操り、上陸地点や土手などを観察して大変な自主訓練をした。このすごい体験を次の輪中会議で詳しく紹介くださいとお願いした。

JMAR 原田さんは、広域連携で東七 女性市民消防隊に参加している。居住地は葛飾ではない千葉県だが通勤しているエリアに危機意識は共有して参加している。地元の竹本さんが原田さんの危機意識を高く評価していた。

社協 亀川さんは、共助の大切さ・内部と外部の連携など社協の活動体験から呼びかけ、かつしか FM 山岸さんは、地域内のメディアとして防災意識の向上に寄与したいという。すばらしい皆さんが集まってきている。

また、中央大 松田さんは、かつしか FM の番組に出演を契機に、町会と外部の人の連携の大切さを考えた。

遠く仏の ENSAPLV マルク先生は、災害体験は日仏共有の課題であることや、高台の建築的対応などについては、すでに日本では建築家たちによる前例を持っていること、またフランスにおいても水害被害を予測した地方の事例があって、学生たちと観察していることなど、話された。マルク先生は日本の街をよく歩いていて、新小岩についても熟知している。高台化について土木的、建築的対応策を多様に駆使して、街づくりに貢献したいという。

芝浦工大 中村先生は、うらら保育園の支援活動がコロナ禍で現場に行かれないので、ついてはそれぞれ各自各家庭で見ただけの「水害ハザードマップ解説」動画作成をしてくださった。

うらら保育園 齋藤先生は、中村支援は若い層の保護者に対してとても有効だったうえに動画提供もうれしい。若い層の保護者は、地域の核にもなりえる。近所近助につながる感じがした。



経験を共有し、地域の未来を語ろう。

■ 第3部：次の展開を考える「とっかかり」を発想してみる

加藤さんは次の展開を考えるためのキーワードを整理してくださった。

- 防災【も】まちづくり
- 総合性 内発性 自立発展性
- 市民先行・行政後追い 多様性、緩やかな連携
- 大災害の時代へ 地球温暖化 台風の巨大化 海水温上昇
- 流域治水 気候変動を踏まえた水害対策の在り方 みんなで考え対策
- 上下流のバランス
- 浸水対応型市街地構想 浸水親水
- 治水対策 広域避難対策 浸水対応型まちづくり
- 中川さん新聞コメントにみる地域力
- 区・加藤研共同研究 浸水対応型市街地構想
- 前に進めるエンジン 浸水親水 都市の魅力を高める
- 東京都も葛飾の検討を踏まえて高台街づくりへ発想転換
- 新小岩から世界へ 到達点と方向性の確認 2016 シンポジウム
- 「SDGs×親水対応型」市街地
- With コロナ
- 社会実験、ライフスタイルの変化 etc.
- 地域防災におけるプラスの効果は
- 気になる留意点 自助の強調 弱者の問題など自助共助公助のバランス

味の素ファンデーション 齋藤さんから、食と栄養と防災、東日本大震災被災地での参加型料理教室の支援など企業の持つ特性を社会に生かすお話は、今後の共同研究に期待をしたい。

渡邊からは、南三陸の支援の体験・コミュニティの大切さの体験など話した。5年間の支援体験は、都市部の災害対策に十分役立つ体験で、どのように生かせるか。

その後の交流、シンポジウムへの参加、現場訪問時の交流、などなどの積み重ねで得たものも多いが、コミュニティ醸成が、いかに災害時を乗り切るエンジンたるか、重要なことを学んだ。

次の展開
相互触発

- ① 世界から考えてみる
- ② 多様な参加、主体的活動
- ③ 他地域交流 刺激を受ける、学びあう
- ④ 荒川流域ネットワークで災害被害の解決を
- ⑤ 「食」力、コミュニティ、栄養バランス、健康な体 防災の資源

最後に事務局から、ニューズレター原稿依頼・Web 会議参加者全員の写真撮影など・Web ゆえの同時進行もあって、無事「Web 輪中会議」終了。



第14回 Web「輪中会議」(2021)の総括と今後の展開

加藤・中村・成戸・早川・南・渡邊などのコメントから

第14回 Web「輪中会議」終了後、事務局内で挙がった今後の輪中会議の展開に関する意見や、次回以降に積み残された議論について、簡単にまとめる。

- 基本的には、年2回の輪中会議を行う (Web, 対面)
- 裾野を広げるとともに、輪中会議を支えるグループの触発の場とする。
 - 輪中会議1 (役割1) : 今回スタイルで年1回実施.
 - 輪中会議2 (役割2) : 別の形で、年数回程度、実施。
 - 名称を別にするか?
 - 事業計画に盛り込むか? <抽象的に記述>
- 輪中会議には講師を招く
 - 従来の輪中会議の基調講話をどう活かしていくか?
- 地域における出前授業・対話 (小・中・高)
- 保育園・幼稚園の親たちと、どう連携するか?
 - 通常の会議スタイルでは参加が難しい
 - Youtube で情報発信, SNS で情報共有や議論 今後どう活かせるか?
- 輪中会議で触発された学生を、活動にどう参加してもらおうか?
 - ニュースレターへの寄稿を促し、記録に残す
- 広域ゼロメートル市街地研究会の活動・勉強会
 - 海外の浸水対応型市街地の事例調査, 研究 (世界中の知見をいただく)
- 地域の活動主体の多様化: 参画から主体的活動へ
 - 幅広い年齢層
 - 町会への働きかけ方の工夫
 - 町会未参加の人たちへの働きかけ
 - 地域の居場所づくりへの協力
 - 外部からの風を吹き込む (視点の拡大と掘り下げ)
 - ジェンダーフリー
 - 世界から考えてみる
- ジェンダー格差, 貧富格差 (災害時に往々にして起こるディストピアなど)
- オンライン会議の運用
 - サテライト会場の設定の多場所化
 - Web 運営者からサテライト会場の参加者の顔が見えにくくなる懸念
 - チャットで来たメッセージの会議への反映方法

- オンラインのメリット：意見を述べやすい部分「も」ある
- オンラインのデメリット：息吹が感じられない
- マイクの音質の改善：文字起こしをする際に自動化させるため
(特に、サテライト会場の発言者に個別のマイクを回すことが必要)
- 輪中会議で参加者間をつなぐ役割
 - メディアとのつながり方
- 荒川流域市民ネットワーク会議への参画
- テーマ性のある話題の取り込み方(例：医，食，住と防災)
- 協議会5者間の連携/コミュニケーションの取り方
- 事務局であるNPOア!の連携の取り方(普段，輪中会議中)
 - タイムスケジュールの管理方法
 - 会議中の連絡方法
- 記録の扱い
 - 記録動画の扱い
 - 地域の活動にプラスになるか?見極める
 - 葛飾の活動のモデルに関心を持ってもらうために活用
 - アクセスしたい人がアクセスできる状況をつくっておく

今回の輪中会議で積み残された課題

- 気候変動への対策や適応策について、次世代を担う中学生を主体とする、より深い議論を行うこと
- ダムや堤防、人々の暮らし方など、様々な対策・対応を組み合わせることによる、総合的な水害への備え、流域治水についての議論を行うこと。
- 葛飾区役所から、区の水害への取り組みについての資料を中学生に提供してもらい、講義をしてもらうこと。
- 二上小学校で動き始めている「浸水対応型拠点建築物」への改築について、子供たちにも参加してもらい理解を深めてもらうために、先生方との意見交換をすること。
- 出前授業について、家庭による意識の高さの違いや、家庭環境・家族構成等の違いなどに配慮し、より効果的な授業とするための連携の仕方について、学校側と意見を交わすこと。
- 東新小岩七丁目の「リアル」なボート訓練について、より詳細に体験談を共有していただくこと。
- 若者と地域の連携を促すうえでの地域メディアの役割について、意見を交わすこと。
- 南三陸町の小野寺さんなどから、オンラインで話を聞く機会をつくること。
- 荒川流域防災住民ネットワークについて、荒下や区、NPOの意見を聞くこと。
- 災害時のネット環境をいかに確保するかということについて、検討をすること。



学校から



～中学生が学ぶ地域の防災～ 地域と連携できる幸運に感謝して

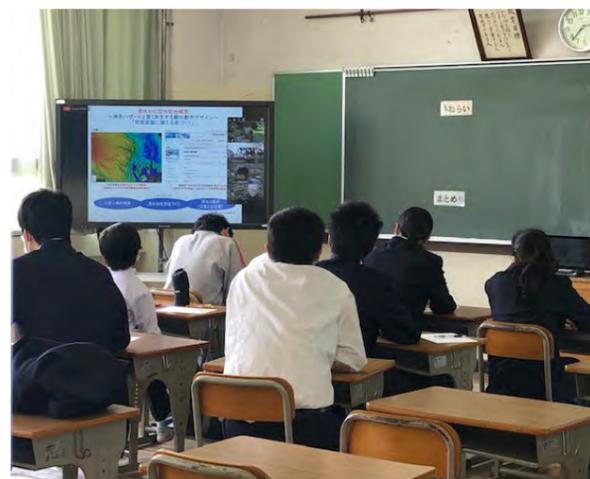
太田 恵理子

葛飾区立上平井中学校 地域防災ボランティア部・顧問

上平井中学校の地域防災ボランティア部は、理科部の活動を一部継承した形で発足し、本年度で結成約 14 年を迎えます。この間、NPO ア！安全・快適街づくりの皆様や、大学、南先生の多大なご支援を賜り、生徒は水害や火災などの防災について学んで参りました。近年は、地球規模で災害が増加し、生徒の防災への関心も年々高まっている印象があります。毎週、図書室で行っている月・木曜日の活動では、iPad を用いた調べ学習や、区の防災ハザードマップをもとにした話し合い活動、新聞づくりなどを行っています。昨年は、新型コロナの影響で部活動そのものが停止となり、生徒にとって残念な時期もありました。現在は、本年度 4 月より新たに 5 名の新入部員を迎え計 10 名で活動できる運びとなり、今まで以上に賑やかな部活となっています。

また、生徒にとって何より幸運なのは、地域の皆様に、交流の機会を頂けることです。学校の壁を越えて、様々な世代の大人と交流できる貴重な時間を得て、部員は大きく成長しています。本年の輪中会議にも参加させていただき、多様な学びを得ることができました。

講演を拝聴したあと、2 年生の中村亮太君が、代表として堂々と質問をしました。また 3 年生の大金咲良さんは、台風時に氾濫のリスクから守ってくださった方々の存在に気づいたことに感謝を述べました。防災部 OB の高校生が参加してくれたことも嬉しい出来事でした。地域の一員として将来を担う頼もしい存在として今後も積極的に防災活動に取り組みたいと思います。



地域防災ボランティア部

チボラ新聞令和二年十月十二日発行 コロナ特集

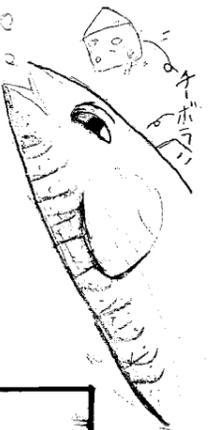
コロナの治療に関係している、看護士さんにお話を聞く機会をいただきました。

医療従事者の方と聞いてみました。コロナQ&A

Q1 体調の変化はありますか。A1 不安が強くなり、とにかく疲れます。

Q2 コロナが流行してから、院内が変わった事はありますか。A2 感染対策により一層気を付けようになりました。

Q3 コロナ病棟と普通病棟の違いはありますか。A3 中の空気が外に出ないようになっています。



みんなで減らそう!! コロナ感染

感染予防

- ①石けんを泡立てながら手のひらどうしをよくこすり合わせる。
 - ②両手の甲をこすり洗います。
 - ③指の間を洗う。
 - ④親指と手のひらをお互いに洗います。
 - ⑤指先・爪の間を洗う
 - ⑥手首を洗う
- 最低でも15秒以上かけて洗おう
洗い終わ、たし清潔なタオルで
手を拭き、アルコールで消毒
したら、キレイな手のごきあがり!



新型コロナウイルス感染症は、厚労省が「新型コロナウイルス感染症」として正式に認定された。この感染症は、呼吸器系から感染し、咳やくしゃみ、発熱、咽頭痛、頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚障害、腹痛、下痢、結膜炎、皮膚症状、腎臓障害、心臓障害、神経障害、血液障害、免疫障害、多臓器不全などを引き起こす可能性がある。また、高齢者や基礎疾患のある人、免疫抑制剤を服用している人は重症化するリスクが高い。感染予防には、手洗い、マスクの着用、換気の徹底、人と人との距離の確保、咳エチケットの徹底などが有効である。

利用者の声

この給付制度に対する評価は、今年四月の河北新報の取ったアンケートで「大いに評価する」、「どちらかといえば評価する」の回答が七割を占めるなど、好意的な意見が多く見られました。一方、世帯の人数によって、給付金額が大きく変わることを疑問視する指摘も見られた。

いづれにせよ、今まではオンライン技術を行政に使うことを慎重に考えていた政府が、この未曾有の事態で大胆に動き出したことは、コロナによる収入の落ち込みを不安に思っていた国民にとって、一つの期待となったようだ。

どうなの？ オンライン給付

昨年四月、政府では特別定額給付金に関する議論が行われ、国民には、一人あたり十万円のお金が給付されることになった。申し込めば、オンラインを通して申請が可能だ。書面での申請と比べ、大幅に手続きの時間が短縮される一方、国民の普及率が必須であるなど、手続きの複雑さがまだ残っている。

情報システムの遅れが言われて久しい日本にとって、この機会を通して教訓が多く得られるだろう。



4択クイズ

① コロナウイルスの正式名称はどれ
1 COVID-19
2 COVID-19
3 CONVERSE-21
4 CORONA-567

② コロナウイルスの由来は？(答えは2つあります)
1 コロナビール
2 ギリシャ語で王冠
3 太陽の周りの炎
4 コロナをロシアに投げ飛ばすの略

③ ハリスのワクチンを開発した人は?
1 杉田 玄白
2 ピカリ
3 ポルニード・ワクチン
4 ハイ・パスール

④ 過去に発生した感染症は?
1 SARS
2 インフルエンザ
3 TANA ker
4 川崎病

地ボラ編集委員
中村亮太(二の二)
大場悠生(二の三)
室屋充孝(二の四)
浅野日美(二の五)
大金 咲未(二の二)
田中 莉乃(二の二)

編集後記

突然、去年に、中国の武漢で発生したといわれる、新型コロナウイルス。現時では、世界中でたくさん人の感染者、重傷者、そして死者を出しています。

世界中で感染対策をしていますが、いまだに、終そくしそうちにありません。

しかし、このまま感染対策を続けていけば、必ずいつかは、新型コロナウイルスが終そくすると思われる。この新聞を書きました。

大場悠生

今回は新型コロナウイルスについて調べました。高橋氏の記事が数々正しい手の洗い方などについて調べたり、医療従事者の方にインタビューして新型コロナウイルスの恐ろしさに改めて気付きました。この新聞を読んでくださる方も、もっと新型コロナウイルスについて知ってほしいと思います。

コロナ禍の輪中会議に参加して

葛飾区立上平井中学校 地域防災ボランティア部
部長・田中莉乃 副部長・大金咲良

私たち地域防災ボランティア部に所属する現在の部員は、今年、初めて輪中会議に参加することができました。ZOOMの画面を通して、様々な方の意見を聞く経験は、初めてで充実していました。初めてのZOOMでの参加でしたが、会場の方や自分たち全員が一つの空間にいるような、大人のみなさんの熱量がとても伝わってきているのを感じました。私たちが、まだ知らない事実が沢山あるのだと気が付き、より一層部活動を頑張りたいという気持ちになりました。また、この会議を通じて、地域のつながりや災害などを乗り越えるために、人々がどのようなことをしているのか、1人1人、多くの大人の方々が地域・国のために必死になって頑張ってくださっていることが分かりました。輪中会議が昨年は、新型コロナウイルスの影響で中止になっていたと伺い、今年、参加できてとても嬉しかったです。私たちも、会議に参加した方々と一緒に、今の地域について考えることができたと思います。

また、忘れられない思い出もできました。それは、様々なお話を聞いた後、質問する時間を頂くことができたことです。当日は代表の部員が質問をすることになりました。たくさんの専門家の方々の前で、発言することは、とても緊張しましたが、ていねいに答えてくださり、学ぶことができました。NPOの代表の方にお褒めの言葉を頂いたことも忘れられません。無事に会議に参加でき、充実した時間を過ごしました。これからも、親水・浸水、街づくり・人づくり×近所・近助をテーマに、部活動の活動を通じて地域の皆さんと協力出来たら嬉しいです。

参加させてくださり、ありがとうございました。



千葉横断道中での発見

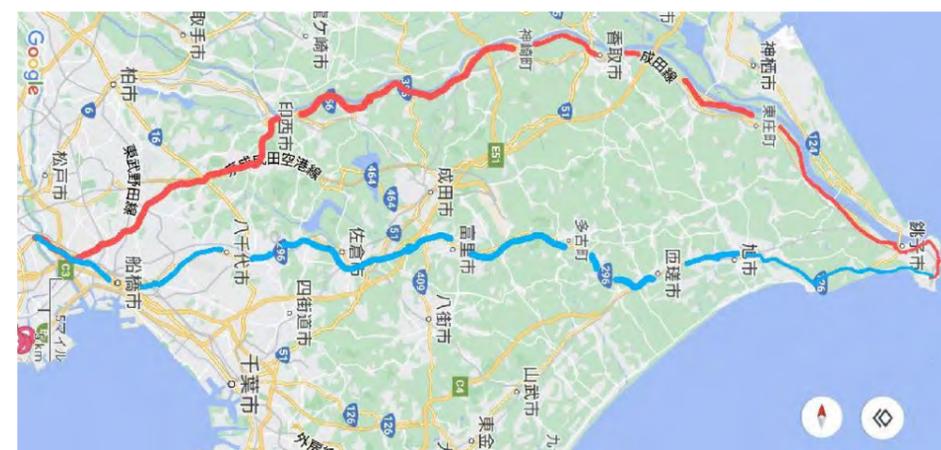
勝又 一喜
東京都立南葛飾高等学校
(上平井中学校地域防災ボランティア部 0B)

僕は中学生の頃から趣味で友人とサイクリングをしており、今年の三月に千葉県最東端の町、銚子市に一人で行った際に撮影したものを紹介します！

今回の目的地である千葉県銚子市、そもそも銚子とはどんな町なのか。

銚子市は葛飾区から約80km程離れた千葉県で最も東にある町で、銚子電鉄や犬吠埼灯台、屏風ヶ浦（関東ローマ）など観光スポットが結構多いんです。実は日本一早く初日の出が見れる町でもあるんですよ。

さて、ただ行ってみたいという理由だけで本当に自転車で銚子市に行くのですが、運動音痴な僕にとってはそこそこ厳しい、総走行距離約230kmの日帰り旅になりました。



今回のサイクリングのルート図

とりあえず行きは利根川沿いで走るのが最善と判断。なぜなら千葉県は標高の低い山や丘が多く、行きで山の中突っ走って体力を使うのは嫌なので、若干の遠回りにはなるものの楽で速い利根川沿いを走るルートで行くことに。

印西等を通って、国道356号線のすぐ隣にある利根川サイクリングロードを利用します。この道で一気に銚子市の近くまで行けちゃいます。

この日はかなり強い風が吹いてましたが、運良く



追い風で非常に助かりました。風を味方にして走ると超強い。
僕以外にも何人かロードバイクで走っている人がいました。

利根川沿いを走り続け、銚子にもかなり近くなりましたが、ここで面白そうな物を2つ発見。

まず一つ目が利根川第一期改修発祥の地の石碑。(写真：左)

どうやら昔の利根川は大雨が降ると洪水になるほど洪水による被害が酷かったらしく、改修工事が計画されたそうです。改修工事は河口から約200kmと規模が大きいため、3期に分けられて行われました。

石碑の第一期改修工事は1900年頃に利根川河口から現在の香取市までの工事は1909年まで行われ、現在の利根川の流路はその改修工事によって形成されたそうです。

次に二つ目は利根川治水百年記念モニュメント(写真：右)です。

1900年の改修工事から100年後の2000年に建立され、「川の流れて共に歩んだ地域の苦楽」「歴史の重み」を表現しているそうです。



走りっぱなしだったのでここ少しだけ休憩。このあと遂に銚子へ。
利根川と別れ、国道356号線を少し走りようやく銚子市に到着。片道だけで110kmぐらいいは走ってますね。

この時まだ12時にもなってないです。観光の時間が増えたのでラッキー。

とりあえず銚子に来たら銚子電鉄ってイメージが僕にはあるので、まず最初に銚子電鉄の本社がある「仲ノ町駅」に来ました。駅舎は大正二年からあり、中ではぬれ煎餅など銚子電鉄ならではの物が売られています。

銚子電鉄の電車は他社の使われなくなった中古車両を走らせている事で有名。なので昔の電車がここでは現役で活躍しています。かなり貴重。



仲ノ町駅で休憩した後は、ぬれせん発祥のお店「柏屋」でぬれせんを購入。お土産に買いましたが我慢できずにその場で数枚食べてしまいました。

かなり塩辛いけどめちゃくちゃ美味しい。今まで食べてきたぬれ煎餅の中でも柏屋のぬれせんが一番好きです。

ちなみにここ柏屋の「ぬれせん」は商標登録されています。元々は柏屋で販売している煎餅のオマケだったのだそう。



そしてメインの犬吠埼灯台。

明治7年にイギリス人技師、ブラントンという人の設計で作られた高さ32mの西洋式灯台です。近くに君ヶ浜があり、この時まだ三月でしたが良い感じに夏を先取りした気分になりました。

さて、ここから寄り道しながら帰りますが家までまだ100km以上ありますよ！

これからが本番。強烈な向かい風が数十キロかけて僕を苦しめてきます。

帰りは利根川沿いを走りません！行きと違うルートで帰ることにしました。

もう山（標高そんな高くないけど）の中を走ります。ある程度スピードが出せて順調に走れば夜 19 時台には到着できる予測をしてました。

少し寄り道して屏風ヶ浦に来ました。学校で習ったであろう関東ロームなどを見ることができます。

とりあえず自販機で買った缶コーヒーと持ってきたカロリーメイトで休憩。



屏風ヶ浦でのんびり休んだ後はもう家へ帰るのみ！さっさと帰ろうと思って頑張っ走りますが全然スピードが出ないんです。

行きの時に僕の味方してくれた追い風の強風君が、帰りでは強めの向かい風となって邪魔をしてくれます。しかもこれが数十キロも続くんですよ。

まあ走らない限り家に帰ることはできないので走り続けます。走ってる時は考える事も苦痛になるくらいしんどかったです。向かい風恐るべし。



季節的にも日が暮れるのは遅くないので、どんどん空は暗くなってきます。

そして夜になり、街灯はそんなに多くないので車のライトの光が結構ありがたい存在でした。

向かい風は走り続けるうちに徐々に弱くなり、家へどんどん近づいてきました。そして僕はもう船橋、市川辺りで葛飾に帰ってきた気分になってました。

ようやく我が家に帰ってきました。葛飾に帰ってきたの安心感は凄かったです。僕の中学生活最後のチャリ旅は無事終了しました。

走行距離は約 230km！所々計測ミスがあったりすると思いますが、どちらにせよかなり走ってますね。朝 6 時頃から夜 21 時ちょっと前なので大体 15 時間近く外出してました。けっこう頑張った。



以上で 3 月 14 日、中学卒業式の 5 日前に行った千葉県ほぼ横断サイクリングの内容は終了となります。

いかがでしたでしょうか？銚子市の有名な観光スポットに色々行けたのでかなり良い旅になりました。ちなみに帰りのきつい向かい風はあまり覚えてないですけど 40~50km 程続いたと思います。あれはほんとに辛かったです。

実は中学卒業式の翌日に友人と自転車で筑波山へ行きました。

災害に関連する内容はほんの一部になってしまいましたが、少しでも興味を持って頂けたら幸いです。

また機会がありましたらもう少し内容を災害や防災に寄せて書きたいと思います。



受動的から能動的に

小豆嶋 勇誓

東京都立江戸川高等学校

(上平井中学校 地域防災ボランティア部 部長 0B)

1. オンライン輪中会議の感想

まず初めに、今年はオンライン上での開催となった輪中会議に参加させていただきありがとうございました。中学 1 年生から輪中会議に参加させていたしましたが、今年の輪中会議は例年の輪中会議に比べ、オンラインという不慣れな状況ではありましたが、遠方にいらっしゃった方、海外から参加された方など、例年以上に多くの立場の方々からお話を伺うことができ、非常に貴重な時間を過ごさせていただきました。今回のお話をもとに、より一層勉強してまいりたいと思います。

2. 高校生としての活動、大学生になるに向けて

私の通っている高校では、総合的な学習活動として、自分でテーマを決め発表する総合学習があり、先日発表を行いました。私がテーマにしたのは、東京大学の加藤教授が提唱されている、「浸水対応型市街地構想」と、私の高校の近くに流れている川、親水公園（写真）を取り上げ、「親水と浸水」という内容を発表しました。甚大な水害被害が予想されている私たちの地域での、防災への大切さとともに、浸水リスクだけではない親水に対する考えをまとめ、この二つの共生をめざす「浸水対応型市街地構想」を説明しました。

現役高校生であり、来年大学生になる私にできることは、輪中会議や様々な活動を通して学んだことを若者の目線でとらえ、拡散し、考えを共有し、さらに幅広く活動することだと考えています。今回の発表もそうですが、こういった機会を大学生になったらより増やしていき、受動的から能動的に、自ら考え、活動していきたいと思っています。これからも、より一層みなさんとの活動を増やしていけたら幸いです。ぜひ、今後ともよろしく願いいたします。



桜の季節の小松川境川親水公園

写真の出典：江戸川区公式ホームページ
https://www.city.edogawa.tokyo.jp/e066/kurashi/kankyo/midori/50th_anniversary/ayumi.html



発表題材の小松川境川親水公園。夏は多くの子供たちでにぎわう。(撮影：小豆嶋)

江戸川区公式ホームページ「緑化運動 50 周年」特集記事より抜粋

江戸川区にはかつて、420 キロメートルにも及ぶ水路があり、農業用水や水上交通の役割を担っていました。しかし、急速な都市化により、これらの河川は生活排水の流れるドブ川と化し、環境悪化の一途をたどっていました。やがて下水道の整備が進み、治水や水利機能の役割を終える中、モータリゼーションの流れから、水路を埋立てる計画もありま



整備前の小松川境川親水公園

したが、「昔から親しんできた川が消えるのは耐えられない」との区民の強い思いを受け、昭和 47 年に「江戸川区内河川整備計画（親水計画）」を策定、この親水計画第 1 号として、昭和 48 年に日本で初の親水公園である「古川親水公園」を誕生させました。現在では 5 公園の親水公園と 18 路線の親水緑道が整備され、総延長約 27 キロメートルに及ぶ「水と緑のネットワーク」が形成されています。

引用元：江戸川区公式ホームページ
https://www.city.edogawa.tokyo.jp/e066/kurashi/kankyo/midori/50th_anniversary/ayumi.html

農業と防災の関係

増淵 桜太郎

東京都立農産高等学校

(上平井中学校地域防災ボランティア部 0B)

私は今年から農業高校に入学し今は高校で農業を学んでいますが、農業と災害は切っても切れない関係です。日本の社会資本 700 兆円の 14%が農業で占めており、東日本大震災では 2 兆円の損失となったそうです。しかし今の日本は災害、異常気象によって農業まで影響が出ている。農業は災害で発生した土壌汚染、地盤沈下、水質汚染などの影響をもろに受けるので、高齢化が進む日本で若い世代が災害対策の意識を持って、農業を守っていかないといけないと農業高校に入ってつくづく感じました。

自分が農業高校に入学した理由は、家から通いやすいのと自分の祖父が農業をしているという関係があり興味を持ったので入学しました。将来は競馬場の芝の整備の仕事の傍ら趣味で祖父の畑を継ぐのが夢です。

自分が通っている農産高校は生徒約 400 人が在学しており、園芸デザイン科・食品科が存在しています。園芸科では野菜を生産して販売、食品科では学校で味噌、お麩、パンなど発酵食品を主に地域の皆様に販売しています。



農産高校で販売しているジャムと味噌

出典: <http://syokuiku6jika.jp/archives/1208>

葛飾にも農地があるのかというご質問をいただきましたが、あるにはあるのですが、その農地は昔からある農地が多いです。自宅の近所にも畑があるのですが、そこ方も地主さんで昔から管理してるか方なので、葛飾で新規に農業を始めるのは難しいと思います。農産高校では自分たちが所有している畑があり 40,000 m²の広大な校地で農業をしております。



農産高校の第一農場

出典: <https://www.metro.ed.jp/nosan-h/>

明日に伝えるまちづくり：学校支援の現場から

南 貴久

NPO ア！安全・快適街づくり

2020 年度はコロナ禍のあおりを受け、学校支援活動も制約が大きい中で工夫して実施することとなりました。

小学校での出前授業では、普段は学年ごとに 45 分～90 分程度の時間をいただいておりますが、コロナの関係上、長時間で大人数が集まるのが難しいということで、30 分の短縮版にしたり、クラスごとに授業時間を分けたりするなど、各校で工夫していただいております。



2020 年 9 月 15 日 上平井小学校 4 年生
出前授業の様子

授業内容については、記憶に新しい 2019 年の台風 19 号（令和元年東日本台風）を題材として取り上げ、その際の上流部の決壊の状況や、葛飾区内での避難の状況などを伝えることで、より自分ごととして認識してもらえるように工夫をいたしました。

また、各学年での理科や社会科の学習状況にあわせて、授業の内容を変える工夫を行いました。例えば小学校 4 年生には理科の「雨水の行方と地面の様子」で学習した、「水が高いところから低いところに流れる」という知識を元に、荒川の水が上流の埼玉県の間部からやってくることを理解してもらったり、「砂の粒が大きい土ほど水がしみこみやすい」という知識から地下水のくみ上げによる地盤沈下の仕組みを説明したり、といった具合です。さらに、3 年生で学習する「葛飾郷土かるた」の読み札から、葛飾区のまちの特徴を明らかにする部分では、子供たちからも良い反応を得ました。

上平井中学校の地域防災ボランティア部の活動支援では、例年のように防災施設の見学や大学訪問など、現地に出向いての活動を行うことができませんでしたが、しかし、コロナ禍によりオンライン会議の環境が地域に急速に整ったこともあり、12 月には Web 会議システム「Zoom」を利用して東新小岩七丁目の中川会長へのカスリーン台風の経験談の聞き取りを行うなど、工夫をして学習を継続しました。

年度が変わって 2021 年の 5 月には、同じく「Zoom」を使った初の「Web



カスリーン台風水害点描-22歳の青年・横田貢氏が撮った渾身の記録-より



上平井中学校地域防災ボランティア部： Zoom を利用した中川さんへのカスリーン台風経験談の聞き取り

輪中会議」にも中学生の皆さんが積極的に参加してくれました。当初は第2部まで参加予定でしたが、直前に3回目の緊急事態宣言が発令されたこともあり、最初の1時間のみの参加となってしまいました。しかし、東京大学の加藤先生や荒川下流河川事務所の早川所長の基調講話に真剣に耳を傾け、さらに鋭い質問を投げかけてくれました。地域の大人たちに対して、中学生の目線から忌憚らない意見を出す姿に、多くの参加者が頼もしさを感じていたことと思います。

さらに、地域防災ボランティア部のOBである高校生の皆さんも、1年生から3年生まで、5人が参加してくれました。多忙な高校生活の中でも、地域のまちづくりに関心を向け続けてくれていることが分かり、非常に嬉しく感じました。中学生にとっても、自分たちと歳の近い先輩たちが、各方面で活躍されている姿を見ることは大きな刺激になったことでしょう。

若い世代にとっては特に、オンラインならではの参加のしやすさもあったように思います。今後も地域の世代間の縦の繋がりを維持・発展していくために、オンライン・オフラインの両方をうまく組み合わせ、定期的に意見交換をする場を設けていくことが重要だと強く感じさせられました。

以上のように、2020年度はコロナ禍により、例年とは少し違った形での学習支援となりましたが、特に小学校の出前授業については、学校側のご協力もあり、一定の質での授業を継続できたと思います。中学校の部活動支援については、もう少し地域やNPO、大学など、多様な人たちと交流する機会をもつための橋渡しができたらと思います。

コロナ禍はもうしばらく続きそうですが、むしろこの機会を生かして、オンラインも活用した積極的な学びを、小中学生のみなさんと一緒に続けていければと思っています。今後ともご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。



みなみ

2020年度の出前授業を受けた小学生のうち、南の手元にある525人の感想文から、渡邊さんの協力も得て、できるだけ多様な意見を抜粋しました♪

私が学んだことは、こう水がおきたときに元にもどるまで何時間何週間もかけていろいろな方の協力をへて元にもどっていることです。私が実際にしてみたいことは実際にこう水がおきたときの体験を一度してみたいと思いました。

この地いきがゼロメートルになった原因は最初じしんかと思いました。けど原因は地下水を使いすぎたということにとてもおどろきました。マイタイムラインもかくのがむずかしか、たけい、自分の命に関わると思ったのでがんばりました。マイタイムラインの使い方などがわかってうれしかったです。

地下水のせいで土地が低くなっている事を教えてくれてありがとうございました。実際にねんどを小石を使って、土地が低くなるか試してみたいです。



自分で実験して確かめてみると理解が深まりますね!

災害の怖さがあまり分からないので体験をしたいと思いました。3川のときはまた2才だったのでおぼえてないから地元の怖さも知りたいと思いました。

自分も、水が川のことで地いきの人にやくだちたいです。あとは家で自分ができることなどをしていこう。あと昔は家にボートがあったりするの、すっと思いました。

中川の川の囲りをぐるぐる一周走ってみたいになりました。話を聞いて、少し悲しくなったので、父がしているボランティアをしてみたいになりました。カスリーンで荒川は、人が作った水路。人が作ったが、上から下まで、べんきょうにないました。

先生のお話を聞いて、家族といっしょに、水害が起きた時のひなん場所や準備をあらためてよく考えたいと思いました。水害のおそろしさをわすれていたら、先生のお話を聞いて、思い出しました。実際に、電柱を見てまわりたいと思います。

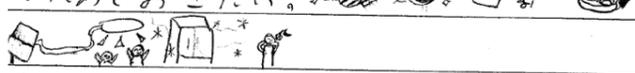


少し意識して街を歩くと、いろんな発見があるかも!

今日先生たちのお話を聞いて地下水路をくみすぎてゼロメートル地帯になったのは始めて聞いて、一番おどろきました。井戸のこともたくさんお話してくれて聞いていてとてもおどろいたり、こわいな。思ったり自然はずいと思ったり色々な感じになりました。マイタイムラインも始めて使ったり、大切なことをしり、家族にも使ってほしいと言ったりしようと考えたりして、すごくたくさんを学びました。これから、マイタイムラインなどをかたづつしたりして水害にえなえたいです。

川がはんらんしてしまうと町が水ひたひたになってすごく大変だと思った。実際に家で、台風が来たらどうするか、川がはんらんしたら家はたひたひたなのか、という話を話したり、ひなん場所、みんなバラバラにならなしたら、どこで合うかなどを決めて、災害に備えておきたいと思った。

このあたりが危険だとあまり感じていなかったけれど、大雨のときは危険だと分かった。家に太陽光パネルや保冷パックなどがあってよかったと思った。今度、あめなどを買ってためておきたい。



次の洪水とか災害はあと何年後にくるのかを知りたいです。

それならじゃんびでさるし。



避難所を持っていくもの考えるのもなかなか楽しい。

昔にあった水害などをもう調べてみたくなりました。

みんなは、それぞれどのようなたいさくをしているのか知りたいです。

どのような物があった方が良いのか知りたいです。

家族と一緒にマイタイムラインをつくりたい。高台など家が危険におったときのひなん場所も、実際に行ってみて確認したい。家が備わっているけれど家族2週間分を考えると大変だなと思った。川の方が本当に水位が高いから怖い。ひなん場所などに人がたくさん集まて入れないときはどうすればよいかを調べてみようと思います。

コロナ禍の今、重要な課題ですね。

あつ川の見なれているていぼうがながたらそこら辺がすめなくなっていたと考えるとつくるのに協力していた人達やつてくれた人達に感謝しないといけないなと思いました。

いろんなことを教えていただきありがとうございました。

先人たちの知恵と努力に感謝。次はみんなの番。

・食料をとりに行ってもそれどこにあるのか。

・荒川以外の川はどのようなふうでできたのか。

・災害がおきたら昔の人は何をしていたのか。

・家に帰ったら、避難する時の物をさかしてみたり、自分たちはどこで会うのか、どこで避難するか、電車は動くか、インターネットはつながるかなど、家族と相談してみようと思いました。

・川のどこがはんらんしたら、家がすこいことになるのか、調べたい。

・おじいちゃん家も水害が起きたらどうなるのか、知りたい。

・もともと大昔に起きた、水害を調べたい。

・カスリーン台風はものすごくよい台風でこわいと思いました。

・実際にカスリーン台風を経験した先生にお話を聞いてよかったです。

・いつか大きい台風がくると思うと、そなえが大事だということを学びました。

台風がよく聞くヘクトパスカルについて調べてみたいと思った。今、ぼくは、雲のことを調べているので、どれが、すこい、集中こう雨や、ケリラ、う雨などの雲、はかしくふる雲を、と、知りたい。船は、せき乱雲か、と思った。それ、新小岩馬尺が水つか、て、おちて、つり、り、け、

雲について詳しく調べていますね！災害が起きるときの雨雲のつき方の特徴についても調べてみましょう。気象庁などのホームページも参考になるかも。

・水害は、ひ害か、おきて、2週間も、電気、水、ガス、つかないことと、地面が100年、多いこと、は、4~5m、もし、ずん、で、しま、うことを学びました。そして、もし、水害、台風、か、ち、く、け、ま、す、前、に、ひ、な、ん、し、れ、い、せ、い、に、行、動、し、あ、せ、ら、ず、ひ、な、ん、し、よ、う、と、思、い、ま、し、た、そ、し、て、こ、の、授、業、を、い、か、し、し、ら、い、に、進、め、ま、し、た、い、です。

昨年、台風がすこく洪水が起きそうになったとき、自分の家が中川の対岸だったので、ひなんの準備をしていないひなんする場所が、まだ明確に決めていなかったため、とてもパニックになりました。でも今回、ひなん計画みたいなを書いたの、少し安心することができました。「天が我々を助けてくれるように祈ろう」と思いました。

事前に考えておくと、冷静に行動できますね。

昔おおきなじしんがきた時のことを、もっと詳しく知りたいです。平和橋しがこわれるときい、た、の、ど、ろ、が、そ、の、じ、さ、い、の、し、ら、い、を、み、たい。

地域の「自然災害伝承碑」や先人たちの記録を探して地図に落とし、体験者の話を聞いてみるのもいいですね！

・荒川は、ただ災害をひせ、て、お、め、に、つ、て、い、る、の、で、は、な、く、し、っ、か、り、エ、キ、し、て、つ、ら、い、と、思、い、ま、し、た。

・昔は、船は自動でつかないから、食料を自分たちでさがして、行、動、し、て、い、た、と、思、い、ま、し、た。

・4~5m、で、地、面、が、さ、が、ら、い、て、ひ、な、ん、し、り、し、た、と、思、い、ま、し、た。でも、ひ、な、ん、が、は、い、り、て、い、け、な、い、か、ら、じ、や、う、ぶ、な、い、と、思、い、ま、し、た。

先生たちの話を聞いて、水は身近にある、ながたら生活でなくなるから、大、き、な、の、に、ま、れ、に、水、が、あ、り、て、死、ん、で、し、ま、す、た、り、生、活、が、前、の、よ、う、に、な、ら、な、い、と、思、い、ま、し、た。ま、れ、に、水、が、あ、り、て、死、ん、で、し、ま、す、た、り、生、活、が、前、の、よ、う、に、な、ら、な、い、と、思、い、ま、し、た。

水とじょうずに付き合っていくのが大切。NPOア！や大学では「親水と浸水」と掛けている。

昔起きた災害で、おばあちゃんが生きている時代の災害があったので、今度、くわしくおばあちゃんに聞いてみたいと思いました。あと、家に帰たら家族でひなん場所のことなどを

昔、平和橋と上平井橋がこわれたのは初めて聞きました。絵の中にも、大、自、然、に、お、よ、ば、ず、と、書、い、て、あ、り、ま、し、た。災、害、は、い、つ、く、る、か、分、ら、な、い、か、ら、前、も、て、じ、や、ん、び、で、お、く、と、い、う、事、を、し、た、い、で、す。前、も、て、じ、や、ん、び、を、お、く、と、い、う、事、を、し、た、い、で、す。前、も、て、じ、や、ん、び、を、お、く、と、い、う、事、を、し、た、い、で、す。前、も、て、じ、や、ん、び、を、お、く、と、い、う、事、を、し、た、い、で、す。

先生方のお話を聞き、南講師は、少し東大の話し聞き、すごく革新的な事を、おっしゃるのが不思議で、その思いとは裏腹に、すくなく、簡単な言葉でわかりました。ケケ本先生は、しっかりと聞かすようにしゃべっていました。

楽しかったです。ケケ本先生の言は

もって聞きたいこと、自分で見れなから調べたいこと、お話を聞いてもっと知りたいこと、調べてみたいことを書きましょう。

甘風のスイカにあわれていた人が、どのように、前の生計に立ち戻ったのかや、森林火災のたいはろをを知りたいと感じました。今日は、誠にありがとうございました。

近くのひなん戸所やハザードマップ、ひなん時、必要なものなど、事前にじゅんび、調べられることはしておきたいなと思いました。

私の家にはねこもいるのでひなんじよにねこを連れていく時のことも聞いておきたいです。

私は、ペットも飼っているのですが、ひなんしないといけないときに、ペットをどうしたらいいかわかりませんでした。けれど、先生のお話を聞いて、ひなん時には、ペット専用の場所があると聞いたときとても安心しました。家には、もしものときの食べ物がないと、必要なものでようじしたいと思っています。

ペットも大切な家族。避難計画に盛り込もう！

31人の小情報を知れようが、インターネットがなければならぬと、おもしろいと思いました。

また、水が止まった時に、食料がなくなると、おもしろいと思いました。

水害についてとても詳しく知れました。ありがとうございました。

たれが、あつ川をつくらう!と云ったのか、そして、たれが、そのアイデアを考えたのかを調べています。とんで、あつ川をつくるのに費用がかかったのか、産卵の時は「習習習」とか、調べたいと思います。(他にもあつ川について調べたいと思います)

「荒川知水資料館」にもぜひ行ってみてください!

今日の話は、「ハードマップ」が大切だといっていて、あつ川は、本で調べたい、もうみなくなるから、アサヒくんを、ついでに、あつ川と、思いました。

「天サイ!まなぶくん」も生かしてね!

実際にもものすごい大雨が来て、川がはんらんしてしまつたら、かつしか区は大変なことになってしまうということがよくわかりました。土地の低いところに住んでいるから、水害について考えることがたくさんあるんだなあ、とよい勉強になりました。

もしも水害が起きたら...という想定で、どう行動をとればよいか、などをしてみたいです。

どこにひなんすればいいか、ハザードマップを頼りに区内などをさんさくしたいです。

・上小には、約300人がおんしてきて、つづらに台風がきたら、学校のろくほくの高さまであること。

・家に戻ったあつ川のこと。(おん中)
・最近、新型、コロナウイルスで、そこにひなんできないかもしれない!

防災グッズの準備をしたほうが、いいこと。水害のこおつ。台風も甘くみでは、いけない。

二上のおまつりで、プールの戸所に、水害の時のたいけん、のよなものがあつたので、どのよな感じなの、か一回やってみよう。

ぼくもボート体験をしてみたい!

先生のお話を聞いて、今から73年前の水害のことで、なにかわしく鮮明にわかりました。

平和橋がこわれてしまつたり、家の中にも水が入ってきたことなど、侵水が起つてしまつたときの大変さ、心配な気持ちが私にも伝わりました。

もしも、3m、5mほどの水がきたら、私はおぼれてしまうなど、思いました。私は、もしも身の回り、水害が起つたら、その場で冷静になって、的確な判断、物をわすれず、取りに帰らないなど、かてできるようにがんばります。

もしも、侵水などが起つてしまつたときに、「家にいる、か」「ひなんする、か」と判断すればいいんですか?

さらに、家にいても、水が家の中に入つてきたときに、「外に出る、か」といいんですか?

それとも、「家にいる、か」といいんですか?

水害がきたときの、的確な判断、などを、よくわしく、調べて、水の災害の、種類なども、もう少し、知りたいです。

究極の決断をしなくていいように、早めの判断が重要!

ぼくは、ふつづに、なると、土地が、低いたつら、思つて、いたけど、こまにおくが、る、か、いは、思つても、いませんでした。

やってみようとは、台風の、たいさくです。いままで、台風の、ひ害が、ちいさか、たか、ら、そんなに、きに、しなかつた、けど、ちがう、ところでは、とても、ひが、い、が、大きかつた、ので、とても、びっくり、しました。

上流・下流の関係性についても学ぼう!

わたしは、マンションの1階にすんでいて、上の階の人を全然、あつらな、いので、知つて、そこに、水害が、あつたら、ひなん、したいです。

水害で、救済物資を、運んだり、するのは、大変、だから、地域の人、た、を、か、れ、あ、つ、せ、る、な、と、いう、こと、が、必、要、と、いう、こと、が、あ、つ、て、新、小、岩、地、区、は、過、去、に、大、き、な、水、害、を、あ、つ、て、い、る、から、その、水、害、を、あ、つ、て、み、たい、です。

「天サイ!まなぶくん」というアプリを使つて、みた、な、と、思、い、ま、し、た。そ、し、て、こ、ま、ま、で、こ、う、水、で、水、か、く、る、の、か、を、し、て、み、た、い、と、思、つ、た。水は、色、な、め、く、み、が、あ、つ、て、水、は、時、に、は、こ、れ、に、も、あ、つ、る、ん、だ、と、思、つ、た。今、回、の、で、分、か、つ、た、の、は、こ、う、水、が、起、つ、た、時、に、は、電、気、も、止、ま、る、か、ら、そ、の、た、く、さ、を、あ、つ、て、お、く、と、い、い、う、こ、と、で、す。

「天サイまなぶ君」で、自分の家は、大、丈、夫、な、の、か、親、せ、き、は、平、気、な、の、か、を、し、たい。

・川に関するイベントに参加したい。

水に親しんで、川のことをよく「知る」っていいね!

私の家では、まだ、水害の、た、く、さ、を、し、て、い、な、い、か、ら、と、て、も、あ、つ、た、い、と、い、う、こ、と、が、分、か、つ、た。

私の家には、犬が、い、る、し、お、は、あ、ち、お、ん、と、お、じ、い、ち、お、ん、も、い、し、よ、に、す、ん、で、い、る、か、ら、と、く、に、気、を、つ、け、な、い、と、い、け、な、い、と、思、つ、た。

学校のひなん訓練、た、け、で、な、く、体、育、館、で、お、た、り、する、訓、練、や、水、を、使、つ、て、プ、ール、で、水、害、訓、練、を、し、たり、ひ、ん、ん、を、た、い、て、作、り、方、を、あ、つ、たり、家、族、の、安、全、を、守、る、た、め、に、す、る、べ、き、こ、と、を、こ、の、じ、ぎ、ょう、で、く、わ、く、知、る、こ、と、が、あ、つ、た、し、こ、の、か、つ、し、か、区、は、低、地、な、の、で、川、の、は、ん、らん、が、大、変、な、こ、と、が、あ、つ、た、の、で、身、の、回、り、の、あ、つ、た、い、物、か、た、物、は、は、か、ー、や、箱、に、入、れ、て、お、た、り、し、て、い、たい、と、思、い、ま、す。

楽しくて実践的な訓練を考えて、提案してみよう!

「天サイまなぶくん」というアプリがあると、き、い、て、面、白、い、と、思、い、ま、し、た。実、際、に、イ、ン、ス、ト、ラ、ル、し、て、み、たい、です。

私の家は、弟兄が3人で5人います。なので、マイタイムラインが3つもあります。ですが、一つしか使っていませんでした。今まで私は、マイタイムラインなんて使わな〜と思って、ましたが、自前に作っておくことで、家族の命、ちきの人命を守る事があつたので、今度作ってみたいのです。

家族でも1人1人の「マイ・タイムライン」を!
かつしかの土地がさがしてしまつたのは、地下水を、取りすぎたこと聞いて、どなたか下から、つたのかと、実物で見ても、思ひました。その当時の中学生の角解説文も読んでみたいと思ひました。

東京都第五建設事務所保存されている「古井戸」。上平井中生が作成した説明板もあわせて見てね!

身を守るアプリがあることをしりました。新小岩で雨がふつていなくても、荒川の上流の方に、ある埼玉の方で、つたらしい。日後に川がはんらんすることあることを知りました。

「晴れていても川の水があふれるかも」と学びました。天気予ほうは、関東全体を見ておこうと思ひました。

広い範囲の天気予報や水位・潮位にも目を向けよう!

先生や、ちきの人から、自分か、ずんで、いる所は、さいか、いかおきて、しまつた。どこに、に、け、れ、は、よいのか、どこに、を、話、さ、した、ら、よいのか、その、に、け、る、場所、は、自分、の家、から、何、れ、は、な、れ、て、い、る、のか、など、を、自分、で、考、え、た、り、人、に、聞、い、たり、して、お、ほ、え、て、お、き、たい、思、ひ、ま、し、た。

昔とかわつて、人の手で、あ、ら、川、が、つ、て、ま、ん、く、ん、と、思、つ、た、け、れ、ど、ま、だ、あ、ん、せ、ん、で、は、な、い、と、い、う、こ、と、が、先、生、の、話、を、聞、い、て、よ、く、わ、か、る、こ、と、が、あ、つ、た。ま、た、ほ、う、さ、り、の、く、ん、を、こ、の、ち、き、の、人、と、い、は、に、つ、た、り、く、て、こ、の、あ、つ、き、の、こ、と、に、ほ、う、さ、り、に、そ、な、え、たい、と、思、ひ、ま、し、た。

葛飾区特有の文化など
その水害を受けた人たちの経験や、どうやって水害から逃げたか、などを聞かせてほしいと思ひました。今ではその経験などを忘れてしまつた人たちが、ほ、く、た、ち、に、は、と、も、必、要、な、情、報、で、は、な、い、か、と、思、ひ、ま、し、た。

特有の文化や経験を伝承することは大切です。

「めんがふ、かいこと」の理由は、知れただけでも、とくわ、く、し、り、たい、い、昔、の、人、は、さ、か、い、を、ど、う、思、つ、て、い、た、の、か、(い、や、ま、の、と、か、じ、な、く、て、例、こ、わ、い、も、の、強、い、物、な、ど)が、あ、つ、た、い、たい!

天才まふくんをいれて、いつでもそなえられるようにしたいと思ひました。あ、ら、川、の、水、が、か、つ、か、区、の、水、で、は、な、く、て、ほ、か、の、区、の、山、の、水、だ、と、思、つ、て、お、く、り、ま、し、た。

2週間分の水や食料を、買、つ、て、お、こ、う、と、思、ひ、ま、し、た。守、る、こ、と、だ、け、で、は、な、く、て、に、づ、る、こ、と、も、大、切、だ、と、学、び、ま、し、た。

かつしかのカルタに書いてあることは、ほんとうだ、た

郷土かるたは地域のことを知るのに便利だね!

かつしか区、の、危、険、が、あ、る、所、を、調、べ、災、害、の、た、め、の、町、探、検、を、し、て、み、たい、と、思、ひ、ま、し、た。

私はこれから日本の災害の歴史について学びたいです。なぜなら、過去の災害を知ることで、次に生かせると思ひ、た、か、ら、で、す。ま、た、台、風、な、ど、が、あ、つ、た、時、に、必、要、な、物、を、と、り、か、か、く、に、し、て、完、全、に、し、て、お、き、たい、で、す。

私は、先生のお話をきいて、早く、れ、い、せ、い、に、行、動、す、る、こ、と、が、大、切、だ、と、分、か、り、ま、し、た。家、族、の、た、め、に、も、自、分、の、た、め、に、も、早、め、に、ひ、ん、ん、す、る、か、サ、バ、イ、バ、ル、生、活、を、し、た、ら、い、い、と、分、か、り、ま、し、た。マイタイムラインを、家、に、か、え、た、ら、お、家、の、人、と、は、な、し、た、い、と、思、ひ、ま、し、た。

こうかい、な、い、さ、り、さ、り、の、水、面、は、何、メ、ー、ト、リ、だ、ら、う、と、思、ひ、ま、し、た。こ、う、かい、の、せ、い、で、ほ、か、に、も、さ、け、ん、す、る、こ、と、が、あ、る、か、知、り、たい、で、す。

「氾濫危険水位」などを調べてみましょう。

ほ、く、た、ち、は、日、青、え、い、て、も、ほ、か、の、県、か、ら、川、の、水、が、か、つ、ま、け、ん、と、い、う、こ、と、を、お、話、し、て、ま、し、た。2、週、か、ん、も、電、気、が、か、さ、水、道、が、つ、か、え、な、く、な、る、と、大、変、な、の、で、し、り、た、り、さ、く、を、し、た、き、り、き、な、り、と、思、ひ、ま、し、た。0、の、せ、い、だ、り、は、最、初、か、ら、あ、つ、て、い、る、と、思、ひ、ま、し、た。か、つ、か、い、ろ、う、あ、つ、て、作、ら、ま、た、物、を、い、り、ま、し、た。

早、め、に、ひ、ん、ん、す、る、こ、と、を、実、際、に、た、ま、し、て、み、た、ら、い、て、あ、つ、た、水、害、に、あ、つ、て、い、る、こ、と、を、し、た、ら、い、て、お、き、たい、で、す。

家族と早めの避難の練習をしてみましょう!

先生が、い、た、昔、の、井、戸、昔、の、工、地、の、高、さ、が、分、か、る、所、を、い、つ、て、み、たい、で、す。ま、た、な、ぜ、葛、飾、区、が、セ、ロ、メ、ー、ト、リ、地、帯、に、な、つ、た、の、か、と、い、う、の、で、地、下、水、を、く、み、す、ぎ、た、か、ら、と、い、う、の、に、お、ど、ろ、き、ま、し、た。先、生、の、お、話、が、と、も、開、き、や、す、く、て、よ、か、つ、た、で、す。

8、月、だ、か、ら、た、い、じ、ょう、だ、と、思、ひ、ま、し、た。二、次、災、害、は、か、ば、い、と、思、ひ、ま、し、た。二、次、災、害、は、い、ろ、う、な、所、に、あ、つ、た、と、思、ひ、ま、し、た。水、を、く、み、す、ぎ、た、ら、地、面、が、下、が、つ、た、ら、い、い、な、ら、う、と、思、ひ、ま、し、た。

葛飾区は、少、し、水、害、が、あ、つ、た、と、思、ひ、ま、し、た。今日、学、ん、で、葛飾区は、色、な、い、水、害、に、あ、つ、た、と、分、か、り、ま、し、た。新、小、岩、は、い、ち、く、び、を、台、風、が、く、る、ら、く、前、に、し、て、お、き、たい、で、す。葛飾区は、い、ち、く、び、を、し、た、ら、い、い、と、思、ひ、ま、し、た。次、台、風、が、あ、つ、た、ら、い、ち、く、び、を、大、切、に、し、たい、と、思、ひ、ま、し、た。

何事も早め早めに準備をすることが大事ですね。

ハザードマップや、茨城(学ぶくん)のアプリを、も、つ、て、活、用、し、水、害、に、そ、な、え、て、命、を、守、る、順、備、を、し、た、ら、い、い、な、と、思、ひ、ま、し、た。

ま、た、葛、飾、区、が、作、つ、た、青、色、の、冊、子、を、学、校、で、配、布、さ、れ、た、時、母、親、や、父、親、に、言、つ、た、か、な、に、も、反、応、が、な、か、つ、た、の、で、も、と、せ、と、く、力、の、あ、る、話、し、方、を、し、て、今、ま、で、や、つ、た、ら、い、い、と、思、ひ、ま、し、た。

大雨の時期に、家族と話してみるのもいいですね。

先生のお話を聞いて、私は、実、際、に、荒、川、の、上、流、へ、行、き、たい、で、す!

家族と荒川の土手を、あ、つ、て、歩、い、たり、ダ、ム、や、調、節、池、を、見、学、し、て、み、た、り、す、る、の、も、勉、強、に、な、り、ま、し、た、と、思、ひ、ま、し、た。

■ 出前授業講師を担当して —私自身の学びも多く—

岸田 暁郎 (株)日本能率協会総合研究所

令和元年に引き続き、令和2年12月12日、新小岩北地区連合町会の中川会長と二上小学校5年生を対象とした出前授業の講師を担当いたしました。

今回は、「自らの命は自ら守る！！大規模水害 あなただったら、どうする？」をテーマとし、主に水害時に想定される浸水深と自宅の階数の関係から、避難行動をどのようにとるか考えてもらうワークを取り入れてみました(右図参照)。

さて、毎回、授業の度に驚かされるのは、児童のみなさんが、地域の地形や水害リスクについてよく認識

している点、また、どのような避難行動をとるべきか、理解度が高い点です。これまでの地域の関係者のみなさまが築き上げてこられた活動の賜物だと頭が下がります。こちらは、児童のみなさんが退屈しないよう、冷や汗をかきながら授業を行うとともに、少しでも気づきのある授業にするにはどうするか、試行錯誤の連続です。一方で、私自身の学びも多く、また機会がありましたら、ぜひ参加させていただきたいと思えます。

■ 新小岩北地区近隣小学校への出前授業(外部講師)を終えて

竹本 利昭 東新小岩七丁目町会

私は、2016年度より近隣小学校の児童に向け災害、特に水害についての出前授業を行って参りました。

葛飾区、新小岩地域は水害に弱く、何らかの対策をしておかねばならないとの啓蒙活動を主に児童達に話して参りましたが、子ども達の知識欲、吸収力の高さには目を見張るものがありました。

こちらからの投げかけに対し、一歩も二歩も発展した考えを述べる子ども達に頼もしさを感じる事もありました。

東京都策定の「東京マイタイムライン」を活用した授業では、より具体的に水害をイメージする事が出来、子ども達から保護者へそして地域へとその意識が広がっていく可能性を確信し、やりがいのある事業に関わる事が出来た事に喜びに繋がりました。

本年、私的な事情によりその任を辞する事となりましたが、後任の菅野講師に託し、新小岩の水害対策の意識向上に取り組んで頂きたいと願っています。

葛飾、新小岩の未来に向けて。ありがとうございました。

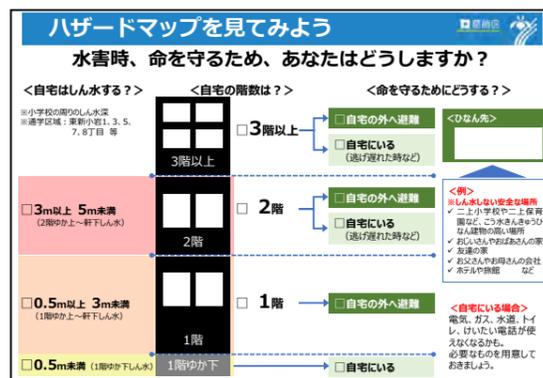


図 浸水深と自宅の階数から避難行動を考える

まちの歩みから「まちのあり方」「まちのフォルム」を学び伝えること

寺島 玄
あらかわ学会

ここ数年来、二上小学校、松上小学校で出前授業の機会をいただいている。授業では主に新小岩北口地区の歩みをお話ししている。同地区の歴史は教材に取り上げられることもまれであり学ぶ機会も限られていることだけでなく、そこで暮らしてきた人たちの「あり方」を知り、「土地の持つ力」を今後の地域活動にいかしてほしいと思うからである。

紙面の範囲で同地域の歩みを記すとすれば、同地では近世来、湿地帯での稲作を主体とし、副業で飾りやフノリ(盛期には全国の約9割のシェアを占めた)を産出していた。大正後期に荒川開削による残土を利用することで土地が造成されると、都心からセルロイドをはじめとする工場が進出した。昭和3年新小岩駅が開業し、翌年、帝都都市計画で工業地域に用途指定されると駅北口には大工場(理研鋼材、軍用機機体等を製造)が設立された。戦後、戦禍を免れたことで都心部や地方から多くの人が入り。そこに昭和22年カスリーン台風が襲来し、新旧住民同士が避難~復興と諸活動に携わり、以降度々の水災体験を経て相互の連帯を深めていった。高度経済成長期にはスプロール化の渦に呑み込まれ、人口過密地帯となったが、昭和45年以降公害防止条例の施行を契機に工場の郊外移転が始まり、跡地には高層住宅、公園、学園等ができ景観も住む人も様変わりし今日に至る。

街は一変したとはいえ災害リスクは変わらない。だが、それに備える防災・減災活動も今に引き継がれ同地に息づいている。

同地区の防災・減災活動は、高い評価を得ている。もちろん携わる人の労苦の賜ではあるが、まちの歴史をひも解くといっそう納得がいく。例えば、農閑期のフノリづくりや主軸産業のセルロイド業では内職・パート・季節労働者など多様な人たちを取りまとめ集約するフレキシブルな人海戦術がとられる。ことセルロイド業では、金型、成型、彩色、梱包…などの工程が協働される(「水平的分業」)。「多様な人たちを取りまとめるフレキシブルな人海戦術」「協働作業」、それらはいずれも防災・減災活動のキモである。一例をあげたに過ぎないが、私には今日の同地区の防災・減災活動がこのような土地の人々のあり方・フォルムに支えられているのだと思われてならない。それらは形無きものゆえ見落とされがちだが、無形なればこそ時空を超えて地域に暮らす人たちに通有しうる力になりうると私は確信している。

地域の方々から学ぶ

渋谷 英一

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校長

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校に赴任して、8年目に入りました。

5月9日（日）には、オンラインで輪中会議が行われました。自宅から参加させていただき、時間を有効に使うことができました。

加藤先生から、「市民先行、行政後追い。」というお話がありました。本校の避難所運営の取組を見ていると、まさに、この通りです。

本校は、3年前から、毎年、避難所運営訓練を実施しています。昨年度は、コロナ禍で、実施は難しいかと思いましたが、地域の方は、この状況だからこそ、訓練を行わなければならない、とおっしゃられました。大地震が起きて、多数の方が避難所に集まったら感染爆発が起こる、と指摘されました。この危機感をベースに、感染対策を意識した避難所運営訓練を11月1日（日）に実施しました。事前受付で、一般避難者と発熱・濃厚接触者とに分け、その後の動線が重ならないように、避難者を誘導する訓練を実施しました。区の防災課もこの訓練を支援し、その後、本校の訓練を区内に紹介する取組をすすめていました。まさに、「市民先行、行政後追い」の形でした。

課題は、この訓練が地震想定であったことです。水害想定だと避難の仕方が大きく変わります。地震では、体育館への避難が中心ですが、水害では、三階への避難になります。また、本校の避難所の地域割りは、新小岩第六自治会、都営一丁目団地、二丁目団地の方々です。都営の方々は、高層の建物の方が安全なので、学校には避難しません。また、第六自治会の方々も、川に向かって避難する気持ちにはなれないのでは、と思われまます。一昨年台風の際に避難されてきたのは、西新小岩三丁目、四丁目の方々でした。地域割りを含め、水害対応が課題です。

輪中会議にかかわる学校の取組としては、寺島玄様による6年生向けの講演会、また、3年生5年生対象の防災学習を継続しています。寺島様の新小岩地域の歴史のお話では、この地域の方々には水害に悩まされながらも、たくましく生き抜いてきたことを語ってくださっています。3年生5年生の学習には、地域の竹本さん苜野さんとNPOの南先生、増澤さんが来てくださり、「東京マイ・タイムライン」を活用した有意義な学習が進められています。

これからも輪中会議で学ばせていただいたことを土台にして、本校としての、自然災害への取り組みを充実させ、児童、保護者の意識を高めていかなくては、と考えております。



地域から



うらら保育園の入っている建物全景
(象設計集団 Web サイトより)



うらら保育園 遊びの風景
(象設計集団 Web サイトより)

「取材」を通して気が付いた共助の大切さ

山岸 朋子
かつしか FM レポーター

私は葛飾区で生まれ育ち、現在も区内で子育てをしながら生活をしています。かつしか FM のレポーターという職業を通して、様々なことを学んできました。独身時代はお店や街頭でインタビューをしてきましたが、出産後、ご縁があり再びレポーターとして復帰することになりました。ただし以前とは違い、防災に特化したレポーターでした。その時初めて「防災」に真正面から向き合うことになりました。

それまでの私は「今」を生きることで必死でした。いつ来るのか、来ないかもしれない「災害」について考えると、結局いつも「防災」は後回しになっていました。しかし防災レポーターとして葛飾区や町会、災害弱者のいる施設など様々な場所で取材を重ねるうち、防災の重要さに気が付きました。いつ来るのかわからない…けど災害は起こるリスクが必ずあります。災害は命を簡単に奪ってしまうもの。しかし、災害が起こる前にちょっとした一工夫で命を守ることが出来るのだと学びました。

また私自身取材を重ねているうちに改めて感じたことは「共助」の大切さでした。顔見知りや身近にいることは、災害が発生した際、とても大きな心の支えになります。今の時代は昔に比べると「ご近所付き合い」というのは少なくなってきた印象があります。しかし、お互い顔を知っているだけでも、挨拶程度の付き合いであっても、なにかあった時には顔を合わせるだけで安心出来る上に、助けを求めやすいと思います。子育て世代が地域での活動に積極的に参加してもらうため、防災意識を高めてもらうためには、些細なきっかけが大切だと思います。

私は現在地域で活動している方々と子育て世代の橋渡しの役割を果たしたいと考えています。平常時でも困ったことは助け合える「日常から共助」できる関係が生まれれば嬉しく思います。

また私自身、これからも取材を重ね多くの方々に様々な情報を発信すると共に、自分自身が住んでいる地域で活発に活動をしていきたいです。

第 14 回 Web「輪中会議」参加と私の活動

久保 欣一
NPO ア！安全・快適街づくり 会員

私は会員としての輪中会議参加は 2 度目ですが、今回の「輪中会議」に参加して感じたことと、防災・減災について取り組んだことを述べたいと思います。

☆第 14 回「輪中会議」に参加して…2021 年 5 月 9 日（日）

コロナ禍の今回の「輪中会議」は、Web（オンライン）で行われましたが、私は会場（新小岩北地区センター）参加にしました。

第 1 部は加藤孝明東大教授の基調講演「浸水対応型市街地×流域治水×コロナ」。非常に良い講演でした。第 2 部「多様な活動報告と意見交換」では、地域、小中学校、大学、行政、企業、NPO、参加者から活動報告が出されました。第 3 部では、「SDGs をみてる」「ジェンダーと防災、参加者の多様化」など、旧来の知識ではなくいま求められている考え方を示され、たいへん刺激的でした。今回はオンライン会議ということでしたが、素晴らしい会議になったと思います。

☆私の活動この 1 年

このコロナ禍で、一堂に集まるには大きな課題がありますが、昨年、葛飾三田会副会長の 大里純弘氏と協働して講演会を企画しました。感染防止に細かく配慮して、参加者全員に体温計測とマスク着用をお願いし、フェイスシールドを全員に無料配布して実施しました。

- ① 講師 中川栄久東新小岩北地区連合町会長「カスリーン台風経験者が語る—『大規模災害を経験し、学び、備えて、70 年』」 9 月 5 日（立石図書館）
- ② 講師 南貴久研究員（東大・加藤研究室）「葛飾区の水害に学ぶ若き研究者が語る—『大規模水害の情報・対応について』」 9 月 19 日（立石図書館）

私は公募による「区民大学区民運営委員」を 6 年間務めて、その間何回か、防災・減災の講座も提案・企画しました。この 1 年間に実施した講座を紹介します。昨年の 2 月 11 日、片田敏孝東大大学院特任教授による講演会「大規模水害から命を守ろう」を開き、金町地区センターに約 190 名の大勢の方に参加いただき大盛況でした。今年の 2 月 13 日（堀切地区センター）と 3 月 6 日（新小岩北地区センター）に、「大規模水害から命を守るために」をテーマに「わが家の水害対策 初めての“マイ・タイムライン”」の講演とワークショップを実施し、大勢の方に参加していただきました。「ただ話を聞くだけでなく、実際の災害を想定してのマイ・タイムラインの作成は有効な方法だと実感しました」「行政と区民がこうしたやり取りをして避難計画が深まっていくのもこうした演習の結果ですね」などの感想がありました。

私は、「自分の命は自分で守る」ことをいつも意識し、地域の皆様と繋がり、行政の施策を理解してしっかり取り組んでゆきたいと思っています。

輪中会議に初めて参加して・・・

濱野 祐子
上小松町会 総務部広報

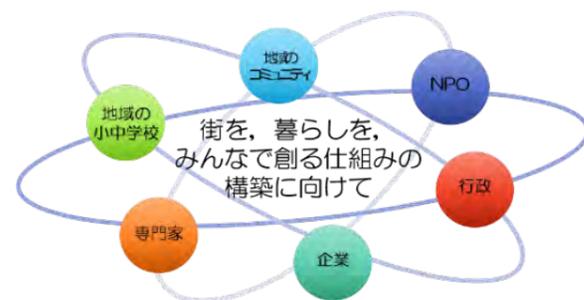
輪中会議に初めて参加しました。防災について今回まだまだ勉強中で、単なる感想になってしまいますが、(味の素の齋藤さんがおっしゃっていた)「からだは自分が食べたものでできている。やらなければいけないとわかっているけど、後で後悔することが多い。」という言葉や「<食>も<防災>も同じ。いかに興味を持ってもらうかが大事。」という言葉には「はっ！」とさせられました。自分の身体を見つめなおしている今、「防災についてもっと勉強しよう」と思える言葉でした(膝痛からの現在ダイエット中)。

また「このコロナ禍でも災害は待ってくれないので、コロナ禍でできる最低限の災害訓練が必要だ」という言葉にも納得。

「密になっちゃいけないから訓練しない」のではなく、どうしたら密を避けて訓練できるか、このコロナ禍でもし災害が起こった時、どうすればよいか、を真剣に考えなくてはいけない、と改めて思いました。

折しも「新小岩講演再整備に関する検討会」に「一般公募」で参加させていただいているので、いろいろ考えるきっかけになりました。

ありがとうございました。



経験を共有し、地域の未来を語ろう。

こんな時に始めるなんて fuku lab

鈴木 ひろみ
スズキのデザイン

2年を迎えたコロナ禍の相次ぐ緊急事態宣言を繰り返す中で、みのり商店街にある閉店した実家(元メンズ洋服店)にも足が遠のいている。店の手直しをして帽子製作の作業場と、ご近所の方が集える場所にと何年も前から思案していたのだが、暗礁に乗り上げ時間が止まったままです。

そんな折今年の夏に、前からお店の相談をしていたコミュニティデザイナーの方から、チャリティショップに出展してみないとお声かけ頂き、秋に浅草橋の「東東京市」(<https://note.com/loiduts/n/n1ffe0bad4ace>)ロイダッツチャリティショップ(<http://loiduts.studio-1.org>)に参加した。不要になった服を回収して格安で販売し、その売上の一部をがん患者さん・ご家族が利用できる施設、マギーズ東京さん(<https://maggiestokyo.org>)に寄付するというプロジェクト。店の品や私服、帽子の試作品等を寄付しながら、余り布を使って雑貨を製作販売しました。

すっかり時代遅れになった店の在庫品を「アップサイクル」という考え方で再利用し、薄利でも店を維持する一部になればと、頭の中でずっと考えていた。コミュニティツールとしてそれらを使い、地域の方と何か関係ができるようなものになればと思っていた事を、実際に実践している人達と繋がれたご縁の不思議さにびっくりしている。

いまだ不明の東京五輪の時期だが「東京ビエンナーレ」というアートイベントも都内各エリアで予定している。その一部昨年と同じ浅草橋で今年も参加協力することになり、不安を抱えながらも準備に追われている。

生涯学習や趣味で知り合った手先の器用な有志や、子育て卒業、仕事もひと段落、介護の息抜き、脳トレに、もの作りで表現したい人生のベテラン女史が少しずつ集まってきた。

アップサイクルをメインテーマに、昨年「fuku lab (ふくらぼ)」を立ち上げた。元「フクイ洋服店」の服、一服の意味も、ラッキーと幸いの福も込めて。コロナの時期にスタートを切り、今は何もかもドタバタするばかり。本当に小さな歩幅のよちよち歩きだが、続けて行けたらと思っている。

眠っている瀕死の店と洋服達と、それらを楽しんで変身させる手しごとと上手な仲間と関わっていきたい。あとは SNS の得意な方とお知り合いになれば。

編集部より

新小岩から世界へ！荒川の土手が原点になった金メダル🏆
—東京オリンピック柔道男子 100kg 級 ウルフ・アロン選手—

2021年7月23日から8月8日まで行われた東京オリンピックで、葛飾区新小岩出身（小松南小学校卒業）のウルフ・アロン選手が柔道男子 100 kg級に出場し、金メダルを獲得しました。

ウルフ選手は、中学校時代に荒川の土手を毎朝走ってスタミナをつけていたそうです。また、オリンピック期間中は地元の人たちの応援が力になったと語っています。

まさに、「新小岩から世界へ」。新小岩の水辺空間と地域の人々の温かさが生んだ金メダルと言えますね！



葛飾区を表敬訪問するウルフ・アロン選手（葛飾区ホームページより）

ウルフアロン選手「葛飾の土手がスタミナの原点」

東京オリンピックの金メダリスト、柔道のウルフ・アロン選手が10日午前、出身地の東京・葛飾区を訪れ「中学生の時に葛飾の土手を走ったのが、スタミナの原点」と話しました。

柔道男子 100 キロ級金メダル、ウルフ・アロン選手：「一番、応援してくれたのが地元、葛飾区新小岩や、出身小学校の方たちだったので、早いタイミングで金メダル銀メダルを持って、あいさつに来られたのは良かった。（中学時代に毎朝）荒川の土手を 10 キロぐらい走って、それから学校に行くようにした。それが僕自身の（ウルフタイムと言われる）スタミナの一番最初の原点だったのかな」

午前 10 時、オリンピックの個人と団体に獲得した金メダルと銀メダルを首に掛け、葛飾区役所を訪れたウルフ・アロン選手は葛飾区の新小岩出身で、中学時代は都内の学校に通いながら柔道に励んでいました。

今後は柔道教室などを開いて、子どもたちに柔道の魅力を伝えていきたいと話しました。

テレ朝 news (https://news.tv-asahi.co.jp/news_society/articles/000225039.html) より引用

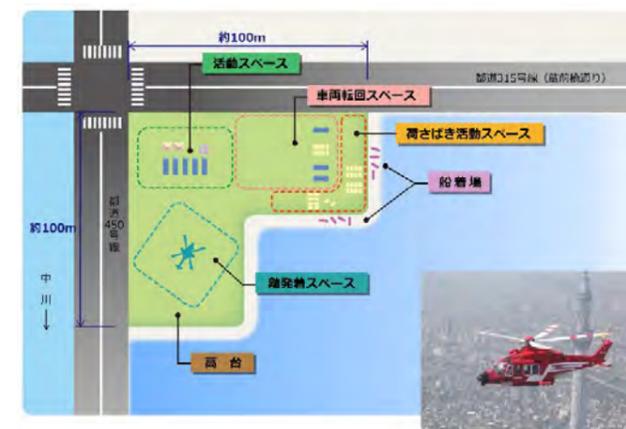


1960年代の浸水対応型建築：現・葛飾区総合庁舎（JA+U ホーム ページより、本誌 24 号表紙ウラも参照）

行政から



浸水対応型拠点建築物への建て替えが完了した小松中学校



水害時の受援拠点のイメージ

川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けて（4）

情野 正彦
葛飾区 都市整備部

新型コロナウイルスの感染拡大から1年以上が経過し、本区においても、3月から医療従事者、4月末からは高齢者へのワクチン接種を開始しました。

一方、3回目の緊急事態宣言が出されるなど、いまだに先の見えない状況が続いています。

川の手・人情都市「かつしか」の実現に向けた取り組みである「浸水対応型市街地構想」については、昨年紹介した「小・中学校におけるモデル的な取り組み」となる小松中学校の建て替えなどが完成するなど、一歩ずつではありますが、確実に進捗をしています。

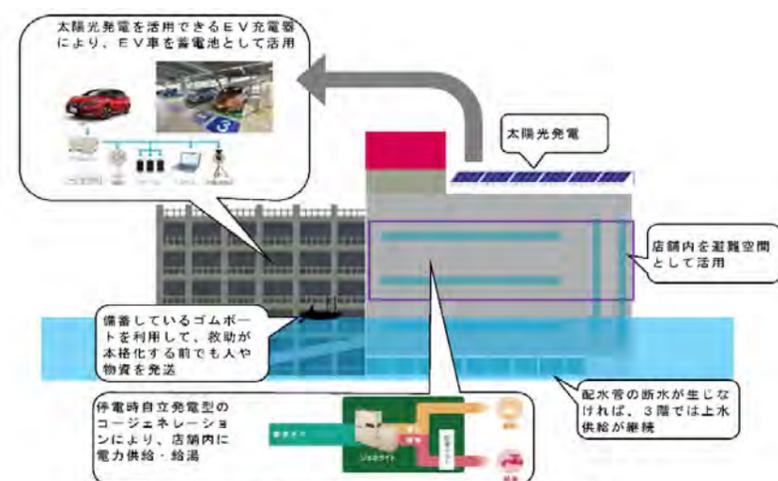


建て替えが完了した小松中学校

今回は、昨年度に取り組んだ「民間建築物の浸水対応型拠点建築物への誘導」と、新小岩公園での「浸水対応型拠点高台」の取り組みについて紹介します。

民間建築物の浸水対応型拠点建築物への誘導に向けた検討では、小・中学校での検討でのノウハウを基に、その施設個々の持つ特徴を活かし誘導できるよう検討を進めました。

例えば、図1に示す大規模小売店舗では、立体駐車場が併設されているものが多く、最近ではEV車用の充電施設を備えたものが増えてきています。そこで、立体駐車場を避難場所にするだけでなく、EV車を蓄電池として活用し、電力供給をすることなども、検討を進めています。区としては、今年度制度構築を図り、令和4年度から、共同住宅や大規模小売店舗へ



（図1）大規模小売店舗での浸水対応策のイメージ

の助成事業をスタートしたいと考えています。

次に、新小岩公園での取り組みについてです。

新小岩公園の再整備については、令和元年に「新小岩公園再整備検討会」を立ち上げ、新小岩公園再整備基本計画の策定に向け取り組んでいるところで、大規模水害発生時の活動拠点となる配置イメージ（図2）が固まっています。

活動スペース	▶ 各機関からの応援を受け入れる活動スペースとしての利用
車両転回スペース	▶ 緊急時の輸送・搬送車両の駐車や転回のスペースとしての利用
荷さばき活動スペース	▶ 受け入れた物資や資機材の荷さばきや一時保管の活用スペースとしての利用
船着場	▶ 洪水緊急避難建物や自宅の2階以上などの避難者を対象とした二次避難（搬送）や物資供給（輸送）をポート等で行うための船着場としての利用
離発着スペース	▶ 救助・救出・搬送活動を行う各機関のヘリコプターの離発着スペースとしての利用

▲ 物資輸送演習
出典：関東地方整備局
平成30年度 阿部町下町並み改修事業実施報告書
(平成30年11月9日、荒川ロックゲート前)

▲ 自衛隊の活動状況（人命救助、孤立者救助）
出典：防衛省、自衛隊
令和元年台風19号に係る災害対応

◀ 東京消防庁「ちどり」
出典：東京消防庁

（図2）水害時の受援拠点のイメージ

今後、各グループが作成した平時の活用を含めた全体ゾーニング（案）について意見交換し、一つの案にまとめていきます。

最後に、災害に強い首都「東京」形成ビジョンについてです。

これまで紹介した浸水対応型市街地構想などは、本区単独での取り組みでしたが、昨年の12月に国と東京都から、「災害に強い首都「東京」形成ビジョン」が公表され、本区の取り組みがモデル地区となり、国、都と連携し検討を進めることが決定しました。

区としては、このことを契機として、民間開発などに合わせ、浸水対応型拠点建築物の誘導がより促進するよう、取り組みを強化していきます。



（図3）災害に強い首都「東京」形成ビジョン

葛飾区水害ハザードマップ説明会を開催しました

村山 宏子
葛飾区 危機管理課 災害対策係

葛飾区では、出水期を迎える前の5月中旬から6月中旬にかけて「水害ハザードマップ説明会」を開催いたしました。5月20日には災害対策基本法が改正され、「避難勧告」と「避難指示」が一本化されたことから、新たな避難情報等についても参加された方に周知させていただくことができました。

本年は、緊急事態宣言下での実施であったため、万全の新型コロナウイルス感染症対策で説明会の準備をし、開催しました。ご参加いただきました区民の方からは、令和元年度の台風19号の経験を踏まえたご意見や、「ハザードマップは見えていたけど意外と危険度を把握していなかった」とのご意見を頂き、丁寧に説明することでご理解を頂きました。

また、説明会の中では、災害時の情報収集に役立つものとして、令和2年9月より運用が始まった「防災行政無線確認アプリ かつらっぱ」など災害時に役立つ情報収集手段についてもご紹介いたしました。

災害発生時は、防災行政無線により避難情報等を放送しますが、雨風が強い状態の中ではどうしても聞き取りづらくなってしまふ場合があります。大事な避難情報を区民の皆様確実にお届けできるよう、災害時の情報収集手段についての周知も引き続き努めていきたいと考えております。



今年度のハザードマップ説明会



編集部より



わたなべさん

かつらっぱってなに？

葛飾区の防災無線の内容を
スマホで見られるアプリだよ。



まなぶくん

防災 葛飾区 令和2年9月23日配信開始します！！ 令和2年9月

葛飾区防災無線確認用 スマートフォンアプリ

屋内や台風時など「防災行政無線が聞き取りにくい!!聞こえない!!」との声にお応えして、危機管理課では防災無線確認用アプリ「アプリ名称：かつらっぱ」の配信を開始します。音声だけでなく、文字でも情報を確認できる機能などがあります。この機会に是非、ダウンロードをお願いします。

放送内容をテキスト（文字）表示します。

このアプリでは、防災行政無線の放送内容をプッシュ通知により、テキスト（文字）表示します。また、過去に放送した内容も文字で確認することができます。

放送内容が音声で確認できます。

このアプリでは、「葛飾区からのお知らせ」を押すと、防災行政無線の放送内容が確認できます。多言語（英語・中国語（簡体文）韓国語）も確認できます。アプリのほかにも、フリーダイヤル 0800-800-0657 にて確認できます。

高台まちづくりの推進に向けて

大田 和明

国土交通省 荒川下流河川事務所 高台まちづくり推進室長

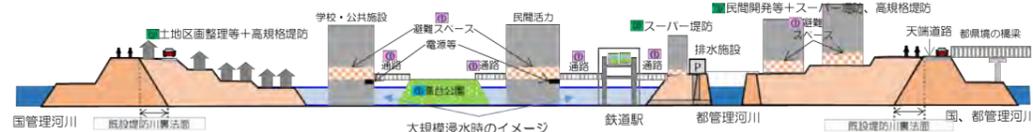
1. はじめに

東京東部地域には、海面よりも低い、いわゆる「ゼロメートル地帯」が広範囲に広がっています。このゼロメートル地帯等には人口・資産が多く集積し、ひとたび荒川等の堤防が決壊すると、広範囲で浸水し2週間以上も継続することが想定されます。水害時には早い段階から広域避難を実施する必要がありますが、令和元年東日本台風では、移動手段となる公共交通機関の計画運休など、広域避難を実施する際の多くの課題が明確になりました。

国土交通省では、治水施設の整備を加速化するとともに、関係機関と連携し広域避難の実効性を高めていきます。また、早い段階からの避難が出来なかった場合でも、命の安全・最低限の避難生活水準を確保できる避難場所にもなる「高台まちづくり」を推進していきます。

2. 高台まちづくりとは

高台まちづくりは、①「建築物等（建物群）による高台まちづくり」、②「高台公園を中心とした高台まちづくり」、③「高規格堤防の上面を活用した高台まちづくり」の3つのイメージで進めていきます。

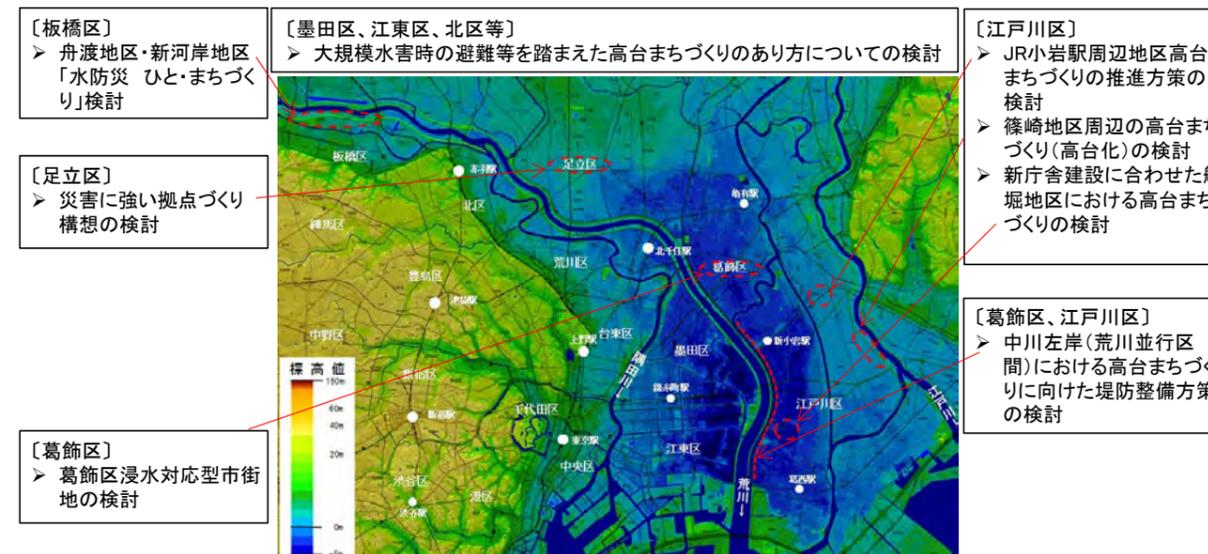


高台まちづくりのイメージ

平常時は賑わいのある空間、公園、良好な都市空間・住環境等を提供し、浸水時には緊急的な避難場所や救出救助等の活動拠点として機能します。高台公園や高規格堤防の上面からは道路や連続盛土等を通じて浸水区域外への移動も可能となります。

3. 高台まちづくりの検討、推進

地域ごとに浸水深、浸水継続時間などの水害リスクが異なることから、国、都、地元区等が一体となり、避難のあり方や排水対策等を踏まえた高台まちづくりのあり方の検討や、モデル地区を設定し、具体の地域における高台まちづくりの実践に取り組んでいきます。



モデル地区の設定状況

4. おわりに

今後、設定したモデル地区等において高台まちづくりの実践等を図るとともに、関係機関において、進捗状況等を共有し、新たに生じた課題等を踏まえた具体的な方策等について更なる検討を実施していきます。



事務局から

「天サイ！まなぶくん」の広がり 「天サイ！まなぶくん2」

古川 修
NPO ア！安全・快適街づくり

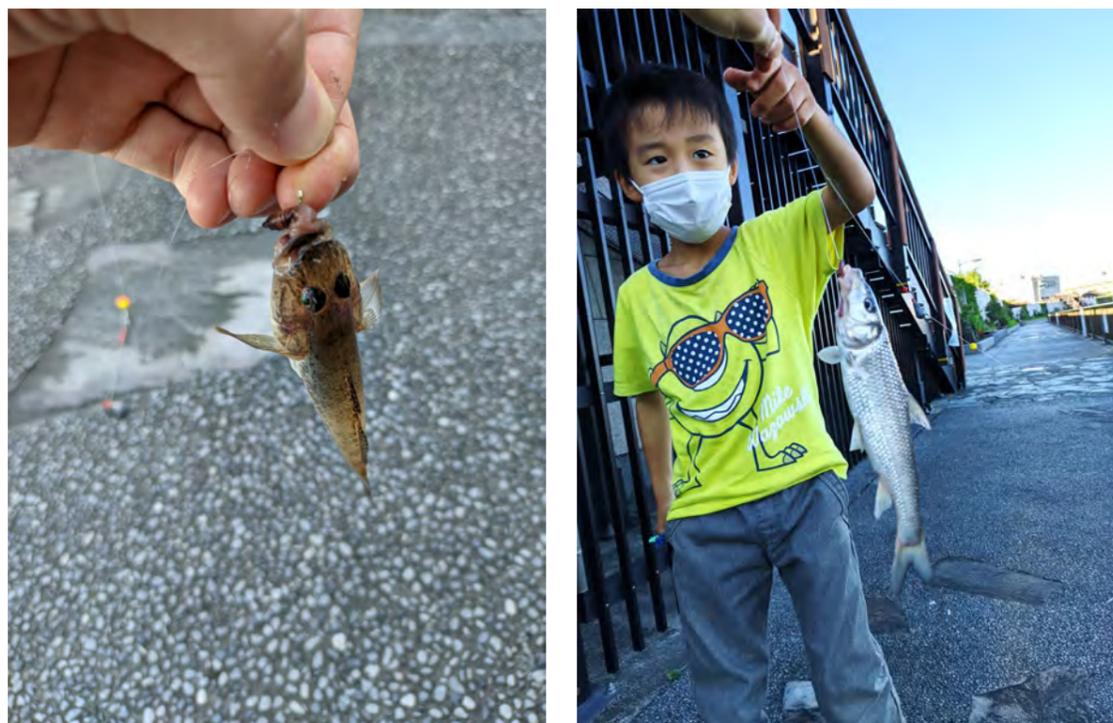
天サイ！まなぶくんは「災害が起こる前の事前学習」に機能を絞ってきましたが、この度新たに「天サイ！まなぶくん2」として「避難時の共助」に着目した新しいアプリとしてリリースいたします。



◎「天サイ！まなぶくん2」の機能と画面遷移



このように、支援が必要な人の存在を近隣のみならずスマホの Web ブラウザを使って助ける仕組みを構築。今後わかりやすく使いやすいように改良をすすめ、初代「天サイ！まなぶくん」のように全国でどこでも誰にでも使ってもらえるように広めていきたいと思っております。



令和2年度葛飾区地域活動団体助成事業 「親子で語り継ぐ大水害時の避難について」

増澤 一朗
NPO ア！安全・快適街づくり

講演会・出前授業等実施一覧表

No.	日時	場所	講師	対象(生徒数)	備考
①	9月15日(火)	上平井小学校 プレイルーム	竹本・南	4学年(46名)	土井副校長先生窓口
②	9月15日(火)	上平井小学校 プレイルーム	竹本・南	6年1組(31名)	〃
③	9月15日(火)	上平井小学校 プレイルーム	竹本・南	6年2組(31名)	〃
④	10月13日(火)	上小松小学校体育館	南	5学年(107名)	林副校長先生窓口
⑤	11月16日(月)～ ビデオ講演会	うらら保育園応接室	中村	保護者、職員 (12名)	久保下主任先生窓口
⑥	12月12日(土)	二上小学校体育館	中川・岸田	5学年(113名)	小用副校長先生窓口
⑦	1月16日(土)	二上小学校体育館	寺島	6学年(117名)	〃
⑧	2月13日(土)	松上小学校体育館	竹本・南	5学年(80名)	中郡副校長先生窓口
⑨	2月13日(土)	松上小学校体育館	寺島	6学年(75名)	〃
⑩	3月6日(土)	松上小学校体育館	竹本・南	3学年(46名)	〃
⑪	12月7日(月)	上平井中学校	南	1,2学年(10名)	顧問の先生

当 NPO は、葛飾区地域活動団体助成事業「親子で語り継ぐ大水害時の避難について」、これまで新小岩北地区内の小学校 4 校を対象に「出前授業」と「上平井中学校地域防災ボランティア部活動支援」及び「うらら保育園での講演会」を行っていますが、コロナ禍の令和 2 年度は上平井中学校部活動支援の大半が中止となり、うらら保育園講演会も中村講師のビデオ講演会に変更となりました。

一方、新小岩北地区内の小学校 4 校はいずれもほぼ予定通り出前授業を行うことが出来ましたが、これは各小学校校長先生始め副校長先生や学年主任及び各担任先生方によるご協力と、関係講師皆様の熱意によるものと心より感謝致しております。

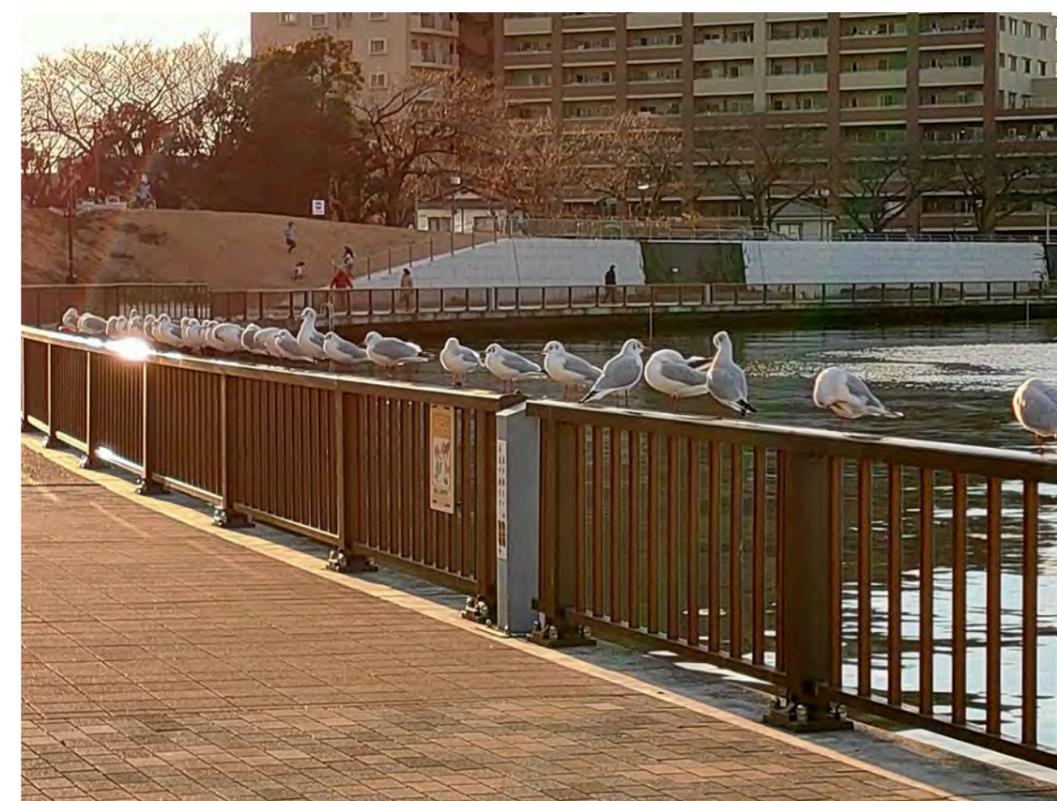
各小学校共、児童・生徒・先生方や講師の方々には、マスクやフェイスシールドの着用、検温そして、移動や床座りの際は前後左右互いに距離を保ち、私語を慎み、授業中は大きな声ではっきり発言する等を励行し、感染症対策に十分注意を払って行われました。

出前授業等が今年度も葛飾区から採択されるようお願いながら、関係された方々に改めて御礼申し上げます。有難う御座いました。



ものつくり大学(行田市)の調整池は、令和元年東日本台風により満水となった
(宮本伸子・撮影)

会員から



中川のテラスに整列するユリカモメたち (古川修・撮影)

第14回輪中会議に参加して一河川災害への備えに思う

宮本 伸子

UIFA JAPON(国際女性建築家会議日本支部)理事・学校法人ものづくり大学参事

始めて輪中会議に参加させていただきました。ゼロメートル地帯については学校で学んだ知識以上はなく、会議に参加させて頂いて、地域の皆様の切実な意識と思い、それを継承する中学生の意欲などに、改めて目を開かされました。

1. 河川による水災害は自然と人工の複合構造災害ではないか

会議の基調講演の2人目で、国土交通省荒川下流河川事務所の早川様のお話を伺って、2019年の台風19号(令和元年東日本台風)の時の実感を思い出しました。この台風19号では、私のすまいと大学のある埼玉県行田市は利根川と荒川に挟まれているため、両方の河川情報を常に見比べ、熊谷の水位観測所では氾濫危険水位を超え、極めて危険な状況だとの情報を得ていました。

結果として埼玉の何カ所かで支流の氾濫があり、行田市でも一部で小河川の越流による浸水被害があり、災害復旧として周囲のかさ上げが課題になっています。また大学の中の1ha程の広さの調整池も、開学後19年目で最も水位が上がり、これもあふれ出す直前という状況でした。これらの埼玉県内の状況は、岩淵水門が開かれる頃まで続いたところもあったと聞いています。

一方で利根川の方は危機的な事態にならずに済みましたが、その一番の功績者は八ッ場ダムではないかと思えます。八ッ場ダムができる直前の2019年6月初旬に現場見学に行き、そのボリュームに圧倒されていたのですが、10月1日からの試験湛水からすぐの台風で100%の貯水量に達し、他のダムの合計貯水量に匹敵する八ッ場ダムが無かったらどうなっていたことかと感じた次第です。そして、河川災害については、永年の災害防止努力(ダム、堤防、調整池等々)がある一方で、それらを活用した水量のコントロールや情報発信を適切に行わないと、自然災害が人工災害の様相を呈するのではないかと危惧しています。

2. 災害における人の繋がりの大切さ

会議でのお話しの端々にも出てきていましたが、災害が起きた時の避難対応や被災後の復旧には、安否確認を含む人と人の繋がりが大事だということを感じています。避難訓練等を含む日常の繋がりがまず第一だと思いますが、それに加えて緊急時の相互確認、安否確認システムのような仕組みも重要です。

そして、その仕組みや確認結果の情報を共有管理するためには、情報ネットワークシステムが安定して使えることも大事だと思いますので、そういう視点も取り上げたらよいのではないかと思います。

「食」のチカラ、 どこまでまちづくり・防災に活かせるか？

齋藤 由里子

公益財団法人 味の素ファンデーション (TAF)

当財団が東日本大震災の復興応援事業として8年半展開してきた参加型の料理教室、「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」。東北の皆様から得た学びは、「食」は「人と人が繋がる」のにとっても有効な手段である、そして、「いっしょに作っていっしょに食べる」ことにより、それは更に強化される、ということでした。この東北での経験を原点とし、今はこのプロジェクトを復興応援だけでなく、平時の地域コミュニティ活性化のための活動へと拡大しています。

そして、2019年度から官民学連携で発災時の食と栄養の問題にも取り組むようになった背景から、「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」も含めて、これまで集めた知見を食と栄養の防災に活かさないかと検討をしている中、加藤さんからご紹介を頂き、5月9日の輪中会議に初めて参加をさせていただきました。

私達の体は、毎日食べたものの積み重ねで出来ています。そして、健康な心と体は、それ自体が防災の大事な資本となります。

自治会や学校など、地域が主体となった皆さまの長年のお取り組みから学ばせて頂きながら、食と栄養をテーマに、次の発災に備えるお取り組みをご一緒させて頂いたら・・・と考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

◆お問い合わせ先：080-1233-8524 yuriko_saitoh@aji-foundation.org

◆HPはこちらから



◆Youtubeはこちらから



東北における「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」の活動の様子

輪中会議に参加して

吉満 隆裕

東京大学 生産技術研究所 加藤孝明研究室

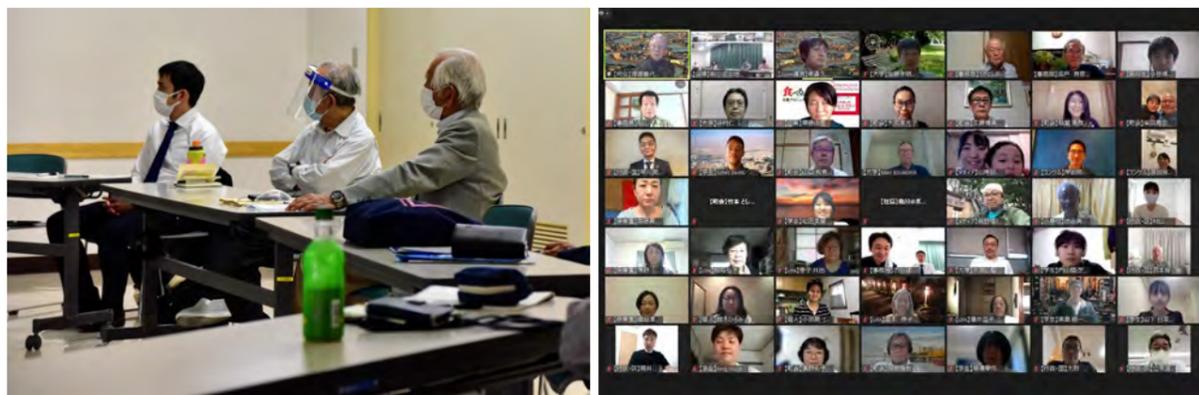
私は、今年 4 月から、加藤先生のもと、安心・安全なまちづくりについて学ばせていただいています。それ以前は、私は、主に、公助に係る仕事をしていましたが、加藤先生のもとで学ぶ中で、日々、自助・共助の大切さを感じているところです。まだまだ、学ぶことばかりで、自身の活動等をご報告できる立場にはないことから、今回は、輪中会議に対する感想を投稿させていただければと思います。

今回、輪中会議に参加して、地域、行政、NPO、企業、専門家、学生など様々な立場の方々が参加していたことにとっても驚きました。防災に関して、ここまで様々な立場の方が一堂に会して話し合うということは必要なことではあると思いますが、多くのことがあふれ、忙しい現代社会においては、そのような機会を作ることは中々難しいように感じていたからです。また、ZOOM を使ったオンライン会議であり、なかなか対面とは違い、意見交換が難しいにも関わらず、多くの方が積極的に意見交換をしていたことも印象的でした。

今回、コロナ禍のため、オンラインでの輪中会議となりましたが、例年、対面での輪中会議は、とても活気や熱があるという話を周りの参加者に聞き、次は是非とも、対面にて参加し、その活気や熱を感じ、その活気や熱を更なる活力にして、防災に関しての知識・経験を深めていきたいと思いました。

輪中会議のような取り組みが多く場所を広げれば、これから起こりうる大規模災害において、自助・共助・公助の力をそれぞれ最大限に発揮して乗り越えていけるのではないかと感じました。

最後に、このような素晴らしい会議に参加させていただきありがとうございました。



Web 上でカスリーン台風の足跡を訪ねて

南 貴久

NPO ア！安全・快適街づくり / 東京大学 加藤孝明研究室

コロナ禍で移動が制限されている昨今、旅好きの人間にとってはもどかしい日々が続いている。そんなご時世だからこそ、Web 上の地図や資料を眺めながら、次の旅先をあれこれと考える時間も良いものだ。Web 上では生身の街や人間に触れることは叶わないが、その街の文化や歴史を紐解くためのヒントを得ることはできる。

今回、中高生の素晴らしいレポートにも触発され、自分も過去の水害の歴史、特にカスリーン台風の足跡を訪ねる旅を試みたいと思い、Web 上で下調べを兼ねた情報収集を行ってみた。カスリーン台風は、本誌 24 号でも特集されている通り、1947 年（昭和 22 年）9 月に東日本を中心に被害を出した台風である。この台風の特徴は、台風自体の勢力の割に、特に大雨による被害が甚大であったことである。特に、関東北部・西部の山間部では土砂災害で非常に多くの死者を出し、また関東南部の利根川・荒川沿川や岩手県の北上川等では大規模な氾濫が街を襲った。

■ 調査対象と方法

今回は、カスリーン台風に関する遺構・石碑・モニュメント・説明板など、現代に残る有形の伝承施設の分布を調査した。調査にあたっては、主に「Google マップ」「行政資料」「研究資料」「民間資料」「地理院地図」「Ingress Intel Map」を用いた。なお、今回は Web 上で入手可能な資料のみを対象としており、書籍刊行物等の文献調査や現地調査については今後の課題とする。

・「Google マップ」

Google マップに登録されているスポットについて、「カスリーン」または「カスリン」を含むものを横断的に検索し、関連のあるものを抽出した。

・「行政資料」

カスリーン台風について最も網羅的に調査された行政資料としては、中央防災会議（2010）がある。また、利根川沿川の碑を紹介した、荒川上流河川事務所「歴史散歩『利根川の碑』」も有用である。

・「研究資料」

埼玉県内の水害史料を広範にまとめたものとして、彩の川研究会（2017）がある。また、カスリーン台風に特化した資料として、利根川下流域の痕跡がまとめられている防災科学技術研究所（2007）もある。

・「民間資料」

個人や民間団体の資料も、ときに有用である。「河川ネット 日本の川と災害」は全国の、「きまぐれ旅写真館」は関東地方を中心とするエリアの河川関連施設がレポートされている。また、土木情報サービス「いさぼうネット」のコラム「カスリーン台風（1947）による土砂災害地点を歩く」では群馬県のカスリーン台風の被害状況や史料がまとめられており、大変興味深い。

・「地理院地図」

国土地理院では 2019 年 3 月に新しい地図記号「自然災害伝承碑」(右図) を制定し、各自治体の情報提供により順次「地理院地図」に掲載している。今回は 2021 年 9 月現在の「自然災害伝承碑」のデータから、カスリーン台風に関するものを 19 基得た。



・「Ingress Intel Map」

Ingress とは、アメリカの Niantic 社が運営する、スマホの位置情報を利用した陣取りゲームアプリである。詳細は省くが、地域にある文化的・歴史的価値のあるスポットをユーザー自身が投稿し、ゲーム内に登場させることができるのが特徴である。このスポットの情報は、「ポケモン GO」や「ハリー・ポッター：魔法同盟」といった同社の他のゲームアプリにも流用されている。

ユーザーにとっては、スポットは増えれば増えるほどゲームを楽しめるので、普段あまり目が向けられていなかった地域の地蔵や碑などを次々に「発見」し、ゲームに登場させるインセンティブが働く。これにより、ゲーム内に地域の文化財データベースが自然と出来上がっていくのである¹⁾。もちろん、その中には災害に関連する碑やモニュメント等も含まれる。

今回は、このデータが一覧できる「Ingress Intel Map」を用いて、他の資料で抜け落ちているような、カスリーン台風関連のマイナーな石碑等を抽出した。

■ 調査結果

調査は継続中であるが、2021 年 9 月末時点で確認できたカスリーン台風関連施設をまとめる。まず、カスリーン台風を今に伝える施設は、主に「決壊口跡」「記念碑」「慰霊碑/供養塔」「地蔵」「公園」「水位表示」「案内板」に分類できた。地域別にその分布を紹介する。

・利根川水系上流域

土砂災害や河川氾濫により多数の死者が出た関東北部の利根川水系上流域では、数多くの慰霊碑や復旧事業竣工記念碑等が残っている。特に群馬県の赤城山西麓・南麓では、多くの集落が壊滅的な被害を受けた記録が残されている。

¹⁾ 民間気象会社による、ユーザーの気象レポートの予報への活用にも見られるように、ユーザー側から地域の細かなデータを拾い上げる手法は、悉皆調査の困難な分野におけるデータ収集の手法として、今後 1 つの潮流となると考えられる。



土石流災害により 83 名の命が失われた渋川市赤城地区の沼尾川流域では、慰霊碑や地蔵像、五十年祈念碑がその歴史を伝えている。前橋市富士見地区の赤城白川（死者 104 名）や、大胡地区の荒砥川（死者 71 名）の流域でも、慰霊碑や復旧記念碑が数多く建ち並んでおり、地元の郷土かるたにもその歴史が刻まれている。桐生市には、桐生川の災害を伝える供養塔や伝承碑がある。栃木県足利市では駅前に水位表示板が設置されているほか、渡良瀬川の決壊場所の近傍には地元の企業や仏教団体が建立した地蔵・供養塔や、シンボルタワー「清流わたらせ 21」があり、この地で毎年供養行事が行われている。また、利根川右岸（埼玉県側）にも被害を伝える碑が複数残されている。

・利根川水系中流域

渡良瀬遊水地周辺には数多くの決壊口跡碑が残されており、当時の洪水の猛威を思い起こさせる。特に埼玉県加須市の利根川決壊口跡周辺は「カスリーン公園」として整備され、モニュメントも建立されている。

久喜市の久喜駅前には水位表示塔「ときの塔」がシンボルとして建っていたが、故障により残念ながら 2021 年初頭に取り壊された。一方、栗橋総合支所内にある水位表示塔「川楽版」は現役である。その他、利根川上流河川事務所が設置した電柱の水位表示も、この地域では数多くみられる。



・荒川水系上中流域

カスリーン台風は、荒川でも猛威をふるった。

秩父の山間部にある埼玉県横瀬町の芦ヶ久保地区では、横石沢で土砂災害が

発生し、7名の尊い命を奪った。この被害を忘れないようにするため、地元ではこの沢の通称をカスリーン台風の発生した昭和22年9月に因んで「二二九（にふく）沢」と定め、慰霊の地蔵（漆ヶ崎地蔵尊）とともに今に伝えている。

中流域では、熊谷市の久下地区に決壊の跡碑が残っている。また、鴻巣市で90mにわたって決壊した大間堤防の跡には、災害復旧記念碑が建てられている。



・荒川 / 中川下流域

荒川下流域では、東京都北区の旧岩淵水門（赤水門）の近くに、カスリーン台風を含む過去の水害時の水位表示が建っている。

中川下流域では、埼玉県吉川市の郷土資料館前に、当時の浸水位を示すモニメントが建っている。この郷土資料館は、近隣住民が私財を投じて建てられ自治体に寄贈されたものらしい。

葛飾区内には、カスリーン台風時に決壊した桜堤付近に説明板が設置されているほか、「東京都第五建設事務所前古井戸」前の、上平井中学校地域防災ボランティア部の皆さんが地域やNPOと共に作成した説明板にも、カスリーン台風の歴史が語られている。



・北上川流域

最後に、関東から離れて、岩手県の北上川流域に残されたカスリーン台風関連施設を紹介する。

カスリーン台風時、岩手県内では岩手山で429.6mmの総雨量を観測するなど記録的な大雨となり、北上川やその支流の氾濫により100名以上の犠牲者を出した。一ノ関駅前には、東口・西口ともに当時の水位を伝える表示があるほ

か、大きな被害を出した支流・磐井川沿いの土手には地蔵や記念碑が建てられている。

また、奥州市水沢区では、カスリーン台風が続いて翌年のアイオン台風でも大きな被害を出しており、北上川の土手に復興五十周年記念碑が建っている。



■ おわりに：

災害の歴史を伝承しよう

カスリーン台風の遺構は東日本の各地に残されているが、管理状態が悪いなど、地元でも忘れられつつありそうなものも多く存在した。これらの遺構にはまだ「自然災害伝承碑」として地形図に掲載されていないものも多い²⁾。住民側で身近にある碑などの調査を行って、所在自治体に情報を提供し、積極的に登録するように呼び掛けることも必要ではないだろうか。

また、東日本大震災後には復興ツーリズムが注目を集めたが、もう少し過去の災害にも目を向け、地域の災害の歴史やそれを乗り越えてきた人々の営みを総合的に体感する「学びの旅」を皆で実践してみるのも面白いのではないかと。

■ 参考文献

今回の調査に使用した主なWebサイトを紹介します。ぜひ見てみてください。

- ・中央防災会議(2010)「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 1947 カスリーン台風」
http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokkeishou/rep/1947_kathleen_typhoon/
- ・荒川上流河川事務所「歴史散歩『利根川の碑』」(2021.10.6 閲覧)
https://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/tonejo_index025.html
- ・彩の川研究会(2017)「我が町の災害アーカイブス」
<https://www.sainokawa.jp/cont3/128.html>
- ・防災科学技術研究所(2007)「カスリーン台風60年記念展 東京を襲った利根川の洪水」
<https://dil.bosai.go.jp/disaster/1947kathleen/index.html>
- ・「きまぐれ旅写真館」<http://fukadasoft2.sakura.ne.jp/index.html> (2021.10.6 閲覧)
- ・「河川ネット 日本の川と災害」<http://www.kasen.net/> (2021.10.6 閲覧)
- ・土木情報サービス いさぼうネット「カスリーン台風(1947)による土砂災害地点を歩く」
<https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum44.asp> (2021.10.6 閲覧)



皆さんも、新たな石碑や遺構を見つけたら、ぜひ南へ教えてください！

²⁾ 「自然災害伝承碑」は、自治体から申請のあったものを国土院が順次地形図に反映させている。しかし、市担当者が「災害対応など他の業務と比べ優先順位が低く、詳しく調べてこなかった。」と述べるなど、自治体による把握が追いついていないのも実情である。参考記事：上毛新聞「自然災害伝承碑の登録申請伸び悩む 防災史料は群馬県内12基のみ」2021年5月19日 (<https://www.jomo-news.co.jp/news/gunma/politics/295899>)

近況報告：英国にて気づいたこと

塩崎 由人

NPO ア！安全・快適街づくり 会員

2020年9月から2021年8月まで英国の University College London に客員研究員として留学し、その間、家族（妻と1歳の娘）でオックスフォードに滞在していました。留学中は新型コロナウイルス対策による影響もあり、残念ながら当初の予定通りは活動できませんでしたが、異なる環境に身を置くことでいろいろ気付かされること多い一年でした。

今回、気付かされたことの一つが、危機において「見通し」を示すこと、共有することの重要性です。英国では、当初、新型コロナウイルスへの対応が遅れ、多くの犠牲者を出すことになりました。しかし、その後導入されたロックダウンからの出口戦略として、2021年2月にワクチン摂取を迅速に進め、感染率等の状況を踏まえながら、4月以降にロックダウンの制限を段階的に緩和し、6月までにはほぼ全ての規制を解除するというロードマップを示しました。結果として、ほぼ全ての規制が解除されたのは7月に入ってからになりましたが、あらかじめ見通しを示し、その実現に向けて国がワクチン接種を推奨し、感染率が低下するまではロックダウンを継続するという方針は理にかなっていたと感じました。英国では2021年9月時点で13万人以上が新型コロナウイルスの犠牲になっているので危機管理に関する課題はたくさんありそうですが、少なくとも、社会に足並みのそろった対応を求めるために、まず「見通し」を示すというアプローチは見習うべきところだと思います。

それから、身の回りに草木や生き物が豊かに共存している環境、子供が思いっきり遊べる環境は大切だということを感じました。私が住んでいたオックスフォードは、人口15万人の小さな街ということもありますが、至るところに広い芝生の公園があり、犬を連れて人や子供たちが走り回っていました。また、中心部から15分も歩けばテムズ川の氾濫原となっている牧草地があり、天気の良い日はピクニックやボートを楽しむ人で賑わっていました。街を流れるオックスフォード運河ではナローボート（キッチンや寝室も備えた細長いボート）に加えて、鴨や白鳥等の水鳥が行き交い、市民に人気の散歩道になっています。私も毎日、娘の保育園の送り迎えで運河を通り、娘と公園の芝生で駆け回って遊んでから牧草地に立ち寄り、牛や野鳥を眺めてから帰宅する生活を送っていました。ロックダウン下でも、街の中に思わず道草したくなる場所がいくつもあるおかげで、暮らしが豊かだったと感じています。

脈絡なく書きましたが、先日帰国して、この9月から国立研究開発法人 防災科学技術研究所で防災の研究をしています。引き続きよろしくお願ひします。



左の3枚はオックスフォード運河の風景。
左下の2枚に写っているのがナローボート。
右の2枚はテムズ川の氾濫原の牧草地の様子。

漢江（ハンガン）公園の 浸水対応型施設物の設置による浸水への備え

金 栽潁（キム ジェホ）

東京大学生産技術研究所 加藤孝明研究室 特任研究員

漢江開発の歴史は治水の歴史である。毎年梅雨の間、氾濫する漢江から生活の基盤を守るため、堤防を補強し河川治水事業を進めた。その後、都市での浸水発生頻度は大きく減り、現在では外水氾濫による市街地の洪水は 1980 年代以降発生していない。これに対し、堤防を築いた後、市民の余暇空間として堤外地に作られた漢江公園（ソウル市内の漢江沿いにある 12 地区の公園の総称）は頻りに浸水が発生している。

過去、漢江公園は平均 5～6 年周期で大部分の地区が浸水し、特に土地が低い地区では毎年 1～2 回という高頻度で浸水した。現在も漢江は、集中豪雨によって上流の八堂ダム（パルタンダム）で水門を開放し放流すれば、漢江公園の一部または全部が浸水したりする。

現在の漢江公園は、ソウル市民の代表的な親水環境空間である。漢江公園は造成から現在まで、利用者には娯楽および自然空間としての役割を果たしてきた。これによって、多様な漢江公園の計画が行われ、利用者の利便性のため、売店、トイレなどの多様な施設はますます多くなった（図 1、図 2：同じ地点の普段と浸水時の漢江公園トゥクソム地区）。



図 1 普段の漢江公園トゥクソム地区



図 2 集中豪雨により浸水した漢江公園トゥクソム地区

利用者と施設物が多くなり、浸水による施設物の被害も大きくなった。このため梅雨の前には、漢江公園内の多様な施設物は事前点検が必要になった。集中豪雨の予報がある時は、漢江公園内にあるコンテナ式売店はフォークリフトを利用して近くのオリンピック大路や江辺北路など浸水が発生しない高台に移動しなければならなくなった（図 3）。そうでなければ、水が入って使えなくなったり、海まで流されるのが常だった。また、浸水地域の泥除去作業、浮遊物の処理など災害復旧作業に多くの時間がかかり、費用もかかる（図 4）。



図 3 集中豪雨に備えた施設物点検：
フォークリフトを利用したコンテナ式売店と移動型トイレの高台への移動



図 4 漢江の水位が下がった後、漢江公園の掃除と復旧作業の様子

異常気象現象や局地的な集中豪雨の急増と共に、漢江公園の浸水の発生頻度が高まり、浸水に備えた施設物の事前点検作業も増加している。このような急な浸水を考慮すると、漢江公園の閉鎖および利用者の接近を事前に統制したり、迅速に避難させ、安全を図る必要がある。加えて、施設物も被害を軽減するための備えが必要である。

これを受け、ソウル市は 2008 年、漢江市民公園内のコンビニエンスストアや売店型喫茶店を、フローティング式（浮動式）へと変え始めた。現在、コンビニエンスストア 29 ヶ所のうち 18 ヶ所が、浸水が起こると自動的に浮くようになっている。実際、盤浦（バンポ）地区にあるコンビニエンスストアは 200 ミリを超える豪雨に加え、八堂ダムが放流量を増やし、漢江の水位が急激に上がった時、漢江公園の浸水にもかかわらず、施設物の浸水は避けることができた。フローティング式で建てられていなかったら、店は浸水するか、水に流されたが、実際には施設物が 2～3 メートルほど浮かんで、水が引くと沈みながら元の場所に戻ったのだ。

漢江公園に設置されたフローティング式の建物が浮かぶ原理は簡単である。建物の重さを超える浮力を出すように床の下に密閉された空間を作り、浸水すると浮力によって建物が自動的に浮くようにしたのだ。水が上がると建物が浮き上がり、地面と分離されるが、端に最高高さ 12m まで支えられる鉄柱が打ち込まれ、建物が流されず上下だけで動くようになっている（図 5、図 6）。



図 5 浸水によって浮き上がった売店



図 6 浸水によって浮き上がったトイレ

漢江事業本部（漢江の施設物を管理するソウル市の組織）では浸水対応型施設物事業を積極的に実施している。まず売店の場合、29 店のうち 18 店をフローティング式の売店にし、残りの 11 店も順次にフローティング式に変える予定である。トイレの場合は、全 136 室のうち 4 室がフローティング式、46 室が車両型にし、速やかに避難できるようにしている（図 7、図 8）。

また、展望カフェなど漢江公園にある施設までのエレベーターは、三重安全システムに基づいて設計されている。第 1 段階はエレベーターに水が 20cm 以上浸水すると、その圧力で床のセンサーが作動し、エレベーターが上に自動的に浮かぶようになっており、第 2 段階では水が 50cm 以上浸水するとエレベーターの枠や下部の電気装置などが自動的に浮かぶことになっている。最後に、第 3 段階はエレベーター機能自体が故障した場合を想定し、軽い浮力タンクにより浸水の水位まで自ずと浮上するようになっており、全てのエレベーターはコンクリート構造物のみを残して、電気施設等は全て浮上することになっている（図 11）。その他にも、浸水が起こる地域に設置された建物は、浸水水位を考慮して、床を浸水水位以上の高さにしたピロティ構造の建築物にしている（図 12）。

このように、漢江公園では過去の浸水経験と今後の気候変動に対応するため、設置施設に対して様々な方法が取り入れられており、最近は特にフローティング式の建物が導入されている。



図 7 移動性を高めた車両型トイレ



図 8 浸水していない地域に避難した車両型トイレ



図 9 フローティング式のトイレ



図 10 下部にタンクが設置されているフローティング式のトイレ



図 11 浸水程度によって浮かぶ漢江公園内のエレベーター



図 12 浸水水位を考慮したピロティ構造の建築物

浸水に対応する方法には様々な方法が考えられるが、大きく 3 つに分けることができる。第 1 に、伝統的な方法で堤防を築く方法である。水の流れを防ぎ、市街地を守るやり方である。これは、大規模な土木工事と高い工事費が必要であり、ずさんな管理や堤防決壊などの有事の際、生命や財産に莫大な被害が発

生する恐れがある。第 2 に、ピロティを利用して浸水を防ぐ方法である。これは建築により浸水に対応する方法である。しかし、水位の変化によって建物への接近性が低下することや、ピロティの高さを超える浸水が発生する場合には、既存の地面建築物と変わらない被害が発生し得る。最後に 3 つ目は浸水に適応する方法で、フローティング式の建物がその代表例である。建築物を水に浮かせることで浸水に対応するとともに、水位の変化にも適応し、既存の都市・自然環境の毀損なく適用可能な方法である。このような浸水対応方法を加藤先生の言葉を借りて表現すれば、それぞれ「守る」、「避ける」、「受け流す」の方法として捉えることができる。



図 13 浸水対応型市街地造成の 3 つの方法

葛飾では、2019 年 7 月に浸水対応型市街地構想を公表し、浸水しても安全な都市づくりに取り組んでおり、官民で様々な議論を進めている。

これらの取り組みにおいて、今回紹介した漢江の事例は、施設物・建築物単位での浸水対応型市街地構想の一つのアプローチとして考えられるだろう。水と建築物の関係性を、克服や回避ではなく、受け流し共存するという従来とは異なる関係で捉えるフローティング建築は、地域の脆弱性や異常気象による将来の想定外の大洪水等の様々な条件にも対応可能な方法と考えられるからである。

■ 韓国語 記事要旨

한강공원은 서울 시민의 대표적인 친수 환경 공간이다. 한강공원은 조성 이후부터 현재까지 이용자에게는 위락 및 자연공간으로서 그 역할을 다하여 왔다. 그러나 매년 장마철이나 폭우 시에 상습적으로 침수가 발생하면서 한강공원 내 이용자 편의시설들이 침수피해를 입었다. 이에 한강사업본부에서는 침수 대응형 시설물 설치 사업을 실시하여, 편의점과 화장실 등은 부상식 건축물이거나 이동식 차량형으로 설치하였으며, 엘리베이터는 침수 정도에 따라 자동으로 부상하게 하였다. 또한, 침수지역의 건축물은 필로티 구조로 건축하여, 침수가 발생하여도 피해가 크지 않도록 하고 있다.

이처럼 침수에 대응하는 방법은 크게 3 가지가 있다. 제방을 쌓는 전통적인 방식과 필로티 구조를 이용하여 홍수를 피하는 방식, 침수에 적응하는 방식으로서의 부상식 건축 방식 등이다.

최근 카즈시카구에서는 침수 대응형 시가지 구상을 발표하였다. 이번에 소개한 한국의 한강사례가 카즈시카구의 침수 대응형 시가지 구상에 있어서 시가지와 자연이 공존하면서 지역의 취약성과 이상기후 등 다양한 조건에 대응하는 방법으로써 좋은 사례가 되기를 기대해 본다.

Community engagement and sense of belonging in disaster prevention landscape:

An international student's experience of Katsushika city Waju Kaigi

Soheil DASHTI (ダシュティ ソヘイル)
 東京大学 加藤孝明研究室 外国人研究生
 (日本語抄訳: 加藤孝明研究室 南 貴久)

Introduction はじめに

This essay describes the experience of Katsushika *Waju Kaigi* from the author's point of view as an international research student at the KATO Lab, the University of Tokyo, and the author's background in relation to studying in Japan. The Katsushika *Waju Kaigi* was a community meeting held online on 9th of May 2021 to discuss the accomplishments and concerns of the planning process for the city of Katsushika in Tokyo, Japan.

In contemporary urban planning, Japan has experienced a unique trajectory of urbanization, expanding from the era of rapid economic growth to bobble economy, aging society and meanwhile recovery from numerous disasters. As Maruyama (2016) states "It seemed that The Japanese Empire was almost demolished in 1945 but Japan as a country emerged as a new, democratic society with many of its constituents (people, land, culture, etc.) preserved". Since the Great East Japan Earthquake in 2011 many national and regional initiatives have aimed to build back damaged areas better, but also to prepare other vulnerable districts for future disasters and provide recovery plans. In the Metropolitan of Tokyo, the natural topography of many areas inside *Shitamachi*, adjacent to the Tokyo Bay, are under sea level and are highly vulnerable to floods. Katsushika city is located in the same region and requires continuous prevention measures.

本稿では、輪中会議での経験や、筆者が日本で学ぶことになった背景について述べる。日本は急激な経済成長と都市化、高齢社会、数々の災害からの復興など、独自の経験を有している。東日本大震災以降、国や地域は被害からの復興とともに、将来の災害への備えと復興準備を進めている。東京には、葛飾を含む下町エリアに洪水の危険性がある低地帯があり、継続的な対策が求められている。

My Background: What was the reason of being interested in Japan?

私の生い立ち: 日本になぜ興味を持ったのか?

I got acquainted to Japanese art and culture by watching Anime with my brother since we were little. After entering University, I was intrigued by Japanese architecture through my courses with Associate professor *Kaveh Fattahi*, who had finished his Ph.D. and Post doc. at Hokkaido University. So, I read about Japanese contemporary architecture and realized it has been one of the most influential mainstreams throughout the world with distinguished architects. Japan has a rich reputation in architecture with sublime heritage resulting in an enchanting, versatile, and emotional sense of place. Many believe Japanese architects successfully conducted the transitional period to Contemporary Architecture by fostering a

continuous lineage of committed apprentices who become today's pioneers. This kind of mentorship has long fascinated me.

I had the privilege to represent my university in “International Iran-Japan forum on Architecture and Urban Issues, 2018” which was held at AIJ, in Tokyo. I became interested in Japanese people attitude among themselves and foreigners. I found out that although being at the forefront of technological advancement, tradition is an ever-present component in Japan as well. Coming from Iran, with a rich cultural-historical background, this encouraged me to learn more about Japanese culture and how Japanese planners and architects manage to balance their traditional values within constantly evolving cities.

The relationship between Iran and Japan has a long history tracing back to the silk road. I would like to contribute to this rich background, by developing mutual collaborations between the two countries not only on academic fields but also on community projects in order to enhance knowledge and cultural exchange. Iran, in this regard, has rich architecture and cultural history with many opportunities for community projects due to its vast context and population.

I am passionate to explore new urban solutions and as Japan has a continuous lineage of sensei-apprentice culture, I would like to carry on this stream and pass it on to the next generations and prepare them for the rough challenges ahead, as my mentor did before me.

私の日本文化との出会いは、幼いころ兄弟と一緒にアニメ^{*}を見た事だった。大学に入学すると、北海道大学で博士号を取得した Kaveh Fattahi 准教授の授業を通して、日本の建築に興味を持った。日本の近代建築についての文献を読み、日本建築や著名な建築家たちの世界的な影響力の高さを知った。日本は荘厳な建築遺産により世界的な評価を得てきたが、その伝統を弟子たちに受け継ぎ続けることで、現代建築への移行を成功させた。私は、こうした日本の師弟関係にも、長く魅了されてきた。

私は日本建築学会主催の「2018年 日本・イラン 建築・都市会議」(東京)に参加する機会を得て、日本の人々の姿勢にも興味を持った。日本は先進技術を持ちながらも、伝統が今なお構成要素の 1 つであり続けている。イランも豊かな文化・歴史的背景をもつ国であるので、日本の計画家や建築家たちがどのように都市の進化と伝統のバランスをとっているのかをもっと知りたいと感じた。

私は新しい都市課題の解決を探究しながら、日本の「師弟」文化の伝統継承のように、次世代の人たちが困難な課題に立ち向かっていくためのバトンを渡していきたい。私の「師匠」が私にしてくれたのと同じように。

My Experience: What was my experience at KATO LAB and Katsushika city meeting?

私の経験：加藤研究室や輪中会議で何を経験したのか？

I knew that Japan's acclaimed education system has concerned social impact deeply into its structure and provides high international-standard quality through diverse collaboration of world-class experts and intellectual researchers for tackling critical issues of communities and their habitats.

Professor KATO Takaaki's lab has been active in planning for disaster prevention and

^{*} 訳者註：イランでは特に『キャプテン翼』が人気とのこと。葛飾にゆかりがあるアニメだと説明すると驚いていました。

reconstruction of cities both inside and outside of Tokyo metropolitan, for a long time. Their activity spans from providing risk assessment platforms, and preparation design scenarios for reconstruction. Since I'm looking forward to continuing my research in the field of Urban Resilience and contribute to climate change adaptation, I found Kato lab's projects strongly aligned with my research. KATO sensei has well investigated resilience concept in articles and has hands-on experience on post-disaster urban recovery plans, therefore I am determined to learn both theoretical and practical aspects of resilience in Urban planning.

I have had the honor to join KATO lab from October 2020 and since then I have grown to root in for their character and purpose. KATO sensei and all lab members supported me with starting my life in Japan; therefore, I have experienced first-hand that how the community's engagement and social capital play a fundamental role for preparedness to confront the unknown in general, and disasters in particular. The continuous lineage in Japanese culture can be seen in the process of Katsushika city planning. The fact that Kato Lab and other stakeholders have continued a participatory planning process for more than 15 years is a testament to this phenomenon that each generation develops the work and not only pass it on to next generation, but engage new generation in training so they can be better prepared for the future. Watching junior high school students participating eagerly in such a community meeting and bringing their fresh points of view to the table was a moment of deep respect for me. Meeting some of the directors and organizers of the community and their attitude was inspiring to me, because I could understand their community attachment and sense of belonging to the city. I find Katsushika city's NPO activity strongly valuable to continue develop a safer urban environment with more amenity for its citizens.

日本の高度な教育システムは、日本社会を形作っており、世界的な専門家や研究者の協働によりコミュニティの重要な問題に高い水準で取り組むことに貢献している。加藤孝明研究室は、防災計画や復興の分野で長い間活発に取り組んできた。私は都市のレジリエンスについて研究を続け、気候変動への適応策に貢献したかったので、加藤研究室のプロジェクトと結びつきやすいと思った。加藤先生はレジリエンスの概念についての研究や、復興計画の実践の経験をお持ちなので、私は理論と実践の両面から都市計画におけるレジリエンスについて学びたいと決意した。

私は光栄なことに 2020 年 10 月から加藤研究室に加わることになり、研究室の皆さんは私の日本生活のスタートをサポートしてくれた。そして、災害対応において、コミュニティの関与やソーシャル・キャピタルが果たす役割を直接体験した。葛飾区の計画過程にも、日本の「伝統継承」文化を垣間見ることができる。加藤研究室や他の関係者が参与型計画のプロセスを 15 年以上にわたって続けてきたという事実は、各世代が仕事を成し遂げて次世代にただ引継ぐだけでなく、次世代が将来をよりよくするための訓練にも手を貸していることの証左である。中学生たちが熱心に地域の会議に参加し、新鮮な視点をもたらしていたのは、私が深い敬意を感じた瞬間だった。また、地域の皆さんのコミュニティへの愛着と街への帰属意識を感じさせる姿勢にも刺激を受けた。NPO ア！の活動は、安全な都市環境と市民の快適な生活環境を発展させる上で非常に価値あるものだった。

Preparation for Disaster: Visions of a safer future!

災害への備え：より安全な未来への展望！

Japan is a disaster-prone island, and it has a long history of interrelated hazards namely earthquakes, tsunamis, flash floods and fires. This emphasizes the necessity of understanding how to prepare and plan cities in order to be resilient in face of unknown disasters. Japanese buildings and infrastructure are famous for being quakeproof, but it was after 2011 Great East Japan earthquake and tsunami, that water related hazards became the hotspot of general public especially urban planners. Noticeable research has been conducted on disaster preparation strategies both by academia and governmental initiatives which has resulted in advanced flood protection improvements.

Iran has been devastated by disasters many times as well; for example two years ago (23-30 March 2019) flash floods damaged more than 15000 houses, wiped out villages and killed 76 people, including 21 in my hometown, Shiraz. If proper resilient design and urban planning strategies had been implemented, many of these could have been prevented. Therefore, I am determined to learn about Japan's disaster preparation strategies in order to enhance resilient measures for regeneration of vulnerable regions and save people's lives by securing their habitats.



Earthquake Kermanshah 2018
(2018年 Kermanshah 地震)



Agh-Ghala village, Golestan, Iran. April 2019
(2019年4月の Agh-Ghala 村の水害の様子)

日本は災害リスクの高い島国であり、長い間地震・津波・洪水・火災といった、相互に関連した災害に見舞われてきた。そのため、未知なる災害に適応するための備えや都市計画を編み出す必要があった。日本の建築やインフラは地震に強いことで有名だが、2011年東日本大震災の大津波以降、水災害への関心も高まっており、学术界と行政の双方で重要な研究が行われ、先進的な洪水対策が発展してきている。

Iranも同様に、長い間災害に苦しめられている。例えば2年前(2019年3月23日~30日)、大洪水により15,000棟の住家が被害を受け、私の故郷・シーラーズの21名を含む76名が亡くなった。もし適切な対応計画や都市計画の戦略が取られていれば、多くの命が助かっただろう。私は脆弱な地域を強靱化し、人々の命や住まいを守るため、日本の防災対応を学ぶことを決心した。

IRAN: A brief Introduction

Iran : 簡単な紹介

Iran is one of the ancient civilizations with more than 7000 years of history. Located in the middle of major intercontinental corridors and trade routes, it has been a strategic plateau with fertile natural resources. Iran's mountains have helped shaping both the political and the economic history of the country for several centuries. The mountains enclose several broad basins, or plateaus, on which major agricultural and urban settlements are located.

Iran is 7000 years above the history, ancient civilization flourished in the 1st. Major intercontinental corridors and trade routes are located in the center, rich natural resources are strategically important highlands. In the past centuries, Iran's mountains have helped shaping both the political and economic history of the country. Mountains enclose basins and highlands, major agricultural and urban settlements are located.



Ecological Land Use & Vegetation Map
イランの地形・植生分類地図



Location of Iran in the world map
世界地図におけるイランの位置

Almost 60 percent of the country is dominated by mountainous area, and the rest consists of deserts and arid lands. Iran includes two major mountain systems, named Alborz and Zagros. Iran's climate ranges from arid or semi-arid, to subtropical along the Caspian coast and the northern forests. You can experience all 4 seasons and completely different landscapes within a relatively close distance.

国土の約60%を山地が占め、他の大部分は砂漠や乾燥地帯から成っている。Iranには Alborz (アルボルズ) と Zagros (ザグロス) の2つの主要な山脈がある。Iranの気候は、乾燥帯・半乾燥帯から、カスピ海沿岸や北部の森林地帯の亜熱帯までが分布している。四季の全てが存在し、比較的短い距離の間でも全く異なった景観が広がっている。



Damavand Mountain, Iran.



Hirkani Jungles, Golestan, Iran.



Sar Agha Seied Village, Iran.



Darak Beach, Chabahr, Iran.

Iran has rich and versatile culture that has connected east and west throughout history. Once home to the some of the most civilized empires in the world such as the Persian Empire of Achaemenides, It has been it's cultural, natural, tangible and intangible heritage that is known worldwide. Iran is famous for its poetry, carpets, architecture, music, and spices like Saffron. Any traveler who has visited Iran, from Jane Dieulafoy (1851-1916) to Georg Grester (1928-2019) is fascinated by its architectural heritage and captivated in its Persian gardens. Traditional urban landscapes of cities such as Yazd, Isfahan and Shiraz alongside contemporary practices of architecture and urbanism, set an atmosphere that Iranian hospitality has flourished in it and invites adventurers, tourists and scholars into a transcending experience.

イランは歴史を通して、東西文化が結びついた豊かで多様な文化を持っている。かつては、アケメネス朝ペルシア帝国のような世界で最も文明化された帝国がいくつも生まれた地であり、文化的・自然的有形・無形の遺産の数々で世界的に知られている。イランは詩、カーペット、建築、音楽、そしてサフラン等のスパイスで有名である。イランを訪れた旅行者は皆、Jane Dieulafoy (1851-1916) から Georg Grester (1928-2019) に至るまで、建築遺産やペルシア式庭園に魅了されている。ヤズド、イスファハーン、シーラーズのような都市の伝統的な都市景観は、現代的な建築や都市計画の実践と融合し、イランのホスピタリティが開花して冒険家や旅行者、学者たちを素晴らしい体験へと招待する雰囲気を作り出している。

■ ペルシア語 記事要旨

ザイン کشوری پیشرو در تکنولوژی و صنعت و در عین حال با فرهنگی غنی از سنت های کهن است که همواره کاوشگران را به تجربه ی لایه های در هم تنیده ی خود جذب کرده است. تجربه ی زندگی با مردم فرهنگ های مختلف در ابعاد مختلف فردی، اجتماعی و حرفه ای بر روی انسان تأثیر می گذارد. تجربه ای که نقطه ی عطفی در زندگی حرفه ای برخی از آن کاوشگران مانند فرانک لوید رایت شد. روایت منحصر به فرد ژاپن از جریان معماری و شهرسازی در قرن بیستم آن را به زادگاه معماران سرشناسی بدل کرد که با تمسک به سنت استاد-شاگردی در آموزه های ژاپنی، سلسله ای پیوسته از نسل های متمدنی معماران و شهرسازان صاحب نظر را تربیت کردند. همبستگی جمعی نه تنها در میان متخصصین محیط مصنوع، بلکه ابتدا در میان مردم محله و شهر از کودکان در مدرسه تا سالمندان در نهاد های غیر انتفاعی و دیگر ساختار های اجتماعی آموزش و تمرین می شود. طبیعت و شرایط اقلیمی و جغرافیایی دشوار ژاپن، در طول تاریخ بارها ضرورت مشارکت اجتماعی را به آن ها نشان داده است. ژاپن در محل تلاقی چهار صفحه ی آمریکای شمالی، اقیانوس آرام، اوراسیا و دریای فیلیپین قرار دارد و لذا یکی از زلزله خیزترین کشورهای جهان به شمار می رود. علاوه بر این دولت ژاپن هر ساله با طوفان های دریایی، انواع سیل و نیز فوران آتش فشان ها درگیر است. بنابراین تجربیات متعدد ژاپن در بازسازی موفق و احیای شهرها و سکونتگاه های آسیب دیده، آن را به یکی از قطب های مدیریت بلایای طبیعی در شهرسازی تبدیل کرده است. یکی از رویکردها برای آمادگی و مقابله با بلایای طبیعی، تقویت مشارکت محلی در برنامه ریزی شهری مناطق است. نهادهای مختلف دولتی و غیرانتفاعی محلی با همکاری متخصصین دانشگاهی و سازمان های امداد و نجات در یک ساختار متداوم برای برنامه ریزی، پیشگیری و مقابله با مخاطرات اقدام به برگزاری رویدادهای مشارکتی می کنند. این رویدادها ابعاد مختلف مدیریت ریسک را با کمک شناخت، تحلیل و تمرین عملی یافته ها میسر می کنند. سمینار های واجوکایگی در شهر کاتسوشیکا یکی از این برنامه ها می باشد که تا کنون به مدت پانزده سال در جهت بازسازی، ایمن سازی و بهبود تجربه ی زیسته ی شهر کاتسوشیکا با مشارکت پیوسته ی نهاد های محلی و دولتی برگزار شده است. شهر کاتسوشیکا در شمال خلیج توکیو قرار داشته و سطح آن به طور متوسط 2 متر پایین تر از سطح دریا می باشد؛ لذا یکی از مناطق پرخطر و آسیب پذیر در برابر سیل محسوب میشود. لابراتوار ایمنی شهری از دیپارتمان شهرسازی دانشگاه توکیو با هدایت پروفیسور تاکاکی کاتو از ابتدای این پروژه به عنوان مشاور ارشد برنامه ریزی شهری مشارکت داشته است. این گزارش مختصر تجربه ی نویسنده از فعالیت در این لابراتوار به عنوان دانشجوی بین المللی و حضور در سمینار شهر کاتسوشیکا می باشد.

編集担当から



中川のテラスで釣りをする古川くん（古川修・撮影）

注目しよう！新聞記事

NPO ア！安全・快適街づくり

編集：南・渡邊

この 1 年間の水害など災害や、葛飾に関連する新聞記事を検索してみた。
2020 年～21 年にかけての記事は、例年以上に多かった。私たちが注目している
話題の関連記事が多く見つかったので、ここに掲載してみた。

2021 年 6 月 3 日 読売新聞 朝刊 25 頁より

足元に「聖地」を

※ 著作権の都合上、Web 版では見出しのみを掲載しています。

2021 年 8 月 12 日 朝日新聞 朝刊 10 頁 社説より

※ 著作権の都合上、Web 版では見出しのみを掲載しています。

広域避難

「逃げる先」の確保急げ

温暖化報告書

行動すれば希望はある

2021年6月19日 朝日新聞 朝刊 25頁より

大規模水害 命守るためには

※ 著作権の都合上、Web 版では見出しのみを掲載しています。

広域避難 255万人→74万人に絞り込み

検討会試算 自主的確保など促進へ

2021年8月14日 朝日新聞 夕刊 6頁より

島谷幸宏さん 熊本県立大特別教授 「流域治水」は国を変えるか

いま聞く Interview

※ 著作権の都合上、Web 版では見出しのみを掲載しています。

ざっとこんな災害関連等記事に気が付きました。(2020年7月～2021年8月)

日付	紙名	記事名
200717	読売	[防災ニッポン]風水害・共助 (3) 楽しめる訓練 必要 (東新小岩七丁目)
200721	日経	荒川沿い、水害対策急ぐ 江戸川・足立など5区 情報提供・避難所を拡充
200822	日経	避難呼びかけわかりやすく 「勧告」「指示」一本化へ 災害の切迫感、住民に
200828	毎日	浸水想定：浸水リスク、347万人 想定域での居住制限、難しく 被害前提の開発、避難を／埼玉
201009	朝日	広域避難、国が事前調整 浸水想定時 政府、法改正へ
201010	毎日	台風19号1年 加須市の広域避難 「まず市内へ」と見直し 「県外」望む声根強く
201014	日経	広域避難 住民どこへ 台風19号 残した課題 東京東部5区 最大250万人 自治体主導の対応限界
201016	日経	広域避難、いつ どこに 今年の台風19号 残る課題 道路が渋滞／滞在先に限り
201110	朝日	(台風19号から1年) 広域避難へ対応探る 県内自治体、災害時の課題見据え／茨城県
201212	読売	水害 首都高に「垂直避難」 江東5区 都が検討
201216	読売	モンチッチ会いに来て 葛飾の公園 新エリア 22年4月開園
201216	読売	首都高へ避難 構想評価 江東5区側 「有効な選択肢」＝東京
201221	朝日	(災害大国 いのちを守る) 大都市の被害、抑えるには
210119	読売	東京東部5区 水害 自衛隊が迅速出動 部隊配置など 対処計画策定へ
210125	読売	水害時避難 芸大と協定 足立区 千住キャンパス教室利用＝東京
210209	朝日	がんばろうぜ！ 通勤列車に朝のエール 荒川河川敷
210213	毎日	江戸川区：広域避難に補助金 水害時の実践に期待 江戸川区 /東京
210310	日経	東京・江戸川、海拔ゼロメートル地帯の「高台化」構想一点照
210329	朝日	避難所の運営、ゲームで体験 京都で30人参加 /京都府
210404	朝日	グローブ240号<気候安全保証> 東京が水没する日、映画「天気の子」のリアル
210415	読売	モンチッチ像 制作費寄付 葛飾の「セキグチ」会長 区に7760万円
210511	読売	「避難指示」に一本化 災害時情報
210603	読売	足元に「聖地」を デザインマンホール広がる
210613	読売	[防災ニッポン] 鉄道 駅パニック「最も怖い」 シナリオ 電車ストップ「津波が来る」
210619	朝日	広域避難 255万人→74万人に絞り込み 検討会試算 自主的確保など促進へ
210619	朝日	大規模水害 命を守るためには 海拔ゼロ「江東5区」
210625	朝日	都心の地下「埋没谷」見える化 泥が埋めた軟地盤 揺れや液状化に注意
210704	朝日	災害時はホテルへ、広がる支援 コロナ禍、分散避難に自治体補助
210712	朝日	(Think Gender) 「防災女子」官僚動く 「女性視点の施策を」提言書まとめ
210812	朝日	社説 「逃げる先」の確保急げ
210812	朝日	社説 行動すれば希望はある
210814	朝日	いま聞く 「流域治水」は国を変えるか 島谷幸宏さん 熊本県立大特別教授

編集部より



SDGs はどんな目標を掲げているの？

SDGsは持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) の略で、2015年9月の国連サミットで採択されました。「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする17の国際目標を掲げています。



DX (デジタルトランスフォーメーション) って？



経済産業省の定義では、「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。」

〈編集部・南 コメント〉

かつてはデジタル社会、ユビキタス社会、IT社会といった用語で、情報通信技術 (ICT) を活用した社会を表現していたが、近年はデジタル技術による社会の「変革」という側面に焦点をあてて、DXという言葉が使用されることが多くなっている。

新小岩北地区での取り組みの概要

広域ゼロメートル市街地（ゼロメートル地帯に広がる市街地）は、水害発生時の避難や被災後の復旧・復興に大きな課題を抱えている。

広域ゼロメートル市街地に位置する葛飾区新小岩北地区では、新小岩北地区連合町会、当NPO、葛飾区、専門家など、多様な主体が協働して、「防災“も”まちづくり」によって、大規模水害に備える取り組みを進めてきた。

新小岩北地区では、定期的に、多様な主体が一堂に集い、それぞれの取り組みにおける経験や工夫を共有する「輪中会議」を開催し、次の展開を話し合っている。

世代を超えた持続性を創出するために、当NPOは、大学、地域と協働して、小学校への出前授業や中学校の部活支援も行っている。

浸水への備えを有し、かつ、河川の恵みも活かした「浸水対応型市街地」を長期的に形成する方法についても議論が始まっている。

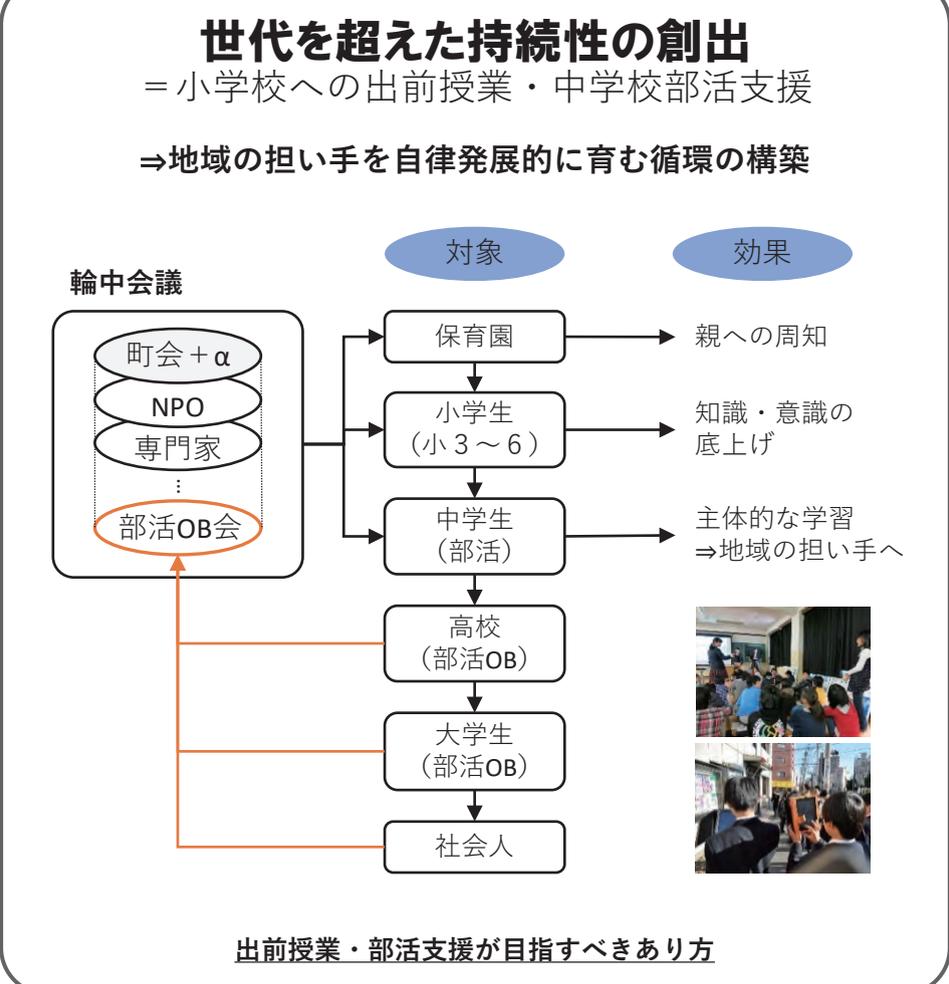
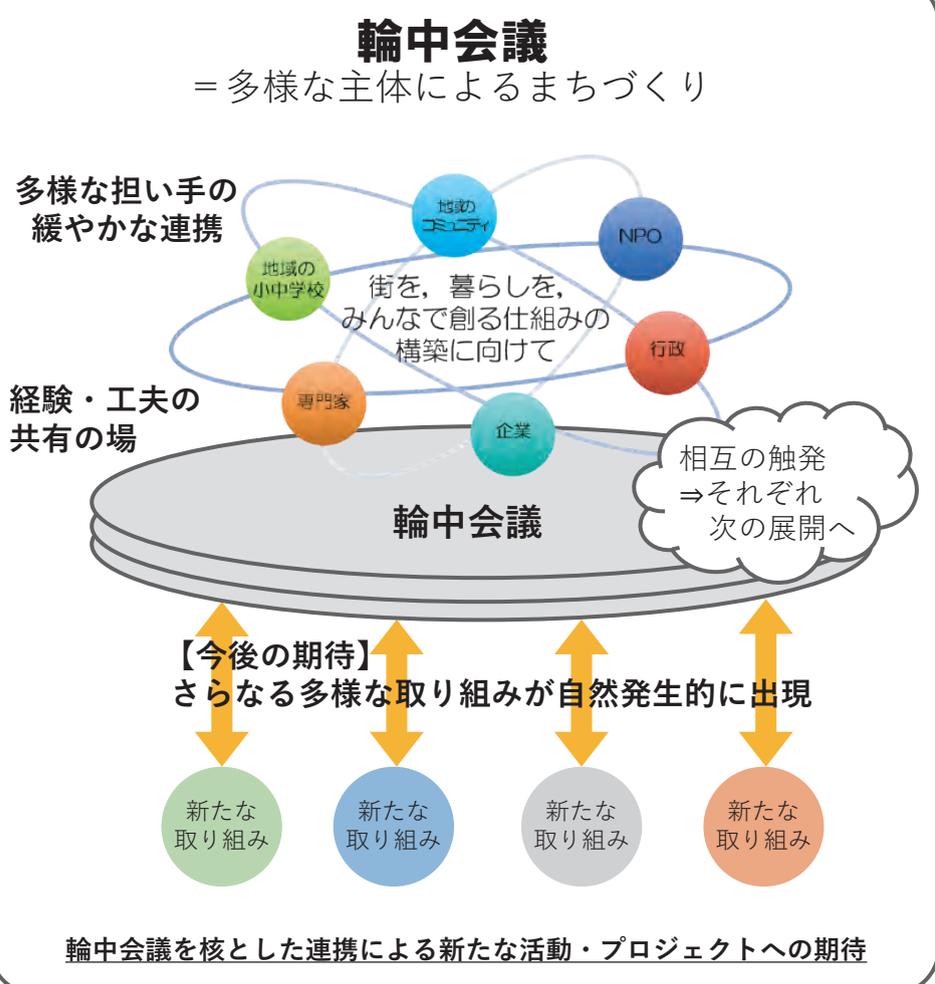


たとえば
「防災“も”まちづくり」 ← 豊かな暮らし + 親水まちづくり + 高齢社会対応 + 防災 + 色々

防災“だけ”のまちづくりではなく、
 防災“も”含めた総合的な視点で取り組むまちづくり

防災“も”まちづくりを持続的に進めるためのキーワード 4 + 1

- ①総合性
 - 防災以外の地域課題、他の目的もあわせて取り組むこと
 - ②内発性
 - 自分たちが必要だと思うから、やりたいと思うから取り組むこと
 - ③自律発展性
 - 取り組みの内容が雪だるま式に膨らんでいくこと
 - ④多様性
 - 参加者の立場やキャラクター、参加組織、活動内容が多種多様であること
- +
- ⑤市民先行・行政後追い
 - 先行的な市民の取り組みを、後から行政がきちんとサポートすること

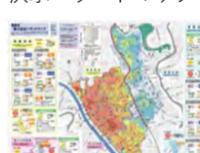
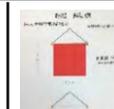


新小岩北地区における活動の系譜～防災“も”まちづくり～

作成：塩崎由人・渡邊喜代美・南貴久
(NPOア！安全・快適街づくり)

多様な主体による取り組み

	知る 《情報・経験を共有する》	考える 《対策を検討する》	協働体制をつくる	研究する (専門家・大学)	俯瞰する
2002	2004年 川の冷気の測定 / 2005年 水位表示ポールの設置				
2005	ワークショップ	<p>第1～5回ワークショップ 地域の水害リスクや行政の防災体制の現状を勉強した。それらを踏まえ、水害発生時に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討してきた。</p>	<p>ワークショップ開始時</p>		
2006	<ul style="list-style-type: none"> ● 第1回 2006年12月 ● 第2回 2007年1月 ● 第3回 2007年4月 ● 第4回 2007年12月 ● 第5回 2008年2月 			<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップの支援 ・水害リスクに関するデータの作成 ・水害リスク学習ツールの開発 	<p>2008年</p> <p>5月 シンポジウム「大規模水害に備える」 10月 全国まちづくり会議 in 恵庭</p>
2009	<ul style="list-style-type: none"> ● 第6回 2009年4月 ● 第7回 2009年5月 	<p>町会の方がGISを活用して、町会の人たちと水害リスク情報を共有</p>	<p>西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会</p> <p>町会、NPO、専門家、葛飾区、東京都、国から成る勉強会を立ち上げ、広域ゼロメートル市街地における水害対策の検討を行った。検討の結果として、①安全避難高台の確保、②浸水対応型建築物の整備、③近隣継続計画、④輪中共同体会議の設立、の4つの方向性が共有された。</p>		<p>2009年</p> <p>9月 全国まちづくり会議 in 川崎 パネル展示</p>
2010			<p>新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会</p>	<p>Google Earth を利用した水害リスク学習ツール</p>	<p>6月 国際交流イベント 「水害に備える安全・快適まちづくりシンポジウム」 10月 全国まちづくり会議 in 熊本</p>
2011	<ul style="list-style-type: none"> ● 第8回 2011年2月 ● 第9回 2011年3月 <p>世代を超えた持続性の創出</p>	<p>地域の大人と中学生がともに地域の水害リスクについて学習</p>	<p>新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会の設立</p>	<p>2011～2013年度 浸水対応型市街地研究会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要な避難空間の推計 ・高台、浸水対応型建築物のあり方の検討 ・浸水対応型市街地の形成戦略の検討 	<p>1月 国際交流イベント 全国まちづくり防災フォーラム</p> <p>10月 全国まちづくり会議 in さいたま</p>
2012			<p>安全・快適まちづくり輪中会議</p>		<p>3月 シンポジウム 「街を、暮らしを、みんなでどう守るか」 9月 全国まちづくり会議 in 神戸</p>
2013	<ul style="list-style-type: none"> ● 2013年8月 未来の大人まちづくり会議 in 東大 (葛飾・南三陸・茅ヶ崎・伊座利) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 9月 第1回 「持ち寄りの共助」 ● 10月 第2回 「持ち寄りの共助」 ● 12月 第3回 「わからないことをなくす」 ● 2月 第4回 「iPadで地域を観察する」 ● 3月 被災地訪問 宮城県南三陸町 	<p>輪中会議</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災アプリの開発 「天サイ！まなぶくん」 	<p>3月 シンポジウム 「大規模水害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」 10月 全国まちづくり会議 in 長岡</p>
2014		<ul style="list-style-type: none"> ● 2月 第5回 「経験の共有」 ● 3月 第6回 「これからの協働のあり方を考える」 ● 10月 第7回 「高台化のあり方を考える」 	<p>現在の協働体制</p>		<p>3月 シンポジウム 「これからの協働のあり方を考える」 10月 全国まちづくり会議 in 北上</p>
2015		<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第8回 「経験を共有し、深め、輪を広げる」 			<p>10月 全国まちづくり会議 in 東京</p>
2016		<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第9回 「地域の新たな状況を共有し、未来を考える」 		<p>水辺ルネサンス構想 (仮称) の検討</p>	<p>11月 三氏を語る会 「地域のこれからの語る」</p>
2017		<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第10回 「経験を共有し、未来を考える」 	<p>浸水対応型市街地の検討 ～水害リスクと賢く共生する親水都市へ～</p>		<p>9月 シンポジウム「災害から学ぶ」 第一部 カスリーン台風の記憶と経験の共有 第二部 水害リスクと賢く共生する親水都市へ 10月 全国まちづくり会議 in 横浜</p>
2018		<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第11回 「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」 			
2019		<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第12回 「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり」 			
2020	<p>コロナ禍</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月 第13回 「親水・浸水×まちづくり×ひとづくり 発展系 (未来へ・・・)」 (幻の輪中会議：コロナ禍により中止) 			
2021		<ul style="list-style-type: none"> ● 5月 第14回 Web輪中会議 「親水・浸水×まちづくり・ひとづくり×近所・近助」 		<ul style="list-style-type: none"> ・「天サイ！まなぶくんII」の開発 	<p>9月 全国まちづくり会議 in 東京</p>

NPO	町会	小中学校	PTA	福祉施設 民生児童委員	地域の有志	行政
<p>2002年 NPOア！安全・快適街づくり設立</p> <p>2005年 機関誌「ア！安全・快適街づくりニュース」</p> <p>2005年 水位表示ポールの設置</p>	<p>町会独自の取り組み</p> <p>ワークショップの開催</p>	<p>世代を超えた持続性の創出</p>	<p>PTA</p>	<p>福祉施設 民生児童委員</p>	<p>地域の有志</p>	<p>行政</p>
<p>2006年 ボード乗船下船・親水体験 「葛西海浜公園へ行こう」</p> <p>2008年3月 「川から街を見る」</p> 	<p>2009年11月 松戸市21世紀の森と広場への避難訓練 西新小岩3丁目公園での炊き出し訓練</p> 					<p>2007年～洪水ハザードマップの配布（区）</p>  <p>2009年 区民や事業者等への水害出前講義の開始（区） まるごとまちごとハザードマップ（国）</p>
<p>2011年 ゼロメートル市街地協議会の運営 ・シンポジウムの企画 ・輪中会議の運営</p> <p>小中学校での出前講座</p>	<p>避難用ボード使用訓練</p>  <p>水害も考慮した避難所運営会議</p> 	<p>上平井中学校 地域防災ボランティア部の取り組み (NPO・大学も支援)</p> <p>小学校での出前授業</p>	<p>学習支援の連携</p>			<p>大規模水害対策検討委員会設置（区）</p> <p>中川テラス開園（区）</p> <p>都市計画マスタープランの改訂による 高台避難場所の位置づけ（区）</p> <p>「事業継続計画作成のすすめ」 を作成（国）</p>
	<p>水害を想定した避難訓練の実施</p> 	<p>2012年8月 第56回全国特別活動研究協議大会にて発表 「水害の調査研究」</p>				<p>「水害時における民間集合住宅との一時避難締結に係わるガイドライン」 を作成（国）</p>
	<p>赤旗白旗救援訓練</p> 	<p>ふたがみこどもまつりでのボート体験</p> 	<p>松上小学校への避難訓練 (たつみ保育園)</p> <p>東京都認可保育園BCP作成の義務化</p>	<p>アレルギーガイドライン 非常食アレルゲン除去食の購入</p> <p>高齢者向けの防災講演会 水防法改正の説明会</p>	<p>水害時避難用高台整備勉強会 (西新小岩3丁目有志)</p> <p>おれたちの朝旅</p> 	<p>防災アプリ「天サイ！まなぶくん」 配信開始（区）</p>  <p>高台整備事例：東京理科大 葛飾キャンパス 1.5m程度の盛土を実施</p>
	<p>民間マンションとの水害時一次協定締結</p> <p>中学生と共同で防災訓練 スタンドパイプの練習会</p>	<p>「古井戸」の説明板作成</p> 				<p>洪水緊急避難建物への指定（区）</p> <p>避難確保計画のひな型作成（区）</p> <p>防災啓発DVDの作成（水害編）（区）</p> <p>タイムラインの検討（国）</p>
<p>モザンピーク研修生受入れ Web事務局会議</p>	<p>東新小岩7丁目市民消防隊 女性隊結成</p>	<p>子供たちのマイタイムラインづくり</p>	<p>地域住民と連携した避難体験</p>			<p>洪水緊急避難建物への備蓄物資配備（区）</p> <p>水害に強い建物を促進する街づくりルール検討中（区）</p> <p>消防団へのゴムボートの貸与（区）</p> <p>江東5区大規模水害対策協議会</p>
<p>「古井戸」の活用 説明板づくりWS (2019年11月)</p>	<p>内閣府・災害避難カード ワークショップ</p> <p>（東新小岩7丁目町会、 内閣府、葛飾区、 NPO、大学）</p>	<p>防災マップの作製</p> 			<p>勉強会から区への提言 区からの回答の受理</p> 	<p>要配慮者利用施設を対象とした水害時の 避難計画作成支援（区）</p> <p>新小岩公園の高台化へ（区）</p> <p>内閣府・災害避難カードワークショップ</p>
<p>「古井戸」の活用 説明板づくりWS (2019年11月)</p>	<p>「犠牲者ゼロ」の実現に向けたワークショップ</p>	<p>「古井戸」の説明板作成</p> 				<p>浸水に対応した街づくり検討会（区）</p> <p>「犠牲者ゼロ」の実現に向けたワークショップ（区）</p>
<p>モザンピーク研修生受入れ Web事務局会議</p>	<p>東新小岩7丁目市民消防隊 女性隊結成</p>	<p>子供たちのマイタイムラインづくり</p>	<p>地域住民と連携した避難体験</p>			<p>「古井戸」の復元（区・都）</p> <p>ハザードマップの見直し（区）</p>

人を育みし川 中川

朝は 味香
 夕日 染る
 スカイ ツー
 老驥 千里
 夕陽 街
 森羅 家
 万葉 草
 人を育みし川
 中川
 如雪 石川金治

書と作詞は石川金治。「人を育みし川、中川」の詩文全体は、北新小岩地域を流れる、中川の豊かさを、いつも感じているので、その讃辞の詩。この“老キ千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい

文言を探した結果です。また作詞のもう一つの動機は、“事務局会議終了後、渡邊さんと塩崎さんと3人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしました”と石川さんは語った。そのとき渡邊が老驥、老驥とは、と問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老驥、老驥は個性あふれる表現という。石川さんは千の風によって逝ってしまったが書は今も生きている。中川があるかぎりしばらく表紙に登場いただく。

2016年、鈴木町会長、徳倉会長、石川理事長と惜別するも、3人の志は今も活動の中で生き、引き継がれた人たちによって新たな展開をしている。今、2021年。

……………♪27号 編集後記♪……………2021・09

▼NPOア！創設から20年▼コロナ禍中といえども、地域の学校出前授業、部活支援▼Webで中川さんの体験談も何う▼また部活卒業生が高校生となって独自に河川を観察している、あるいは輪中会議参加とか、うれしい発信もあった▼コロナ禍中にて2021Web「輪中会議」でした。渡邊、加藤、南の連携プレイで参加者総勢70から80人。結構うまく運営できたと思っています▼全体のお席はそれぞれ▼Web上で参加者記念撮影をするという南さんの離れ業もあっておもしろかった▼「輪中会議」全記録収録は頑張りました▼事務局会議や編集会議もZOOM会議となりました。▼人類の大惨事となって、地球上がコロナウイルスにやられた感です。▼NPOア！の活動もコロナ禍中にては創意工夫が求められそうですがそこから見えるものもあります▼遠方に居ても参加できるなどは、最大のメリットかもしれません。しかし顔を合わせて共有することの大事さもわかりました▼近年水害被害も超多発。地球環境はますます災害の巨大化が進む方向に▼災害ニュースは水害、火災、地盤の崩壊、世界共通の被害が続発している▼災害と避難は、コロナ禍が加わって、新たな局面をむかえる。こちら世界共通の課題▼これからは“災害リスクと賢く共生した親水都市”“浸水対応型市街地形成”“浸水対応型建築”“避難のかたち”も議論を重ねるだろう▼そして世界へ発信することにもなる▼私たちの暮らし方の問題も大きい▼誰でも使える「天サイまなぶくんⅡ」の完成も待たれる▼災害と避難は、コロナ禍が加わって、新たな局面をむかえるも地域と一体となって役立つアプリの誕生が待たれる▼さて今号もコロナ禍にもめげずに、多様貴重な寄稿をいただいた。感謝いたします▼南さんは博士論文に挑戦中▼渡邊は介護体験から新たなことごとを学び、まとめたと思っている▼若者の力も借りてZOOMで編集作業！▼“ZOOMで編集”も毎週になりますが(笑)▼最終校了は南・渡邊で▼今号もすばらしい総集編となりました▼皆よく頑張っている♪いいね！▼またも100ページ超えとなった冊子はまたも“重い”けどかなりおもしろい▼楽しんでご覧ください(渡邊)

編集会議：渡邊喜代美(総括)・南貴久・小豆嶋勇誓

「特定非営利活動法人 ア！安全・快適街づくり」
 〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号
 電話 / FAX 03-3696-7480
 ホームページ：<http://www.banktown.org/>



